鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（205）
鶴丸城跡保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１

鹿児島（鶴丸）城跡

―御楼門跡周辺―

（鹿児島市城山町ほか）

２０２０年３月
鹿児島県立埋蔵文化財センター

御楼門跡・虎口周辺

序　文

鹿児島城は，慶長６（1601）年頃に初代薩摩藩主，島津家久（18代当主）により築かれた城で，別名鶴丸城と呼ばれています。今日まで度重なる建物の焼失や再建，石垣の崩落や修復を繰り返しており，御楼門は明治６（1873）年に本丸とともに焼失，本丸南東角にあった御角櫓も明治10(1877）年の西南戦争の際に焼失いたしました。それ以降，石垣，堀，御楼門橋を残して往時の姿をうかがい知ることはできません。明治４(1871）年の廃城以降，鹿児島城跡には官立第七高等学校造士館，鹿児島大学，鹿児島県歴史資料センター黎明館，鹿児島県立図書館などの施設が建設され，近現代においても城内の姿は刻々と移り変わってきました。

西南戦争からおよそ140年が経過した現在，鹿児島城跡には御楼門の復元・建設が計画され，令和２年３月には完成いたします。今回の御楼門建設は400年にわたる鹿児島城跡の歴史の中でも非常に大きな画期であり，新たな歴史的転換期を迎えたと言えるでしょう。

本書は平成26年度から30年度にかけて実施した鶴丸城保全整備事業に伴う発掘調査の成果の一部を記録した埋蔵文化財発掘調査報告書です。調査では礎石や地業等の御楼門の基礎構造や排水溝，石垣の裏込め，石塁等の遺構も発見されました。また，鬼瓦をはじめとする瓦や陶磁器等，江戸時代の城内の様子を物語る遺物が多量に出土いたしました。これらの考古学的成果は，これまで知られていなかった鹿児島城の機能や構造を解明し，既存の文献や絵図等を裏付ける基礎資料となるものです。本報告書が未来につながる鹿児島城跡の保全整備と，これまで明らかにされていなかった地域史の再発見やまちづくりの一助となれば幸いです。

結びに，円滑な埋蔵文化財発掘調査にご理解・ご協力をいただいた地域の皆様，ご支援・ご協力いただいた関係者の皆様・関係機関に厚く御礼を申し上げます。

令和２年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　前迫　亮一

報告書抄録

ふりがな	かごしま（つるまる）じょうあと
書名	鹿児島（鶴丸）城跡
副書名	御楼門跡周辺
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第205集
編集者名	永濱功治・阿比留士朗・藤﨑光洋・山崎克之
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
	電話　0995-48-5811　ファックス　0995-48-5821
発行年月	西暦2020年３月

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間（平成30年度まで）	調査面積（平成30年度まで）	調査起因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
かごしまじょうあと 鹿児島城跡	かごしまけん 鹿児島県 かごしまし 鹿児島市 しろやまちょう 城山町 ほか	201	62	31° 35′ 54.0″	130° 33′ 20.4″	①2015/1/19 ～2015/3/13 ②2015/3/11 ～2016/3/11 ③2016/5/09 ～2017/3/11 ④2017/4/24 ～2018/3/16 ⑤2018/5/14 ～2019/2/22	①85㎡ ②302㎡ ③890㎡ ④1,208㎡ ⑤660㎡	鶴丸城跡保全整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鹿児島城跡	城跡	縄文～中世	－	青磁，青花	
		近世	御楼門礎石・地業，三和土，門番所跡，御兵具所跡，御兵具奉行張番所跡，唐門跡?，排水溝，石垣，石垣，裏込め	瓦（軒丸・軒平・丸・平・軒桟・桟・鬼・鯱・棟込・輪違い・海鼠瓦・棟・桁・鳥伏間），染付，青花，陶器，土器，石製品（日時計），金属製品（釘・古銭）	
		近・現代	砲弾・銃弾痕，鉄鉄管，岩崎行親像台座，天文観測室跡，テニスコート跡	瓦（軒桟・桟・軒丸・軒平・丸・平），陶磁器，石製品（硯・砥石・島津珍彦銅像銘），金属製品（釘・鉛玉・薬莢・古銭），ガラス製品（薬瓶・インク瓶・試験管等）	

遺跡の概要	鹿児島城は慶長６（1601）年頃，薩摩藩初代藩主（18代当主）島津家久により築城された館づくりの近世城郭である。別名鶴丸城とも呼ばれ，築城以降，度重なる大火による焼失や自然災害による建物，石垣等の崩落・修復を繰り返し，現在は一部の石垣と堀，橋が残されている。本事業に於ける発掘調査では，近世城郭を構成する遺構として，御楼門の礎石，地業，三和土面，石畳，排水溝，石垣，御兵具所建物跡の基礎，石垣，裏込め等を検出した。遺物は多量の瓦を中心に陶磁器，石製品，金属製品等が出土した。特に瓦は軒丸瓦，軒平瓦，平瓦，丸瓦の他に鬼瓦，鯱瓦，海鼠瓦等，多種多様の瓦が出土した。鹿児島城は明治４（1871）年に廃城となり，明治10（1877）年の西南戦争時の遺構・遺物は，石垣や石畳に残された銃・砲弾の痕跡，鉛玉，砲弾片等の遺物が出土し，官立第七高等学校造士館，鹿児島大学に関連する近現代の遺構・遺物も出土した。近世以降の調査成果に関しては，文献，古写真，絵図等と発掘調査の成果が整合・関連する部分もあり，南九州における近世城郭の様相や機能，変遷，社会情勢等の一端がうかがえる資料となった。

鹿児島城跡位置図（S= 1/50,000）

例　言・凡　例

1　本書は，平成 26 ～ 30 年度に実施した鶴丸城跡保全整備事業に伴う鹿児島（鶴丸）城跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，鹿児島県教育庁文化財課が調査主体となり，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　整理・報告書作成作業は，平成 28 ～ 31 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　本遺跡は通称「鶴丸城」と呼称される場合もあるが，他の機関等で使用している場合等を除き，本書では文献にある「鹿児島城」を使用する。

5　本書で用いる「薩摩藩」は「薩摩国」，「大隅国」，「日向国の一部」を含めた広義の意味でのものとして用いる。

6　掲載遺物番号は通し番号であり，本文，挿図，表及び図版の遺物番号と一致する。

7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。基本的に瓦は S=1/4，陶磁器は S=1/3 とした。

8　本書で使用した方位は磁北である。

9　発掘調査における実測図作成は調査担当者が行い，一部は株式会社九州文化財研究所，新和技術コンサルタント株式会社に委託して作成した。

10　発掘調査における写真撮影は調査担当者が行い，空中写真撮影は株式会社ふじた，九州航空株式会社に委託して撮影した。

11　発掘調査成果の内容及び土層の色調等の表現については，原則として現場担当者による注記を用いた。また，土色の記述にあたっては，「新版　標準土色帖」，陶磁器胎土色は「標準色カード 230」（いずれも日本色研事業株式会社発行）に基づき，掲載した。

12　本書の地図は，国土交通省国土地理院発行の「鹿児島」（縮尺 1/50,000）「鹿児島北部」（縮尺 1 /25,000）の地形図を複製し，第 1 図は国土交通省地理院発行の「鹿児島」（縮尺 1/200.000）の地質図を複製して使用した。

13　本書で使用した測量原点の座標値は，世界測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。

14　調査区を 5 m 間隔のマス目（グリッド）で区切り，調査を行った。グリッドは御角櫓南東角を基準として東（国道 10 号線）側の石垣に平行に軸及びグリッドを設定した。

15　遺物への注記は，遺跡名をアルファベット 3 文字で「KSJ」と表し，出土地点・出土層位等を記入した。

16　整理・報告書作成作業における遺物の実測図・トレース図作成に係わる業務は，陶磁器を株式会社埋蔵文化財サポートシステム，株式会社九州文化財研究所に委託し，中村（和），阿比留，永濱が監修した。

17　瓦の同定・分類は金子智（株式会社乃村工藝社）が行い，瓦金紋に関する指導・助言及び玉稿をいただいた。

18　軒丸瓦，軒平・軒桟瓦，小菊瓦の観察表作成は福薗慶明が行った。

19　本書の編集は永濱・阿比留が行った。

20　出土遺物及び実測図・写真等の記録類は，鹿児島県立埋蔵文化財センターが保管している。

21　本書に掲載する氏名はすべて敬称，職名，所属を略する。

22　発掘調査，整理作業期間中に御指導・御助言をいただいた方々は以下のとおりである。

　揚村固，淺川道夫，鰺坂徹，池畑耕一，大木公彦，太田秀春，小野健吉，金子智，上村俊雄，河崎絵衣，岸野純一，北垣聰一郎，北野博司，齋藤達志，嶋谷和彦，高橋信武，寺田仁志，戸崎勝洋，中村直子，西形達明，橋本達也，本田道輝，松井敏也，松尾千歳，獅榮久志，三木靖，宮武正登，本中眞，山本達也，吉村龍二，渡辺芳郎

23　瓦の観察表において，以下の簡略表現を用いた。

　瓦径→瓦当直径　文径→文様区直径　内径→主文様直径
　芯径→花芯直径　瓦厚→瓦当厚さ　体幅→体部幅
　奥行→体部の奥行き

また，観察表における「掲載」項等では，既刊の発掘調査報告書の報告書名を以下のように略し，併せて掲載番号等を示す。

本丸：県（26）「鹿児島（鶴丸）城本丸跡」1985
二丸：県（60）「鹿児島（鶴丸）城跡二之丸遺物編」1991
市二丸 G：市（28）「鹿児島（鶴丸）城二之丸跡 G 地点」2000
保存活用計画：「鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画」2018
修景整備報告書：「鹿児島（鶴丸）城跡修景整備報告書」2019

24　瓦の実測図における漆喰付着範囲，遺構図における三和土の範囲，御櫓門礎石や石垣等に認められる赤色化した範囲は以下の色（CMYK）で表現する。

K10	漆喰付着範囲	M88,Y100	赤色化範囲
K20	三和土範囲	Y100,M80 不透明度 20%	焼土範囲

25　瓦の分類について

御櫓門周辺で出土した瓦は 40cm × 60cm × 15cm の容量のコンテナ約 1,300 箱にも及ぶ量であり，その大半は平瓦・丸瓦および桟瓦の細片である。本報告では，瓦当文様を有する軒丸瓦，軒平瓦，軒桟瓦，小菊瓦について文様により分類を行い，各分類のうち遺存状態の良好なものを図化し示した。なお，これらのうち文様の一部しか確認できない破片資料については，一部特徴的なもの以外は，明らかに別分類と思われるものについても分類番号を設定していない。今後の調査により全形が判明した際，改めて設定されることが期待される。

今回分類を行わなかった他の瓦種については，遺存状態の良好なものおよび特徴的なものを図示した。以下に瓦の分類基準，ならびに軒丸瓦，軒平瓦，軒桟瓦，小菊瓦の分類概要を示す。

瓦分類の概要

瓦種	ここでは屋根の各部分で使い分けられる形の異なる瓦の種類を「瓦種」と表現する。複数の瓦種によって一つの屋根が構成されるが、屋根の形によって使われる瓦種や使われない瓦種がある。また他の瓦種を加工することによって利用することも少なくないので、同様の屋根でも使われていない瓦種がある。例えば、熨斗瓦という瓦種は専用に制作されることは少なく、平瓦を縦に割って横使いすることが多い。瓦種の呼称は時代や地域等によっても異なる。
文様の表記	一般的な文様を指す場合は「文」(例:連珠三巴文)、家紋を指す場合は「紋」(例:牡丹紋)の文字を用いた。枠やマークと組み合わさる場合は「丸に○○文(紋)」「山に○○文(紋)」という表現をする。なお、通常すべてに枠があるもの(連珠三巴文や牡丹紋など)では「丸に」を省略した。別印等の文様表記に「○」とあるものは文字を指す(例:「山」刻印)。
分類方法	出土した瓦は瓦種ごとに分類し、分類番号を付した。瓦の軒先に付される「垂れ」の部分を「瓦当(がとう)」と呼び、軒瓦(軒丸瓦、軒平瓦、軒桟瓦)はこの「瓦当文様(がとうもんよう)」を基準に分類した。小菊瓦は棟瓦であるが、瓦当に対応する文様面を有するため、この文様を基準とした。江戸時代の瓦は基本的に型(木型:范<ruby>范<rt>はん</rt></ruby>)で作られるため、この型に従って分類し、文様の構成が同じでも型が違うものについては別の番号とした。 分類番号は、軒丸瓦、軒平瓦、軒桟瓦は多数にわたるため、あらかじめ文様の系統別に大分類を行い(アルファベット大文字で表現)、その後連番を付した。なお、各大分類ごとの番号の数字については、確認された順に随時付していたため、その順序については意味や法則性はない。そのため順位した文様が離れた番号になっているものが多数あるので留意されたい。 分類においては、既報告資料で分類可能なものについても、報文等により極力分類に含めるよう努めたが、実見できなかった資料については確定しがたい部分がある。今後精査が必要である。 なお、屋根は複数の瓦種で構成されているため、それぞれのセット関係を把握する必要があるが、多くの資料が混在して出土しているためセット関係を把握できたものは少ない。確実と思われるものについてのみ観察表に記した。

1 軒瓦

江戸時代の瓦葺屋根では、軒先の瓦にはほぼ文様が入る。文様は范(木型・スタンプ)で押されるため、屋根には原則として同じ模様の瓦が並ぶ。軒桟瓦は単独で軒を構成するが、軒丸瓦と軒平瓦は組み合わせて使用される。

(1) 軒丸瓦の分類

概要	軒丸瓦は、軒平瓦とともに本瓦葺屋根の軒先を飾る。桟瓦葺でも少数使用される。 軒丸瓦の文様には、江戸時代には「連珠三巴文」が一般的に用いられている。既製品の瓦にはほぼ全国的にこれが使われており、職人はこれを水の満巻きと解して、火事防止への願いを込めたものもいわれる。 連珠三巴文以外の文様が用いられている場合は、特注の「家紋瓦」である可能性が高い。ただし、鹿児島城の場合は朝鮮系と思われる独自の文様が見られるため、これらは単独のデザインと考えられる。 軒丸瓦の文様は隅軒丸瓦や鳥伏間瓦など、円形の瓦当を有する瓦にも流用されている。
大分類	瓦当文様により、以下の3種に大別した。 A種:連珠三巴文 B種:牡丹紋(鳥津家家紋瓦) C種:それ以外の文様 分類数は既製文様であるA種が多く、次いでB種・C種となる。観察表中珠文数の()は推定数。巴文の巻きについては、左右表記が異なる場合があるが、ここでは頭の向いている方向を基準に右巻、左巻と表現した。

(2) 軒平瓦・軒桟瓦の分類

概要	軒平瓦は、軒丸瓦とともに本瓦葺屋根の軒先を飾る。桟瓦葺でも少数使用される。 軒平瓦の文様は、江戸時代には「均整唐草文」が一般的に用いられる。左右対称のつる草文様で、「中心飾り」から左右に展開する「唐草」(巻き込みの方向が異なる単位)、「子葉」(巻き込みのない単位)の組み合わせから成るものが多いが、連続するものもあり表現は様々である。江戸時代の後半になると、生涯の活発化に伴って文様の画一化が進み、地域色が生じる。均整唐草文以外の文様は江戸時代には稀である。 軒桟瓦は、軒丸瓦と軒平瓦を結合した形状の瓦で、江戸時代中期以降葺かれた新しい形の瓦である。軒丸の丸い部分を「軒丸部」、縁長い部分を「軒平部」と称する。軒丸部は鹿児島城の場合、軒先から見て向かって左側に付く。桟瓦の引掛けが軒先から向かって左側にあり、全国的にもスタンダードな形状である。軒丸部の文様は、軒丸瓦の文様を踏襲した連珠三巴文で、その省略形の三巴文(連珠部が無い)が使われるほか、稀に家紋が使用される。また軒丸部を完全に省略したものも見られる(本報告では形状から「鎌形軒桟瓦」と記した)。軒平部には軒平瓦の文様が踏襲される。 軒平瓦と軒桟瓦は、向かって右側の破片では識別が難しい。軒桟瓦の文様分類についても主に軒平部で行っているため、ここでは「軒平・軒桟瓦」として一括して分類番号を付した。
大分類	軒平部の瓦当文様により、以下の3種に大別した。 A:「大板式」(大阪地域を中心に近畿後半広く流布した文様構成)。 文様構成は、中央から中心飾り一上向きの唐草一子葉という組み合わせが基本形。中心飾りは、中央に橘状の要素があり、両脇に丫字の要素、両脇下部に横に広がる要素がある。(中心飾りの「中央上」「中央下」「脇上」「脇下」と表現。) B:仮称「鹿児島式」(「大板式」文様をベースに創案されたと思われる文様。文様両端下方に、唐草もしくは子葉一対が配されるのが特徴) C:大阪式の変形(「大板式」文様をベースに創案されたと思われる文様。両端に「く」の字形の子葉を配する) D:その他 なお、A種のうち、丫字状の中心飾りの脇および子葉に深く切れ込みが入るタイプはこの地域に特徴的なもので、B種とともに江戸後期以降の鹿児島城の瓦を象徴する文様とみられる(現存建築に見られる軒桟瓦の文様も多くはこれらに属するようである。)

2 棟込瓦

棟瓦のうち、飾り瓦として使用される瓦を棟込瓦と呼ぶ。鹿児島城では小菊瓦と輪違瓦が確認されているが、ここでは文様を有する小菊瓦のみを分類対象とした。

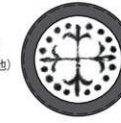
概要	小菊瓦は、屋根の棟において熨斗瓦の間に差し込んで飾りとして用いられる。小菊瓦の文様は伝統的に菊花文が定番的に用いられる(巴文・連珠三巴文が使われることもあるが少ない)。菊花文以外が使われる場合は、軒丸瓦同様家紋の可能性が高い。
大分類	瓦当文様により分類した。菊花文以外に「三追桝紋」1種が確認されているが、分類少数のため一括して連番とした。

軒丸瓦文様

A種
（連珠三つ巴文）

B種
（牡丹紋）

C種
（その他）



（※一例）

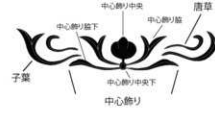
軒平瓦・軒桟瓦（軒平部）文様

軒平瓦

軒桟瓦

軒桟瓦（鎌軒桟瓦）

A種
（「大坂式」）



B種
（「鹿児島式」（仮））

C種
（「大坂式」の変形か）

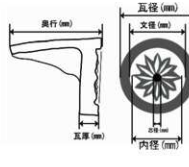
D種
（その他）

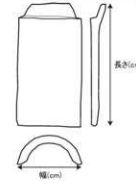
（※一例）

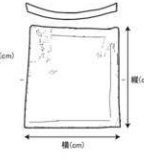
小菊瓦文様

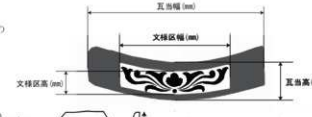
（菊花文）

26　観察表及び総括におけるの瓦の計測部位については以下のとおりである。









目　次

序文
報告書抄録
例言・凡例
第Ⅰ章　発掘調査の経過
　第1節　調査に至るまでの経緯……1
　第2節　鶴丸城跡保全整備事業について……1
　第3節　発掘調査の経過……2
　第4節　整理・報告書作成作業の経過……8
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　第1節　地理的環境……9
　第2節　歴史的環境……11
第Ⅲ章　調査の方法と成果
　第1節　調査の方法……17
　第2節　層序……21
　第3節　発掘調査の成果
　　1　遺構……29
　　2　遺物
　　（1）瓦……63
　　（2）陶磁器……108
　　（3）土器……110
　　（4）石製品……110
　　（5）金属製品……110
　　（6）ガラス製品ほか……111
第Ⅳ章　自然科学分析……118
第Ⅴ章　総括……123
写真図版……129

挿図目次

第1図　鹿児島城跡周辺地質図……10
第2図　島津氏系譜図……11
第3図　鹿児島城跡周辺遺跡位置図……12
第4図　島津家歴代の居城位置図……14
第5図　鹿児島城跡周辺における居城位置図……14
第6図　測量基準杭位置図……17
第7図　鹿児島城跡　城域図等……18
第8図　トレンチ配置図（平成26～30年度）……19
第9図　土層断面図……21
第10図　土層断面図……22
第11図　土層断面図……23
第12図　土層断面図……24
第13図　土層断面図……25
第14図　土層断面図……26
第15図　土層断面図……27
第16図　土層断面図……28
第17図　挿図位置図……29
第18図　御楼門周辺遺構配置図……33
第19図　遺構平面図……35
第20図　遺構平面図……36
第21図　遺構平面図……37
第22図　遺構平面図……38
第23図　遺構平面図……39
第24図　遺構平面図……40
第25図　遺構平面図……41
第26図　遺構立面図……42
第27図　遺構立面図……43
第28図　遺構平面図……44
第29図　遺構平面図……45
第30図　遺構平面図……46
第31図　遺構平面図……47
第32図　遺構平・立面図……49
第33図　遺構平・立面図……50
第34図　遺構平・立面図……51
第35図　遺構平・立面図……52
第36図　遺構平・立面図……53
第37図　遺構平・立面図……54
第38図　遺構平面図……56
第39図　遺構平面図……57
第40図　石垣立面図……58
第41図　石垣立面図……59
第42図　石垣立面図……60
第43図　石垣立面図……61
第44図　石垣立面図……62
第45図　軒丸瓦……70
第46図　軒丸瓦……71
第47図　軒丸瓦……72
第48図　軒丸瓦……73
第49図　軒丸瓦……74
第50図　軒丸瓦……75
第51図　軒丸瓦……76
第52図　軒平・軒桟瓦……83
第53図　軒平・軒桟瓦……84
第54図　軒平・軒桟瓦……85
第55図　軒平・軒桟瓦……86
第56図　軒平瓦……87
第57図　軒平・軒桟瓦……88
第58図　軒平・軒桟瓦，小菊瓦……90

第 59 図　丸瓦……92
第 60 図　丸瓦……93
第 61 図　平瓦……94
第 62 図　平瓦……95
第 63 図　平瓦……96
第 64 図　桟瓦，熨斗瓦……97
第 65 図　熨斗瓦，軒瓦……98
第 66 図　軒瓦，伏間瓦，袖瓦……99
第 67 図　鳥伏間瓦，鯱瓦……100
第 68 図　鬼瓦，鯱瓦……101
第 69 図　鬼瓦……102
第 70 図　鬼瓦……103
第 71 図　海鼠瓦，塀瓦……104
第 72 図　海鼠瓦，塀瓦……105
第 73 図　塀瓦，埋瓦，線刻瓦……106
第 74 図　線刻瓦，朝鮮系瓦……107
第 75 図　陶磁器……108
第 76 図　陶磁器……109
第 77 図　土器，石製品……111
第 78 図　石製品……112
第 79 図　石製品，金属製品……113
第 80 図　金属製品……114
第 81 図　分析試料……118
第 82 図　粒径組成の割合……119
第 83 図　顕微鏡写真……121
第 84 図　顕微鏡写真と蛍光 X 線分析結果……122
第 85 図　絵図・古写真……124
第 86 図　丸瓦・平瓦法量……125
第 87 図　軒丸瓦，軒平・軒桟瓦編年表……126
第 88 図　刻印……127

表目次

第 1 表　鹿児島城跡周辺遺跡一覧表……13
第 2 表　鹿児島城跡の歴史……16
第 3 表　基準杭座標値……17
第 4 表　基本土層……21
第 5 表　礎石観察表……55
第 6 表　石列，建物跡観察表……55
第 7 表　軒丸瓦型式分類・観察表……63
第 8 表　軒丸瓦型式分類・観察表……64
第 9 表　軒丸瓦型式分類・観察表……65
第 10 表　軒丸瓦型式分類・観察表……66
第 11 表　軒丸瓦型式分類・観察表……67
第 12 表　軒丸瓦型式分類・観察表……68
第 13 表　軒丸瓦型式分類・観察表……69
第 14 表　軒平・軒桟瓦型式分類・観察表……77
第 15 表　軒平・軒桟瓦型式分類・観察表……78
第 16 表　軒平・軒桟瓦型式分類・観察表……79
第 17 表　軒平・軒桟瓦型式分類・観察表……80
第 18 表　軒平・軒桟瓦型式分類・観察表……81
第 19 表　軒平・軒桟瓦型式分類・観察表……82
第 20 表　小菊瓦型式分類・観察表……89
第 21 表　その他瓦型式分類・観察表……91
第 22 表　陶磁器観察表……115
第 23 表　土器，石製品観察表……115
第 24 表　金属製品観察表……116
第 25 表　ガラス製品等観察表……117
第 26 表　分析試料一覧表……118
第 27 表　ガラスビード作成条件と蛍光 X 線装置条件……119
第 28 表　蛍光 X 線定量測定条件……119
第 29 表　薄片観察表（№ 1 ～ 6）……119
第 30 表　薄片観察表（№ 7 ～ 13）……120
第 31 表　蛍光 X 線分析結果……120
第 32 表　絵図一覧表……123
第 33 表　古写真一覧表……123
第 34 表　刻印一覧表……128

図版目次

図版 1　上空から見た鹿児島城跡周辺……129
図版 2　上空から見た鹿児島城跡……130
図版 3　上空から見た御楼門，虎口周辺……131
図版 4　御楼門周辺，石垣ほか……132
図版 5　御楼門，虎口周辺排水溝ほか……133
図版 6　御楼門礎石 1 ～ 8……134
図版 7　御楼門礎石 9 ～ 16……135
図版 8　御楼門礎石 17，18 ほか……136
図版 9　砲弾痕，鋳鉄管ほか……137
図版 10　虎口周辺排水溝……138
図版 11　本丸内排水溝ほか……139
図版 12　本丸内排水溝ほか……140
図版 13　御兵具所跡周辺遺構ほか……141
図版 14　遺物出土状況……142
図版 15　軒丸瓦，軒平・軒桟瓦，小菊瓦，鳥伏間瓦……143
図版 16　丸瓦，平瓦……144
図版 17　軒瓦，熨斗瓦，伏間瓦……145
図版 18　埋瓦，塀瓦，海鼠瓦……146
図版 19　鬼瓦……147
図版 20　鬼瓦……148
図版 21　鬼瓦，鯱瓦，朝鮮系瓦……149
図版 22　瓦，石製品，金属製品……150
図版 23　金属製品……151
図版 24　ガラス製品等……152

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は文化財の保護・活用を図るため，開発機関等との間で事業区域内に於ける文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発機関等との調整を図り，埋蔵文化財発掘調査等を実施している。県指定史跡である鶴丸城跡（昭和28年指定）の石垣は，豪雨や地震等による自然災害や樹痕の張り出し等により，石垣表面の孕み出しや石垣間の隙間等が生じている部分があり，対応等について関係機関と協議を行ってきた。

鹿児島県歴史資料センター黎明館（以下，黎明館）は，史跡の保全を目的として，調査・測量等を行い，必要な箇所について修復工事を行うため「鶴丸城跡保全整備事業」を実施することとなった。事業は平成24年度から始まり，当初は黎明館を事業の実施主体として危険箇所の石垣修復，御角櫓跡周辺部の調査が実施された。

また，平成24年から鶴丸城御楼門の復元運動が県下の経済界を中心に始まり，平成25年には実行委員会が立ち上げられ，寄付金が募られた。このような背景の中，平成27年２月18日に鹿児島県と民間の鶴丸城御楼門復元実行委員会による鶴丸城御楼門建設協議会が設立され，これを受けて学識経験者等で構成される「鶴丸城御楼門建設協議会専門家委員会」を設置し，鹿児島城の範囲や全体構成，城内に残る遺構や各種調査成果の本質的価値等について，将来に向けて適切な保存管理を行うため，『鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画』を策定した。

鹿児島県総務部県民生活局生活・文化課（以下，生活・文化課）と鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課），県立埋蔵文化財センターは協議を行い，対象地域内における遺構の種類や範囲，残存状況等を把握するため，当該地域において埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。この発掘調査は平成26年度から実施し，平成31（令和元）年度の現在も継続している。また，平成31（令和元）年度からは国の重要遺跡調査としての埋蔵文化財発掘調査を併せて実施している。

本報告書は，平成26～30年度の５年間で発掘した3,145㎡のうち，御楼門周辺部分約1,350㎡分についての成果を記載する。その他の調査範囲と平成31（令和元）年度以降に調査した内容については今後，順次報告書を作成する予定である。

第２節　鶴丸城跡保全整備事業について

平成27年度以降に実施された事業内容の詳細は「平成27年度御楼門部石垣保全設計調査業務報告書」等に記載されており，発掘調査や考古学的成果に関連する内容を含むが，ここでは重複を避けるため主な経緯と概要についてのみを記載し，建築，復元技法等に関する技術検討会議の記載は避けた。また，鹿児島県総務部文化スポーツ局文化振興課楼門等建設推進室（旧県民生活局生活文化課楼門等建設推進室）及び黎明館が主催する「鶴丸城跡保全整備事業に係る専門家検討会議」については，会議における協議事項の多くが発掘調査の計画や役割等と関連するため，ここではこれまで開催された会議の検討議題のみを記載する。

１　鶴丸城跡保全整備事業に係る専門家検討会議

委員：三木靖，宮武正登，原口泉，渡辺芳郎，大木公彦，北村良介，寺田仁志，松井敏也

オブザーバー：文化庁，麓和善

会議の項目

平成27年度

第１回（平成27年９月２日開催）

概要：業務の目的とフロー，経緯と内容，全体計画（保存活用計画の概要，平成26年度業務の成果，石垣カルテ，本丸内の基本設計，発掘調査概要，全体整備方針），個別計画（御楼門桝形部石垣の修理方針，変状と劣化の原因調査，石垣表面の歴史的痕跡の調査と実測図化，地下水及び雨水の動き調査，発掘調査，石垣復旧・修理の前提と範囲，遺物となった石材の保存と活用），御楼門石垣の修正設計。

第２回（平成27年10月28日開催）

業務の目的とフロー，基本設計（与条件の細部検討，現状把握，本丸内の遺構の状況，石垣の変遷，発掘調査概要，保存整備の方針，基本設計図の作成），実施設計の検討（御楼門桝形部石垣の修理設計・変状及び築石の劣化調査，修復工法の検討）。

平成28年度

第１回（平成28年６月28日開催）

概要：事業の平成28年度計画に関する説明，御楼門部石垣の保全整備工事に係る実施計画の説明，視察（御楼門部，北御門部石垣）。

第２回（平成28年７月26日開催）

概要：関係事業のスケジュール・関係組織間の相互関係等について，「鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画」と鶴丸城跡御楼門建設協議会専門家委員会の検討状況について，御楼門石垣の保全整備について，北御門及び御角櫓跡周辺部石垣の保全整備に係る事前調査・測量・設計について，現地視察（北御門及び御角櫓周辺石垣，御楼門部保全整備に係る発掘調査状況）。

第３回（平成28年10月27日開催）

概要：関係事業のスケジュール及び鶴丸城御楼門建設協議会専門家委員会の開催状況について，御楼門部石垣

の保全整備工事について，北御門及び御角櫓跡周辺部石垣の事前調査について，鹿児島城跡石垣修復に係る地質調査，水位・水質調査について，現地視察（北御門及び御角櫓跡周辺部石垣，御楼門部保全整備に係る発掘調査及び石垣工事状況）。

第４回（平成 28 年 12 月７日開催）

概要：関係事業のスケジュール及び鶴丸城御楼門等建設に係る技術検討会議の開催状況について，御楼門部石垣の保全整備事業について，北御門周辺部石垣の保全整備工事について，北御門及び御角櫓跡周辺部石垣の基本設計について，石垣修復に係る石垣安定堅牢，Ｘ線分析，水位調査について，現地視察（御楼門部保全整備に係る発掘及び石垣工事の状況，試験施工）。

第５回（平成 29 年１月 23 日開催）

概要：関係事業のスケジュール及び事業の状況について，御楼門石垣の保全整備工事について，北御門及び御角櫓周辺部石垣の基本設計について，現地視察（御角櫓等）。

第６回（平成 29 年３月 15 日開催）

概要：関係事業のスケジュール及び事業の状況について，御楼門部石垣の保全整備工事ついて，御角櫓及び北御門周辺部石垣の整備工事に係る設計（案）について，平成 29 年度の鶴丸城跡保全整備に係る予定について，現地視察（御角櫓周辺，御楼門部保全整備に係る石垣保全工事，北御門周辺）。

平成 29 年度

第１回（平成 29 年８月８日開催）

概要：取り組み状況及びスケジュールについて，御楼門部の埋め戻し及び鋳鉄管の状況，地下水位調査の状況，埋蔵文化財発掘調査の実施状況，御楼門保全整備に係る経緯，市道との調整，周辺環境（修景）整備について，現場視察（御角櫓上下，御楼門，北御門）。

第２回（平成 30 年３月 15 日開催）

概要：御楼門部の埋め戻し，発掘調査の成果及び情報発信，地下水位観測，石垣の維持管理，周辺環境（修景）整備，関係事業の取り組み状況，御楼門建設に係る平板載荷試験の実施，現場視察（御角櫓，庭園状遺構，兵具奉行張番所付近，御楼門周辺部）。

平成 30 年度

第１回（平成 30 年７月６日開催）

概要：現地視察（御楼門部，橋の欄干の笠木，枡形内の敷石，石垣の天端，北御門部石垣），総括協議（御楼門橋の測量調査結果と今後の修復方針，北御門部崩落か所，地下水位観測等結果の概要，発掘調査整理作業の概要，周辺環境整備の実施設計）。

第２回（平成 30 年 12 月 27 日開催）

概要：御楼門建設に係る鉄骨フレームの後施工について，現地視察（御楼門部，御角櫓周辺部，麒麟の間周辺部），鶴丸城跡保全整備事業について（北御門周辺部石垣の修復，御楼門妻側の石垣上の板壁，御楼門橋の修復，周辺環境整備の実施設計），関係事業のスケジュール及び鶴丸城御楼門建設協議会専門家委員会等の開催状況について。

第３回（平成 31 年３月 19 日開催）

概要：現地視察（御楼門枡形部，御楼門橋，クスノキ周辺），周辺環境整備の実施設計，文献調査，地下水位観測の結果と概要，御楼門妻側の岩垣上の板壁，北御門周辺石垣の修復，御角櫓跡石垣基底部の調査結果，国指定への取り組み）。

平成 31（令和元）年度

第１回（令和元年５月 31 日開催）

概要：国指定史跡に向けて（これまでの調査成果，今年度の調査計画），現地視察（御楼門周辺），危険木の伐採及びクスノキ移設，御楼門妻側の石垣上の板壁，御楼門橋の修復，北御門周辺部石垣の修復，御角櫓跡石垣，地下水位観測等の概要

第２回（令和元年 12 月 19 日開催）

概要：国指定史跡に向けて（絵図面類の調査，これまでの調査成果，次年度の調査計画），北御門周辺部石垣の修復，修景整備（サインの設置，展示物設置，土系舗装，擬宝珠取替，クスノキ移設），地下水位観測等の概要，現地視察（御楼門建設の進捗状況）

第３節　発掘調査の経過

１　本調査

平成 26 年度から平成 30 年度までの発掘調査の経過について，日誌抄を集約したものを月毎に記載する。

平成 26 年度

１月（平成 27 年１月 19 日～１月 28 日）

調査区１　伐採，トレンチ（１～３T）設定。

１～３T　表土剥ぎ，掘り下げ，遺物一括取り上げ。

調査区２　伐採，清掃，調査区３　南側礎石部分清掃。

２月（平成 27 年２月２日～２月 25 日）

調査区１（１T）掘り下げ，遺構検出（排水溝），撮影，Ⅳ層精査，Ⅳ層検出土坑半裁，土坑（Ｐ１）実測。

２T　掘り下げ，遺構検出（排水溝），Ⅳ層精査，棟瓦（塀？）精査，撮影，実測。

調査区２（３T）Ⅰ～Ⅲ層掘り下げ，Ⅱ層検出土坑完掘，撮影，Ⅳ層上面精査，撹乱部掘り下げ。

調査区３（４～６T）　Ⅰ層掘り下げ，精査，排水溝検出，撮影，枡形遺構半裁。

３月（平成 27 年３月２日～３月 13 日）

調査区１（１T）　完掘状況撮影，養生，埋め戻し。
調査区２（２T）　完掘状況撮影，養生，埋め戻し。
３T　撹乱部除去，撮影，Ⅳ層上面遺構配置図作成，完掘状況撮影，養生，埋め戻し。
調査区３（４T）排水溝埋土除去，枡形（水槽）遺構実測，完掘状況撮影，土層断面実測，養生，埋め戻し。
５T　黒色土範囲掘り下げ（Ⅱ層検出），撮影，Ⅱ層掘り下げ，礎石底部まで検出，遺物取上，完掘状況撮影，土層断面実測，養生，埋め戻し。
６T　精査，Ⅱ層検出土坑等撮影，遺構配置図作成，掘り下げ，土坑半裁，精査，土層断面実測，完掘状況撮影，養生，埋め戻し。
７T　Ⅰ・Ⅱ層掘り下げ，排水溝検出，完掘状況撮影，土層断面実測，養生，埋め戻し。

平成 27 年度

4 月（平成 27 年 4 月 21 日～ 4 月 24 日）
記念碑移設地樹木移植・伐採の立ち会い
１T ～ 15T　掘削，土層断面・平面略図の作成。

5 月（平成 27 年 5 月 11 日～ 5 月 29 日）
H-10・11，K-20 区　移植立ち会い。
H-9 区，H･I-11･12,M-21 区 7T ,K･L-21 区　掘り下げ，撮影，溝状遺構検出，礎石（？）検出。

6 月（平成 27 年 6 月 1 日～ 6 月 29 日）
H･I-11･12 区　遺構面精査。
H ～ J-11 ～ 13 区　掘り下げ，撮影。

7 月（平成 27 年 7 月 1 日～ 7 月 30 日）
H ～ J-11 ～ 13 区　精査,能舞台橋掛り部分検出,撮影。

8 月（平成 27 年 8 月 3 日～ 8 月 28 日）
H ～ J-11 ～ 13 区　掘り下げ，遺構検出，平板測量，土層断面撮影。能舞台橋掛り 1T･2T　断面実測。
兵具所側ソメイヨシノ移植の立ち会い。
J-21 区 8T，I・J-24 区 9T　掘り下げ。

9 月（平成 27 年 9 月 1 日～ 9 月 28 日）
J･K-21 区 8T　掘り下げ，天場石・裏込め検出，石列検出，枡形石製品検出，Ⅰ層土ふるい（鉄製品採取）。
J･K-24 区 9T　掘り下げ，石列検出，撮影，測量，平板測量，石垣裏込め石の検出，瓦溜検出・撮影，平板測量，Ⅰ層土ふるい（鉄製品採取）。

10 月（平成 27 年 10 月 1 日～ 10 月 28 日）
J･K-21 区 8T　撹乱層掘り下げ，遺構検出，石塁内部の掘り下げ，石塁栗石検出。
J･K-24 区 9T　瓦溜検出，撮影，平板測量，石垣背面掘り下げ，瓦集中部の点上げ，撮影，開渠中の瓦溜検出・撮影・点上げ，石塁栗石検出。
J-19･20 区 10T　掘り下げ，石塁・排水溝検出・撮影
N-25 区 3T 南　撹乱部掘り下げ，下層確認トレンチ設定・掘り下げ，撮影。
市道の石垣崩壊部応急処置。

11 月（平成 27 年 11 月 2 日～ 11 月 27 日）
M-26 区 3T 北　掘り下げ，栗石精査，排水溝掘り上げ・撮影・平板測量。
N-25･26 区 3T 南　硬化面検出，撮影，平板測量，裏込め石精査・撮影。
K-21･22 区 4T　精査，弾痕検出，測量（九州文化財研究所），完掘状況（排水溝）撮影，弾痕実測。
M-24 区 6T,L-21 区 7T　精査,撮影,土層実測,掘り下げ。
I･J-24･25 区 9T，N-25 区 3T 南，J-19･20 区 10T　掘り下げ，排水溝・石塁検出，撮影，平板測量。
K-20 区 10T　排水溝撮影。

12 月（平成 27 年 12 月 1 日～ 12 月 26 日）
L-19･20 区 2T，N-21 区 5T，M-24 区 6T，J･K-21 区 8T　精査。
N-25･26 区 3T　造成土掘り下げ，硬化面検出・撮影，裏込め石検出・実測。
K-21･22 区 4T　弾痕調査。
L-21 区 7T，J･K-24 区 9T　排水溝掘り下げ。
J･K-24･25 区 9T,J･K-20 区 10T　精査，撮影，実測
M-21 区　枡形状遺構掘り下げ。
H ～ J-11 ～ 13 区　能舞台橋掛かり部分再検出作業。
P ～ S － 22･23 区　石橋部分の精査。
H- １～ 3・B- １区（ボーリング調査）　トレンチ設定・掘り下げ，撮影。
かごしま遺跡フォーラム 2015 現地見学（12 月 16 日）。

1 月（平成 28 年 1 月 5 日～ 1 月 28 日）
L･M-19･20 区 2T　石塁内部掘り下げ，裏込め石検出。
O-26 区 3T　裏込め石の掘り下げ，下層硬化面検出。
K･L-21 区 4T，J-18･19 区 10T　精査，掘り下げ。
L-21 区 5T，M-24 区 6T　清掃。
M-24 区 6T　石垣弾痕検出　L-21 区 7T　実測。
J･K-21 区 8T，J･K-24 区 9T　掘り下げ，石列検出，撮影，実測。
N-1 区 11T　表土剥ぎ，掘り下げ，精査，円礎検出。
埋蔵文化財専門職養成講座（上級講座）（１月 22 日）

2 月（平成 28 年 2 月 1 日～ 2 月 25 日）
O-20 区 1T　整地，掘り下げ。
L･M-19･20 区 2T　精査，掘り下げ，石垣実測。
M･N-20 区 3T 北，N･O-25･26 区 3T 南，I ～ L-21･22 区 4T　精査，実測。
M-21 区 5T　礎石横の掘り下げ，鋳鉄管検出，撮影。
M-24 区 6T　掘り下げ，内側礎石脇掘り下げ。
L-21 区 7T　鉄管検出作業（方向確認），精査，撮影。
J･K-24 区 9T，J-19･20 区 10T，N-1･2 区 11T，N-21 区 12T　掘り下げ，精査，実測。
M･N-2 区 14T　表土剥ぎ，測量，石垣・溝検出。
M-21 区 15T　礎石脇の掘り下げ，撮影。

M-21 区 16T, N-24 区 17T, M-24 区 18T, N-24 区 19T 掘り下げ，撮影。
N-24・25 区　排水溝精査。
H ～ J-11・12 区　能舞台精査。
平成 27 年度第 2 回文化財担当者講習会（2 月 3 ～ 5 日）

3 月（平成 28 年 3 月 1 日～ 3 月 11 日）
N-21 区 5T, L-21 区 7T, J・K-21 区 8T, J・K-24 区 9T, 0 ～ M-1 区 11T, N-21 区 12T, 0 ～ M-3 区 14T　撮影。
L-25 区 13T, O-21 区　石垣撮影・実測。
M-2 区 14T, M-21 区 16T, M-24 区 18T, N-24 区 19T, M-21 区 20T　掘り下げ，平板実測。
3，5，6・8 ～ 10, 12, 15 ～ 20T　平面・土層断面実測。
6, 12, 15 ～ 17, 19・20T　養生。

平成 28 年度

5 月（平成 28 年 5 月 9 日～ 5 月 30 日）
M・N-21 区　掘り下げ，精査，建物跡（根石跡）検出，撮影，平板，Ⅱ層根石実測。
M・N-24 区　掘り下げ，Ⅱ層上面撮影，暗渠蓋検出，撮影，平板実測，Ⅱ層漆喰面検出，暗渠等実測。
J-22・23 区　表土剥ぎ，掘り下げ，排水溝検出，撮影，石垣上面・暗渠検出，漆喰面検出，遺物取り上げ。
K-21 区　排水溝検出，掘り下げ，撮影，遺物実測。
K・L-26・27 区　排水溝壁・石垣面清掃。
J・K-26・27 区　排水溝内に鬼瓦 1 号出土。

6 月（平成 28 年 6 月 1 日～ 6 月 30 日）
J-22・23 区　暗渠検出，漆喰面検出，遺物取り上げ，撮影，上面掘り下げ（21T），実測。
K ～ N-21 区　掘り下げ，Ⅱ層・三和土検出，根石実測，漆喰面撮影・実測，礎石・排水溝・鋳鉄管撮影・実測。
L ～ N-24 区　掘り下げ，漆喰面・三和土検出，瓦等一括取り上げ。
K・L-25 ～ 27 区（枡形踊り場）　埋土断面・遺物実測
I・J-20 ～ 23 区　表土剥ぎ，掘り下げ，溝・礎石等検出・撮影。
J ～ L-20 区（2T, 10T）清掃。
御楼門礎石調査

7 月（平成 28 年 7 月 4 日～ 7 月 28 日）
K ～ M-21 区　石畳清掃，平板実測，根石取り上げ，実測，鋳鉄管実測。
K ～ O-24 区　三和土検出状況，撹乱部完掘状況撮影，排水溝等実測，三和土等実測，ミニトレンチ設定（2 か所）・掘り下げ，石畳清掃・実測。
J ～ L-27 区　排水溝内出土瓦実測。
I・J-20 ～ 24 区　排水溝等検出，埋土断面実測，礎石・漆喰面・瓦出土状況撮影。
K ～ N-20 区　表土剥ぎ，掘り下げ，石垣・排水溝検出，礎石実測。
H ～ J-24・25 区　9T　表土剥ぎ，掘り下げ，撮影。

8 月（平成 28 年 8 月 1 日～ 8 月 26 日）
H ～ J-20 ～ 25 区　表土剥ぎ，掘り下げ，遺物取り上げ，排水溝・裏込め検出・実測，撮影，漆喰面範囲実測。
L ～ N-21 ～ 24 区　遺構配置実測（礎石等），銃弾出土状況撮影，取り上げ。
L ～ N-20 区　表土剥ぎ，土層断面実測，日時計出土。
N・O-24 区　遺構配置実測。
K・L-21 区　排水溝遺物取り上げ，漆喰面検出，根石（P 1）実測・完掘撮影。
L ～ O-22・23 区　石畳，雨落溝実測，石畳凹み撮影。
L-25 区　排水溝断面撮影。
L ～ N-25 区　表土剥ぎ。
空撮 8 月 8 日　（遺構等撮影　6 × 7 版）

9 月（平成 28 年 9 月 1 日～ 9 月 30 日）
I ～ N-20 区　掘り下げ，遺構検出，日時計周辺遺構配置図作成，調査区内三次元測量（黎明館），1T 遺構実測。
L ～ N-21 区　掘り下げ，漆喰面検出，完掘撮影。
J・K-21 区　排水溝埋土掘り下げ，実測，鋳鉄管検出，撮影，掘り下げ，精査。
H ～ J-21 ～ 25 区　掘り下げ，排水溝・石垣実測，遺物取り上げ，撮影，土層断面実測，調査区内三次元測量（黎明館）。
M ～ O-23・24 区　排水溝・漆喰実測，石畳実測。
L-25・26 区　枡形虎口排水溝内遺物実測，取り上げ。
M・N-25 区　表土剥ぎ，掘り下げ，遺物取り上げ。
K-28 区　表土剥ぎ，掘り下げ，遺物取り上げ。
L・M-1' 区 33T　表土剥ぎ，掘り下げ，遺物取り上げ。
御角櫓南側堀　表土剥ぎ，掘り下げ。
御楼門調査区内埋め戻し（土嚢）。

10 月（平成 28 年 10 月 3 日～ 10 月 28 日）
I ～ N－20 区　掘り下げ，遺構検出，排水溝フタ撤去，埋土掘り下げ，遺物一括取り上げ，日時計取り上げ，鬼瓦出土。
H ～ J－20 ～ 25 区　掘り下げ，瓦集中区①実測，石塁実測，排水溝（古階段）検出，地業（？）検出，排水溝蓋撤去，埋土掘り下げ，遺物取り上げ，撮影。
M・N-25 ～ 28 区　表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出，遺物取り上げ，撮影。
K・L-27・28 区（上段）　掘り下げ，撮影。
K・L-26・27 区（枡形排水溝）　遺物取り上げ，撮影，仮埋め戻し。
J・K-21 ～ 23 区　御楼門部排水溝埋め戻し。
J-1' 区　古い階段下掘り下げ，排水溝検出，遺物一括取り上げ，33T 掘り下げ，撮影。

11 月（平成 28 年 11 月 1 日～ 11 月 29 日）
I ～ N－20 区　裏込め石実測，土層断面図実測。

H～J－20～25区　掘り下げ，遺構配置等実測，撮影。
L～N-25～28区　掘り下げ，遺構検出，近・現代面遺構（天文観測室・焼土），撮影，礎実測（天文観測室小ドーム基礎？），兵具庫南（入口？）側排水溝検出，埋土断面撮影，実測，土層撮影・実測。
K・L-27・28区（上段）　石垣背面瓦溜り（瓦集中部②）取り上げ，裏込め検出。
H・I-27区34T　表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出。

12月（平成28年12月1日～12月27日）
H・I-27区34T　掘り下げ，遺構検出，撮影，実測，土層断面撮影。
M・N-25～27区　掘り下げ，実測，天文観測室付近出土瓦集積取り上げ，実測，撮影。
N・O-21区　石畳撤去（業者），調査前撮影，石畳下掘り下げ，焼土・漆喰面検出，鋳鉄管・暗渠排水溝検出，掘り下げ。
J-20・21区　石塁部分掘り下げ，裏込め石検出
御角櫓　掘り下げ，石垣裏検出
北御門　トレンチ表土剥ぎ，掘り下げ。
空撮・ブローニー撮影，現地説明会，かごしま遺跡フォーラム2016（12月17日）

1月（平成29年1月5日～1月30日）
H・I-25区　撮影，実測。
I-27区　掘り下げ，遺構検出，撮影。
J-23区　砲弾（第二次世界大戦？）出土，撮影。
3工区クスノキ周辺　排水管敷設に伴う立会い調査。
L－1～3区　掘り下げ，遺構検出，撮影，土層実測。
K～N-1'・2'区　掘り下げ，排水溝検出・犬走り状遺構撮影，石垣実測，土層撮影。
c～e-34～38区　石垣背面掘り下げ，暗渠排水溝検出掘り下げ。
埋蔵文化財専門職員養成講座（上級）開催(1月24日)

2月（平成29年2月1日～2月27日）
J～L-1～3区　表土剥ぎ，掘り下げ，排水溝検出，遺構実測，土層実測。
K～N－1'・2'区　表土剥ぎ，掘り下げ，遺構掘削，安全対策（土留め）。
H・I-11・12区（能舞台）　遺構実測。
H・I-20区（35T）　西側排水溝工事に伴う立ち会い及び遺構検出，撮影，実測，土層断面図作成，埋め戻し。
M・N-15区（36T）　表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出。
M・N-11区（37T）　表土剥ぎ，精査。
c・d-34・35区　掘り下げ，撮影，土層断面実測。

3月（平成29年3月1日～3月27日）
M・N-15区（36T）　掘り下げ，遺構検出。
37T　掘り下げ，排水溝検出。
G-22・23区　排水パイプ埋設部分立会い，掘り下げ，排水溝検出，撮影，実測。
K-22・23区　トレンチ掘り下げ。
L－1～3区　掘り下げ，精査，撮影。
K～N-1'・2'区図書館側堀犬走状遺構精査，撮影
御角櫓石積み遺構実測。
c -34・35区　土層断面実測。
h-38区　ミニトレンチ設定，掘り下げ。
m-35区　北御門土橋仮設橋延長部トレンチ掘り下げ（38～40T），撮影（39・40T）。
能舞台シラス埋め戻し。

平成29年度

4月（平成29年4月24日～4月27日）
L～N-21・24区　表土剥ぎ，撮影。
L～N-3区　重機表土剥ぎ。

5月（平成29年5月8日～5月30日）
M・N-21区　攪乱掘削，鋳鉄管検出，実測。
M・N-24区　土層断面実測，平板実測，撮影。
J-1・2区　攪乱掘削，撮影。
E-1'区（42T）　表土剥ぎ，攪乱掘削，排水溝（近代）検出状況撮影，排水溝上蓋実測，犬走り状石積精査。
M・N-1'・2'区　攪乱掘削，土砂搬出，井堰石積，石塁状石積精査，土木業務支援（大福・江藤建設）。

6月（平成29年6月1日～6月28日）
M・N-1'・2'区　掘り下げ，土層断面実測，犬走り部分実測，石垣・土層断面・胴木検出状況撮影，実測。
K・L－1～3区　掘り下げ，土層断面実測。
d・e-38区　環境整備，掘り下げ，撮影。
42T　拡張，掘り下げ。
I－1・2区　表土剥ぎ，掘り下げ。
M－8区　立石精査（庭石？），撮影。

7月（平成29年7月10日～7月27日）
I・J－1・2区　精査，石垣背面掘り下げ，撮影。
41T　表土掘り下げ，抜根。
L・M－8区（41T）　暗渠排水溝検出，撮影，環境整備。
N-1'・2'区　石垣・根石・胴木検出，撮影，実測。
J・K-1区　造成土掘り下げ，撮影，排水溝検出。
E-1'区（42T）　トレンチ拡張，環境整備，撮影，西側掘り下げ，東壁実測。

8月（平成29年8月1日～8月28日）
I～K－1・2区　攪乱掘り下げ，精査，排水溝掘削，調査区南・西壁土層・石垣背面土層精査・撮影，実測。
L・M-8区（41T）　立石周辺掘り下げ，撮影，実測。
E-1'区（42T）　掘り下げ，養生，排土処理，東壁土層撮影・実測，底面礫層平面実測。
L・M-3区　掘り下げ，土層断面実測，排土処理。

9月（平成29年9月4日～9月28日）
K-8区（41T）　表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出・撮影。
M・N-17区（43T）　表土剥ぎ，掘り下げ，土層断面撮影。

M・N-12 区（44T）　表土剥ぎ，掘り下げ，遺構実測。
M・N-15 区（36T）　遺構検出，撮影。
M・N-11 区（37T）　遺構検出，撮影，実測。

10 月（平成 29 年 10 月 2 日～ 10 月 20 日）

K-8 区（41T）　掘り下げ，遺構検出。
M・N-17 区（43T）　排水溝掘り下げ，遺物取り上げ。
M・N-15 区（36T）　排水溝裏込め掘り下げ。
M・N-11 区（37T）　調査区拡張・表土剥ぎ，掘り下げ。
M・N-1・2 区　御角櫓基礎石下層確認，掘り下げ，東側トレンチ掘り下げ，撮影，土層実測。
J-27 区（45T）　表土剥ぎ。
M・N-12 区（44T）　暗渠排水溝内攪乱部掘り下げ。
空撮実施

11 月（平成 29 年 11 月 1 日～ 11 月 28 日）

M・N-11 区（37T）　掘り下げ，土坑調査，動物舎跡調査。
M・N-12 区（44T）　瓦溜り掘り下げ，撮影。
M・N-15 区（36T）　瓦溜り掘り下げ，撮影。
J-28・29 区（45T）　瓦溜り掘り下げ，撮影，遺構検出。
E-1・2 区（46T）　掘り下げ，遺物取り上げ，七高プール基礎検出・撮影。
a・b-1・2 区（47T）　表土掘り下げ，撮影。
N-8・9 区（41T）　掘り下げ。
北御門土橋埋め戻し。

12 月（平成 29 年 12 月 1 日～ 12 月 26 日）

M-10 区（41T）　H12 年掘削部分掘り下げ，精査，撮影。
E-1・2 区（46T）　掘り下げ。
a・b-1・2 区（47T）　掘り下げ，排水溝検出，精査，撮影。
I-28・29 区（45T）　掘り下げ。
M-8・9 区（41T）　土層断面撮影。
37T　精査，実測。
F・G- 1・2 区（48T）　掘り下げ。
K ～ N-7・8 区（41T）　精査，実測。
御角櫓調査範囲埋め戻し。

1 月（平成 30 年 1 月 9 日～ 1 月 29 日）

K ～ N- 7・8 区（41T）　掘り下げ，遺構検出，暗渠排水溝検出，撮影。
F・G-1・2 区（48T）　掘り下げ，遺構検出，七高プール基礎撮影，実測。
B-1・2 区（49T）　掘り下げ，遺構検出，硬化面撮影。
N-21 区　鋳鉄管再検出，一部カット。
図書館南側堀埋め戻し。

2 月（平成 30 年 2 月 5 日～ 2 月 26 日）

K ～ N-7・8 区（41T）　掘り下げ，精査。
B-1・2 区（49T）　掘り下げ。
a・b-1・2 区（47T）　掘り下げ，調査区西壁撮影。
J・K-28 区（45T）　掘り下げ，鹿大テニスコート面撮影。
N-13・14 区（36T）　掘り下げ，石垣背面状況精査。
E-1・2 区（46T）　石垣背面（裏込め等）実測。
F・G-1・2 区（48T）　掘り下げ。
4 級基準点測量，空撮，現地説明会開催（2 月 24 日）

3 月（平成 30 年 3 月 1 日～ 3 月 20 日）

L-7・8 区（41T）　掘り下げ。
J-29 区（45T）　掘り下げ，遺構検出。
N-14 区（36T）　石垣背面掘り下げ。
N-10・11 区（37T）　トレンチ（石垣背面）掘り下げ。
N-12 区（44T）　ミニトレンチ（石垣背面）掘り下げ。

平成 30 年度

5 月（平成 30 年 5 月 14 日～ 5 月 28 日）

45T　壁面・検出面精査，石列検出状況撮影，部分拡張。
M・N-31・32 区（50T）　表土剥ぎ。

6 月（平成 30 年 6 月 4 日～ 6 月 27 日）

M・N-31・32 区（50T）　表土剥ぎ，栗石検出，掘り下げ，布基礎と思われる礫敷検出。
45T　掘り下げ，平面・土層断面作成，撮影，遺物出土状況図作成。
51T　表土剥ぎ，掘り下げ，地業検出。

7 月（平成 30 年 7 月 2 日～ 7 月 27 日）

50T　掘り下げ，遺構検出，撮影。
51T　掘り下げ，遺構検出，撮影。
36・37・48T　清掃。
43・45T　埋め戻し。
52T　表土剥ぎ，掘り下げ，遺構検出，撮影。
名山小学校土壁作り体験対応。

8 月（平成 30 年 8 月 1 日～ 8 月 28 日）

44T　埋め戻し。
52T　全体撮影，掘り下げ，壁面土層西・東側実測。
51T　基礎部分土層撮影，土層断面実測。
37T　養生シート張り，埋め戻し。
53T　環境整備，表土掘り下げ，精査，撮影，御角櫓周辺部埋め戻し，養生シート張り。

9 月（平成 30 年 9 月 3 日～ 9 月 26 日）

53T　掘り下げ，精査，撮影。
46・49T　精査，掘り下げ。
54T　環境整備，掘り下げ。
48T・御角櫓周辺部　埋め戻し。

10 月（平成 30 年 10 月 1 日～ 10 月 26 日）

53・54T　掘り下げ，遺構検出。
41T　精査，撮影，実測，埋め戻し。
46T　埋め戻し。
49T　精査，実測，埋め戻し。
47T　精査，断面見通し実測。
55T　環境整備，表土掘り下げ。

11 月（平成 30 年 11 月 1 日～ 11 月 28 日）

楼門部　石畳修復に伴う遺構検出，掘り下げ，楼門部実測，撮影。

55T　掘り下げ，土層撮影。
56T　環境整備，掘り下げ。
伊敷台社会福祉協議会研修視察。
12 月（平成 30 年 12 月 3 日～ 12 月 27 日）
56T　掘り下げ。
55T　壁面精査，土層断面実測，平面図作成，埋め戻し。
36・47・50 ～ 53T　清掃，オルソ画像作成，実測。
57T　環境整備，掘り下げ。
46T　埋め戻し。
1 月（平成 31 年 1 月 7 日～ 1 月 28 日）
57T　掘り下げ，清掃，オルソ撮影。
58T　掘り下げ。
56T　清掃，撮影，平面図・土層断面図実測，埋め戻し。
41・47・50 ～ 54T・御角櫓周辺　埋め戻し。
2 月（平成 31 年 2 月 1 日～ 2 月 22 日）
52T　清掃，実測，埋め戻し。
58T　清掃，オルソ撮影，実測，土層図作成，埋め戻し。
図書館側堀跡　養生シート張り，埋め戻し。
45T　埋め戻し。
御楼門周辺　石垣砲弾痕ポータブル蛍光 X 線分析。

2　調査体制

事業主体　鹿児島県県民生活局生活・文化課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育委員会文化財課

平成 26 年度

調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　井ノ上秀文
調査企画　〃　次長兼総務課長　中島　治
〃　調査課長兼南の縄文調査室長
前迫亮一
〃　調査課第一調査係長　大久保浩二
調査担当　〃　文化財主事　永濵功治
〃　文化財主事　今村結記
〃　文化財研究員　西野元勝
事務担当　〃　総務課主幹兼総務係長　有馬博文
〃　総務課主事　池之上勝太
来跡・指導助言
鹿児島地域振興局，株式会社建設技術コンサルタント，県文化財保護審議会委員，河崎衣美，永山修一，新田栄治，松井敏也，三木靖，宮武正登，渡辺芳郎

平成 27 年度

調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　福山徳治
調査企画　〃　次長兼調査課長兼南の縄文調査室長
前迫亮一
〃　総務課長　有馬博文
〃　調査課第一調査係長　大久保浩二
調査担当　〃　文化財研究員　西野元勝
〃　文化財主事　彌榮久志
事務担当　〃　総務課総務課長　有馬博文
来跡・指導助言
鹿児島地域振興局，県教育次長，文化財課長，岩元康成，上田耕，大木公彦，小野健吉，北村良介，木下尚子，五味克夫，齋藤達志，重久純一，新東晃一，高橋信武，田村省三，寺田仁志，戸崎勝洋，中井将胤，中原幹彦，中村直子，永山修一，西谷正，西中川駿，新田栄治，橋本達也，原口泉，本田道輝，松井敏也，三木靖，宮武正登，山下信一郎，渡辺芳郎

平成 28 年度

調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　福山徳治
調査企画　〃　次長兼調査課長兼南の縄文調査室長
前迫亮一
〃　総務課長　高田　浩
〃　調査課第一調査係長　大久保浩二
調査担当　〃　文化財主事　永濵功治
〃　文化財研究員　阿比留士朗（11 月～）
〃　文化財研究員　西野元勝
事務担当　〃　総務課総務課長　高田　浩
来跡・指導助言
御楼門復元専門家委員会，鹿児島県建築士会，縄文の森職員研修（遺跡見学会），揚村固，浅川道夫，内山伸明，大木公彦，太田秀春，岡寺良，落合弘樹，金子智，北垣聡一郎，北村良介，嶋谷和彦，菅澤茂，鈴木徳臣，高倉洋彰，高橋信武，戸崎勝洋，中井均，新保朋久，肱岡隆夫，藤井大祐，本田道輝，松井敏也，松尾千歳，真鍋雄一郎，三木靖，宮武正登，森先一貴，山本達也，渡辺芳郎

平成 29 年度

調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　堂込秀人
調査企画　〃　次長兼調査課長兼南の縄文調査室長
大久保浩二
〃　総務課総務課長　高田　浩
〃　調査課第一調査係長　中村和美
調査担当　〃　文化財主事　永濵功治
〃　文化財研究員　阿比留士朗
事務担当　〃　総務課総務課長　高田　浩
来跡・指導助言
県建築士会，協同組合関西地盤環境研究センター，大木公彦，太田秀春，小野健吉，金子智，岸野純一，北野博司，北村良介，中村直子，西形達明，松井敏也，

三木靖，宮武正登，本中眞，山下信一郎，吉村龍二，渡辺芳郎

平成 30 年度

調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター所長　堂込秀人
調査企画　〃　次長兼調査課長兼南の縄文調査室長　大久保浩二
〃　総務課総務課長　髙田　浩
〃　調査課第一調査係長　中村和美
調査担当　〃　文化財主事　阿比留士朗
〃　文化財主事　永濵功治
〃　文化財主事　福薗慶明
事務担当　〃　総務課総務課長　髙田　浩
〃　総務課主事　丸野将輝
来跡・指導助言
県建築士会，京都造形芸術大学，金子智，渡辺芳郎

平成 31（令和元）年度

調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター所長　前迫亮一
調査企画　〃　次長兼総務課総務課長　野間口誠
〃　調査課長兼南の縄文調査室長　中村和美
〃　調査課第二調査係長　三垣恵一
調査担当　〃　文化財主事　藤﨑光洋
〃　文化財主事　山崎克之
事務担当　〃　総務課主事　日置淑乃
来跡・指導助言
金子智，中村直子，渡辺芳郎

第 4 節　整理・報告書作成作業の経過

1　作業の経過

発掘調査に伴い，出土遺物，遺構図面，写真，デジタルデータ等の整理作業を平成 28 年度から実施した。日誌抄等をもとに年度毎に掲載する。

平成 28・29 年度

遺物洗浄，注記，接合，復元，実測，撮影。

平成 30 年度

遺物洗浄，注記，接合，復元，実測，撮影，陶磁器実測委託業務契約。

指導助言：金子智，渡辺芳郎

平成 31 年（令和元）年度　本報告書刊行年度

遺物洗浄，選別，注記，接合，復元，実測，拓本，トレース，計測，レイアウト，遺構図面整理，遺構図面トレース，デジタルデータ（トータルステーションデータ等）整理，統合，トレース，レイアウト，現場写真整理，選別，遺物撮影，遺物レントゲン撮影，写真レイアウト，文章作成，陶磁器実測委託業務契約，自然科学分析委託業務契約（瓦の胎土分析，鏡弾の組成分析）。

指導助言：金子智，渡辺芳郎

2　整理作業の体制

総括，企画，事務担当は発掘調査の体制を兼ねる。

平成 28 年度

整理担当　大久保浩二調査課第一調査係長，永濵功治文化財主事，西野元勝文化財研究員

平成 29 年度

整理担当　中村和美調査課第一調査係長，永濵功治文化財主事，阿比留士朗文化財主事

平成 30 年度

整理担当　中村和美調査課第一調査係長，永濵功治文化財主事，福薗慶明文化財主事，阿比留士朗文化財主事

平成 31（令和元）年度

整理（本報告書作成）担当　永濵功治文化財主事，阿比留士朗文化財主事，藤﨑光洋文化財主事，山崎克之文化財主事

なお，令和元年度報告書作成指導委員会及び検討委員会は以下の日程等で実施した。

＜報告書作成指導委員会＞

第 1 回　6 月 14 日，第 2 回　8 月 19 日
第 3 回　10 月 9 日，第 4 回 11 月 6 日
第 5 回　11 月 26 日

出会者：中村和美調査課長兼南の縄文調査室長，宗岡克英第一調査係長，三垣恵一第二調査係長，財団法人鹿児島県埋蔵文化財調査センター　寺原徹調査課長，福永修一調査第一係長，有馬孝一調査第二係長，横手浩二郎調査第三係長，藤﨑光洋文化財主事，山崎克之文化財主事，永濵功治文化財主事，阿比留士朗文化財主事

＜報告書作成検討委員会＞

第 1 回　6 月 14 日，第 2 回　8 月 19 日
第 3 回　10 月 19 日，第 4 回　11 月 13 日
第 5 回　11 月 27 日

出会者：前迫亮一所長，野間口誠次長兼総務課長，草水美穂子主幹兼総務係長，東和幸南の縄文調査室長補佐，中村和美調査課長兼南の縄文調査室長，宗岡克英第一調査係長，三垣恵一第二調査係長，財団法人鹿児島県埋蔵文化財調査センター寺原徹調査課長，福永修一調査第一係長，有馬孝一調査第二係長，横手浩二郎調査第三係長

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

１　遺跡の位置

鹿児島城跡は鹿児島県鹿児島市城山町及び山下町に位置する。城城の詳細についてはまだ不確定な部分もあるため，ここでは『鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画』の記載をもとに，城山の山裾に沿って３か所の出入口（大手口，新照院口，岩崎谷口）を結んだ線と，東側にある堀（吉野橋堀，俊寛堀）に囲まれた範囲を城城として扱う（第７図）。また，城内の機能も時代とともに変化しており，これまでの研究によると築城期は山城に屋形（居館）を加えた構成の城郭で本丸，二ノ丸と称していたが，後に城山の東側の裾野（麓）である現在の黎明館，県立図書館のある位置に館づくりの居館（居所）を移転し，本丸や二ノ丸と称するようになった。

２　地形

南部九州の地形は九州山地，宮崎平野から大隅半島，種子島・屋久島，およびその西の南部九州火山地域に区分される。九州山地は紀伊半島，四国から続く秩父帯と四万十帯からなる西南日本外帯山地の一部で，九州の山地の中で最も広く急峻な斜面からなる奥深い山々である。宮崎平野から大隅半島，種子島・屋久島は九州山地の南に接し，もはや西南日本の外帯山地ではなく琉球外弧の性質を帯びるいくつかの地塊に分かれる。大隅半島の山地（高隈・肝属山地）は四万十累層群に中期中新世に貫入した花崗岩とまわりのホルンフェルスが侵食に抵抗して急傾斜で比高の大きい山をなす。

南部九州火山地域で非火山性の山地は出水山地（祭尾山地）と薩摩半島（揖宿山地）に分かれて分布し，火砕流台地や小型の溶岩台地に囲まれている。火山帯や地溝，山地の配列には方向性が認められ，鹿児島地溝や八代海の地溝，薩摩半島の山地はいずれも琉球弧の方向にある。

鹿児島地溝は鹿児島（錦江）湾から南北に連なり，新しく激しい火山活動が集中する。一方，肥薩・北薩の古い火山帯では，鹿児島地溝から西に離れるにつれて火山岩の時代は前期更新世から鮮新世へと古くなる。また，これらの火山群では鹿児島地溝に特徴的なカルデラを形成するような巨大な爆発的活動よりも，溶岩ドームや盾状の厚い溶岩流を噴出する活動が卓越したようである。

南九州の平野を特徴づけるシラスや姶良丹沢火山灰を代表する日本列島周辺に広域に降灰した火山灰のふるさとのひとつであるこの鹿児島地溝は九州の地形の一大特徴と言える。

鹿児島地溝は琉球弧の火山フロントのうち鹿児島湾から加久藤・小林カルデラまでゆるやかな「S」字状をなして湾曲しながら南北約 75km，東西の幅約 20km で続く大型カルデラを伴う火山性地溝である。地溝東側の断層崖は顕著であるが，西側は鹿児島湾の中央部を除き一般に不明瞭である。鹿児島湾中央部では海底に地溝中心に向かって落ち込む階段状の断層が認められており，その南北の地域では半地溝の性質を帯びている。湾奥部や中央部では水深 200m 以深のところがあるのに対し，湾口は 100m 以浅で，湾口部よりも湾奥部の方がかなり深くなっている。

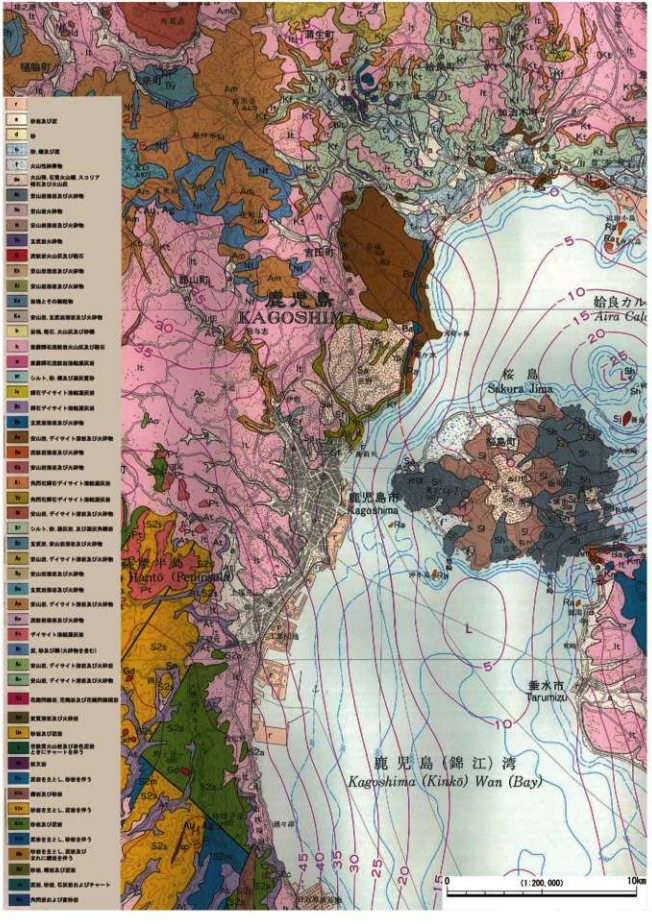
第四紀の火山フロントの位置に一致する鹿児島地溝の火山活動は，大規模火砕流噴火で多量のマグマを遠方に放出して陥没するという特徴をもち，火口の近くに噴出物が堆積して山をつくる活動は一般に少ない。これに対して，鹿児島地溝の西側の地域では，北部の肥薩火山群（国見山地）や鹿児島－串木野構造線より北側を占める北薩火山群は，古い地溝を埋めた鮮新世～前期更新世の火山岩からなる。

鹿児島地溝周辺の低地には南部九州の地形を特色づけるいわゆるシラス台地が広く発達する。これは低地や山地の緩傾斜面に堆積した火砕流堆積物がつくる地形である。姶良入戸火砕流および鳥越（阿多）火砕流は南部九州ほとんど全域の平野・盆地に分布し地形に応じて堆積している。鹿児島市は市街地を取り囲むように標高約 400m ～ 100m 前後の台地（北側に伊敷，吉野，西側に小野，西別府，南に坂之上の台地など）が連なっている。シラス台地は雨水により侵食谷が形成され，その台地の間を稲荷川，甲突川，田上川，脇田川，永田川などの河川が東流し，海岸部に小デルタを形成している。遺跡北側の吉野台地は 100m 程の急峻な姶良カルデラ壁となって鹿児島湾にのぞむ。さらに緩傾斜をもって南西方向へ続き，坂元台地に連なる。坂元台地の標高は約 200 ～ 100m で，姶良カルデラの外輪山の一部，城山に続く。これらの台地は姶良カルデラ噴出物の入戸火砕流堆積物（シラス）から成り，その上部にシラス以降に降下したテフラが堆積する。

鹿児島城跡御楼門周辺の標高は御楼門橋から御楼門に入る位置が約５m で，枡形虎口から城内本丸に上がった位置（黎明館）が約 11m である。鹿児島城は東側に鹿児島湾を望み，周囲は堀で囲まれ，背後に城山を擁するという自然地形を巧みに生かした城づくり・地形で構成されている。また，西側の城山の一部は昭和６（1931）年に国指定史跡・天然記念物となっている。

３　地質

鹿児島市城山周辺の地質は，大木・早坂（1970），大木（1974），大木ほか（2016）によって詳細に報告されている。大きくは下位より城山層（竜尾層を含む），鳥越（阿多）火砕流堆積物，入戸火砕流堆積物，桜島薩摩テフラ（小林，1986）が堆積している。最下層に位置する城山層は鹿児島湾に面した城山の南東斜面の標高約 30m 付近まで



第１図　鹿児島城跡周辺地質図

露出しており，阿多火砕流の直下に位置することから最終間氷期 5e の海成層と考えられている（大木 1999）。城山層の上位に認められる阿多火砕流堆積物は城山層との時間間隔がほとんどないことから，城山層は一連の阿多火砕流堆積物の最下部層である可能性が高い。入戸火砕流堆積物は姶良カルデラからの噴出であり，南九州一帯を覆い，火山灰は東北地方まで到達している。その上位にある桜島薩摩テフラは鹿児島市北部地域の台地状の平坦面に広く分布する。大木・早坂（1970）は分布域の層厚の差から噴出源を桜島付近に求めている。『新版火山灰アトラス』によると鳥越（阿多）火砕流の噴出年代は約 10 万年前，入戸火砕流は約 29,000 年前，桜島薩摩テフラ年代は約 12,800 年前となっている。

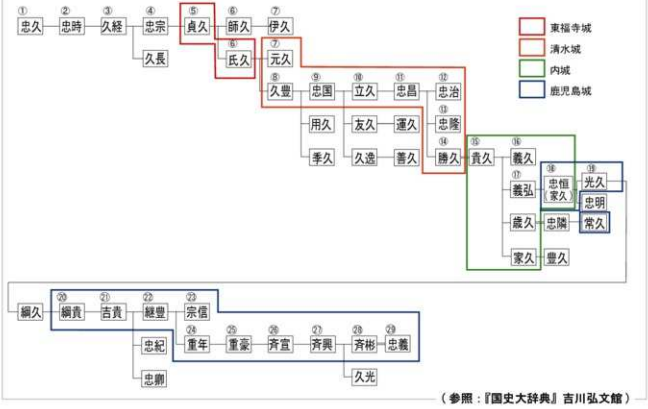
第 2 節　歴史的環境

鹿児島市の先史時代の遺跡は，市中央部後背地の台地先端部や小河川によって開析されてできた舌状台地等に多く点在するほか，市街地周辺では標高約 10m 前後の丘陵地に点在する。市南の台地先端部には縄文時代後期の草野貝塚，海岸に近い地域では一之宮遺跡，笹貫遺跡といった弥生～古墳時代の遺跡が多数点在する。市街地周辺の丘陵部では春日町遺跡，若宮神社遺跡等の縄文時代前期から後期にかけての遺跡が存在している。また現在の鹿児島城より北側には内城，清水城，東福寺城等，中・近世の城郭が残り，歴史のある地域として知られている。さらに幕末から明治初めごろの産業遺産等は，平成 27 年に世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼，造船，石炭産業」の構成資産である旧集成館・寺山炭窯跡・関吉の疎水溝がある。鹿児島城跡周辺に点在する遺跡について分布図と一覧表でまとめる（第 3 図，第 1 表）。

鹿児島城跡北側の吉野台地には旧石器時代～縄文時代の遺跡が多い。中でも前平遺跡，加栗山遺跡からは縄文時代早期前半の指標となる土器群が出土し，標式遺跡となっている。大正 4（1915）年，イギリスの医師であり考古学，人類学の研究者である N.G. マンロー（1863-1942）らにより，鹿児島県における黎明期の発掘調査が行われた石郷遺跡も吉野台地に所在する。この台地を取り巻くように流れる楠木川は，下流において稲荷川へと名前を変え鹿児島湾に流れる。稲荷川河口には縄文時代中期の標式遺跡の一つである春日町遺跡がある。

中世の鹿児島城下

島津氏は初代から 3 代までは鎌倉在住の守護職であり，5 代島津貞久の時に鹿児島に入り，守護大名から実質的に薩摩・大隅・日向三国を支配する戦国大名となった。守護大名時の鹿児島は都司の矢上氏や長谷場氏によって支配されていた。貞久は興国 2 / 暦応 4（1341）年，鹿児島郡司矢上高純の東福寺城（現在の鹿児島市清水町多賀山公園）を降し，居城としたことで島津氏の鹿児島進出が始まった。その後の居城の変遷については，島津氏が鹿児島進出の足がかりとした東福寺城に興国 4/ 康



（参照：『国史大辞典』吉川弘文館）

第 2 図　島津氏系譜図

第３図　鹿児島城跡周辺遺跡位置図

第１表　鹿児島城跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	種類	時代
1	201	062	鹿児島(鶴丸)城跡	城山町	平地	縄文時代, 古代, 近世, 近現代
2	201	－	仙巌園附花倉御仮屋庭園	吉野町9700-1	－	近世
3	201	027	雀ヶ宮	吉野町雀ヶ宮深堀	台地	弥生時代, 古墳時代
4	201	104	矢来門	吉野町雀ヶ宮矢来門	丘陵	縄文時代, 早期
5	201	145	集成館跡	吉野町磯	平地	近世
6	201	156	鹿児島紡績所跡	吉野町竜ヶ水	平地	近世
7	201	142	雀ヶ宮B	吉野町雀ヶ宮	丘陵	縄文時代, 草創期
8	201	005	前平	吉野町雀ヶ宮前平	台地	縄文時代, 早期
9	201	127	滝ノ上火薬製造所跡	吉野町滝ノ上	平地	近世
10	201	069	橋ノ口城跡	坂元町字城ノ後	台地	中世
11	201	055	清水城跡	清水町大興寺岡	丘陵	中世, 近世
12	201	054	東福寺城跡	清水町田之溝	丘陵	古代, 中世
13	201	083	尾頭小城跡	稲荷町字後迫	平地	中世
14	201	058	浜崎城跡	清水町田之溝	丘陵	中世
15	201	146	祇園之洲砲台跡	清水町祇園之洲	平地	近世
16	201	132	浜町	浜町	平地	近世
17	201	082	大乗院跡	稲荷町清水中校庭	丘陵	中世, 近世
18	201	144	福昌寺跡	池之上町玉龍高校一帯	平地	中世, 近世
19	201	003	丸岡	坂元町たんたとう丸岡	丘陵	縄文時代, 早期-後期
20	201	007	南洲神社	上竜尾町南洲神社境内	台地	縄文時代, 早期
21	201	009	大龍遺跡群	大竜町・池之上町・春日町	台地	縄文時代, 前期・中期・後期・晩期, 弥生時代, 古墳時代, 中世, 近世
22	201	056	内城跡	大竜町	平地	中世
23	201	057	龍馬柴城跡	坂元町矢上	丘陵	中世
24	201	143	堅野冷水窯跡	冷水町堅野	丘陵	近世
25	201	159	琉球館跡	小川町	－	近世
26	201	134	垂水・宮之城島津家屋敷跡	山下町	平地	近世
27	201	411	火除地跡	山下町13番21号	－	近世
28	201	105	名山	山下町名山小校庭	平地	近世, 近現代
29	201	106	造士館・演武館跡	山下町４－１，４－２	平地	近世, 近現代
30	201	061	上山城跡	新照院町	丘陵	中世
31	201	133	夏陽城跡	草牟田町夏陽	丘陵	中世, 近世, 近現代
32	201	060	伊集院城跡	伊集院町中福良	丘陵	古代, 中世
33	201	157	玉里邸跡	玉里町	－	近世
34	201	020	玉里	玉里町(旧練兵場跡)	平地	弥生時代, 初頭～前期
35	201	158	共研公園	中央町	－	弥生時代, 古代
36	201	129	武	武一丁目	平地	弥生時代, 古墳時代, 中世
37	201	023	鹿大構内	郡元一丁目鹿大構内	平地	弥生時代, 古墳時代

第４図　島津家歴代の居城位置図

永２～元中４/至徳４（1343～1387）年の44年間居城した。東福寺城は南北朝期，海に面した要害の城として重要な意義を有したが，居館や城下町を形成するには狭隘であった。そこで向側の楠木川（稲荷川上流）を隔てた北西の丘陵に七代元久は嘉慶元（1387）年，清水城を築いた。清水城は本城とも呼ばれ，鹿児島にある東福寺城以下，島津氏歴代の居城の中で別格の城であったと考えられる。

清水城には元中４/至徳４年～天文19（1387～1550）年の163年間居城した。天文４（1535）年勝久の没落後，空城となっていたが，天文19（1550）年，15代貴久が現在の鹿児島市立大龍小学校のあたりに内城を築いた。島津氏が薩摩・大隅・日向の三州統一および九州一円の制覇を目指す拠点として，交通の利便性や城下町形成に有利な地を選んだものと考えられる。内城には天文19～慶長７（1550～1602）年の52年間居城した。内城は一重の堀を巡らせた程度で，防衛機能に乏しく，慶長５（1600）年の関ヶ原の敗戦を機に移転問題が表面化した。そこで薩摩藩初代藩主忠恒（のちの家久）は，当時，城山の山上に築かれた山城（上山城，上之山城とも称された）及び麓に鹿児島（鶴丸）城を築くこととなった。上山城はほぼ現在の城山の範囲にあり，家久は上山城の曲輪を生かしながら，本丸曲輪，二ノ丸曲輪を整え，新居城となる山城を整備したと考えられる。

島津家の略系図と居城の変遷を第２，４，５図に，島津氏の居城と鹿児島城関連の年表を第２表に示す。

第５図　鹿児島城跡周辺における居城位置図

近世の鹿児島城下

鹿児島城の築城年月は，『築城史ヨリ見タル鹿児島城』の中で，「當城の築城年月は明かでないが，島津國史に依れば慶長七年上山城の構築を始め同十一年六月島津家久が此城に遷ったことになって居る」と記されている（林1930）。

鹿児島（鶴丸）城本丸跡発掘調査報告書「鹿児島城の沿革」の中では，『経兼日記』及び『見聞秘記』中の記事を紹介したうえで，「着工の年時に些少の相違はあるが，関ヶ原戦後程なく始ったとみてよいであろう」と記されている（五味1983）。

黎明館調査研究報告「鹿児島城について」の中では，「家久（初代藩主）は，1601年より鹿児島城（鶴丸城）の構築を始めると共に，ここを軍事・政治の拠点として藩体制を整えていった」と記されている（畠中1992）。

黎明館調査研究報告「鹿児島（鶴丸）城築城に見る思想」の中では，「鹿児島城築城の時期については，慶長６年説と７年説の両説があり，決定づけることは困難である」としつつ，「薩摩藩の公的編纂物は鹿児島築城を慶長７年としているといえる」と記されている（徳永2008）。

鹿児島国際大学調査研報告「島津藩の本城としての鹿

児島城」の中では，「家久は1602年，当時の領国内の地域行政拠点だった城を，「外城」と位置付けた枠組みを活かしつつも，家康勢と対峙する軍事的視野を優先しながら，藩政を新たに展開する新拠城としての内城の役割を念頭におきながら，新規に本城を築く覚悟で（義久，義弘の同意を得ることを優先して），上山城に屋形を加えて新鹿児島城を建設しようとした」と記されている（三木2014）。

鹿児島城の築城年については，慶長6年説あるいは慶長7年説と諸説あり，史料によって異なるが，関ケ原の戦い直後であるということは言えよう（鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画「2 鹿児島（鶴丸）城跡の論考 ① 築城年について」より抜粋）。

近世初期の頃の鹿児島城は上山城または鹿児島城（藩内では御内城）と呼ばれ，山城部分と麓の平城部分を含んでいた。慶長期には藩主の居館は山下に置かれ，慶長15（1610）年，常久（上山城主）に御城中警護を命じ，同17（1612）年から常久が上山城に在番，同19（1614）年常久が亡くなり，以後，番所が置かれることとなる。また，城山の南側麓に屋形（居館）が整備され始めるが，依然として山城部分が城のメインであった。大手は城山に通じ，居館の正門は御楼門であった。鹿児島城は，慶長末頃に一応の完成をみるが，元和から寛政年間にかけて増築，補修が続けられた。また，寛永16（1639）年，麓の御殿が増改築され，石垣の修補も行われる。

近世中期以降は山城部分を美称で鶴丸山と呼んでおり，それ以降から山城部分を鶴丸城と呼ぶようになった。明治になり鹿児島城全体を鶴丸城とも呼ぶようになった。麓の屋形（居館）が広大なものとなり，屋形（居館）の部分が目立つようになった。なお本丸曲輪は，石垣や堀に3面を囲われたものとなり，東及び南側からの姿は南九州第一の規模であり，壮大なものであったと考えられる。

慶安3（1650）年，大雨により城が破損し，元禄9（1696）年には大火により城が延焼し，本丸焼失，二之丸の一部を焼く。天明5（1755）年，25代重豪は二之丸を整備拡大する。明治4（1871）年に廃藩置県，同年に29代忠義が本丸を去ることとなる。

明治5（1872）年，明治天皇が西国行幸の際に鹿児島城を訪れ，随行した内田九一により撮影された城内の写真や錦絵が現存している（第Ⅴ章参照）。

明治6（1873）年，火災により本丸が炎上，明治10（1877）年には西南戦争により二之丸が炎上する。最後の内戦と言われる西南戦争では熊本県の田原坂など九州各地でその戦跡を残しているが，最後の戦地となった鹿児島城を含む城山にも多くの痕跡を残している。後の私学校跡や御楼門周辺では官軍から多くの砲弾，銃弾を浴び，石塀及び石垣にその痕跡を残している（第Ⅲ章第3節参照）。

その後，本丸，二之丸跡には教育関連施設が多く設立される。明治17（1884）年には県立中学造士館が設立され，今回の発掘調査で初代校長である島津珍彦の銅像台座の銘板（花崗岩製）が出土した。明治34（1901）年には官立第七高等学校造士館が設立され，今回の発掘調査では初代校長である岩崎行親の銅像台座が出土した（図版12㋐）。いずれの銅像も太平洋戦争時の金属供出で供出され，台座のみが残ったと考えられる。

昭和3（1928）年「薩藩庭園調査覚書」の中で，庭園について（山下御殿の庭（本丸庭園のことか））として，次のように記されている（永見1928）。

抜粋

(1) 池。岩組で築いた池畔。玉里上庭に見るのと全く同型の亀の姿体をかたちどる石を池中に浮かべる石の一枚反り橋。

(2) 対庭の家屋主体の片隅から磯岩組を組み出し池に進み入れる。それに沿ふて水を落とし流す。

(3) 背景にやや厚い植え込み。中景および前景に若干の配植。等々。

(4) 面積二三百坪級内外。

(5) この庭は斉興公の時，蠟の善八の造修または新造とご考証せられる事前項の通りであるが小生は技術的に考へて新造とするが事実にあたるに否ざるかと思ふ。等

また，本丸庭園内の御池の石は，昭和初期，官立第七高等学校プール建設の際に一部が鹿児島市の公会堂（現在の中央公民館）に，大部分は鴨池動物園の庭石として使用された。昭和46（1971）年12月，同園が平川へ移転する際，これらの石材は黎明館の庭園用に鹿児島市から譲渡され，昭和58（1983）年，黎明館西側に移設・復元された。

昭和24（1949）年には鹿児島大学文理学部が創設され，昭和27（1952）年，大火により一部を除き焼失，昭和32（1957）年には鴨池町から鹿児島大学医学部が移転することとなる。昭和35（1960）年，石垣の一部が崩壊，昭和49（1974）年，鹿児島大学医学部が宇宿町へ移転する。昭和53（1978）年より（仮称）明治100年記念館（現黎明館）建設のための発掘調査が行われた後，県歴史資料センター黎明館が設立され，現在に至る。

第２表　鹿児島城跡の歴史

No	年号	西暦	主な出来事
1	文治元年	1185 年	忠久，島津庄下司職に任命される。
2	建久７年	1196 年	島津家初代忠久，木牟礼城（出水市木牟礼）に入城したと伝えられる。
3	暦応４年	1341 年	５代貴久，鹿児島都司矢上高純の東福寺城（鹿児島市清水町多賀山公園）を下し入城する。
4	嘉慶元年	1387 年	７代元久，大隅国守護職を襲封して，清水城（鹿児島市稲荷町清水中学校裏山）へ入城する（諸説あり）。
5	天文 19 年	1550 年	15 代貴久，伊集院城（日置市伊集院町）より鹿児島に入城し，内城（鹿児島市大竜町　大龍小学校敷地内）を築造して居城とする。
6	慶長５年	1600 年	関ヶ原の戦い
7	慶長６年	1601 年	上山城普請
8	慶長７年	1602 年	初代藩主家久が鶴丸城の築城を始める（諸説あり）。
9	慶長 11 年	1606 年	家久，内城から鶴丸城へ入城する。楼門前板橋渡り初め
10	慶長 14 年	1609 年	琉球平定
11	慶長 17 年	1612 年	御楼門柱立
12	慶長 18 年	1613 年	堀普請・蔵の柱立
13	元和元年	1615 年	幕府の一国一城令により，上山城を廃止する。
14	寛永 16 年	1639 年	城の屋敷建替え・石垣の修補を行う。
15	慶安３年	1650 年	大雨により鶴丸城が破損する。
16	寛文４年	1664 年	鹿児島城石垣崩壊
17	延宝５年	1677 年	鹿児島城東北門破損，東北に新規建立願許可
18	天和３年	1683 年	二之丸建直し
19	元禄９年	1696 年	鹿児島大火により，鹿児島城へ延焼し本丸（御楼門とも）が焼失，二之丸の一部等が焼失する。
20	宝永元年	1704 年	鹿児島城，対面所，小番・大番所完成
21	宝永４年	1707 年	本丸再建工事完了
22	享保 12 年	1727 年	城下土居堀破損
23	宝暦９年	1759 年	普請方より出火し，奉行所や材木蔵が焼失する。
24	明和３年	1766 年	城下土居大雨のため崩壊
25	安永２年	1773 年	造士館・演武館ができる。
26	天明５年	1785 年	25 代重豪，二之丸を整備拡大する。それまで二之丸御門と呼ばれていた門を矢来御門（現在の県立図書館正門の位置）に改める。御下屋敷門と呼ばれていた門を二之丸御門（現在の市立美術館正門の位置）と改称する。
27	寛政４年	1794 年	二之丸の庭園を含む大工事が完了する。
28	文化７年	1810 年	御楼門前の板橋を石橋に架け替える。
29	文久３年	1863 年	薩英戦争
30	明治２年	1869 年	廃仏毀釈
31	明治４年	1871 年	廃藩置県。29 代忠義は本丸を去り，鎮西鎮台第二分営が入る。
32	明治６年	1873 年	本丸，御楼門が焼失する。
33	明治 10 年	1877 年	西南戦争。二之丸が焼失する。
34	明治 17 年	1884 年	（県立）中学造士館設立
35	明治 34 年	1901 年	（官立）第七高等学校造士館設立
36	昭和 20 年	1945 年	空襲により校舎全焼，石垣一部崩壊
37	昭和 27 年	1952 年	鹿児島大学文理学部全焼
38	昭和 32 年	1957 年	鹿児島大学医学部，鴨池町より移転
39	昭和 35 年	1960 年	石垣一部崩壊
40	昭和 49 年	1974 年	鹿児島大学医学部，宇宿町へ移転
41	昭和 53 年	1978 年	発掘調査（本丸跡・二之丸跡，昭和 54 年まで）
42	昭和 55 年	1980 年	県立図書館移設（現県立博物館より）
43	昭和 58 年	1983 年	県歴史資料センター黎明館開館
44	平成 11 年	1999 年	御角櫓跡周辺発掘調査
45	平成 11 年	1999 年	御角櫓跡周辺石垣を一部積み替え
46	平成 27 年	2015 年	鶴丸城保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施（継続中）
47	平成 27 年	2015 年	本丸北側堀の石垣が一部崩落
48	令和２年	2020 年	御楼門設立

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

発掘調査の対象となる調査位置・範囲については鶴丸城跡保全整備事業の計画及び関係機関との協議を基に設定した。平成 26 ～ 30 年度は石垣及び関連遺構の調査を主とし，石垣背面構造や排水溝等，遺構の残存状況の調査を行った。また，御楼門枡形虎口周辺の石垣に関連する遺構（礎石・石畳・排水溝等）の調査も行った。

発掘調査は当初，先行確認調査として２×４ｍ程度のトレンチを設定し，必要に応じて調査範囲を拡張した。表土は厚さ 10 ～ 30cm 程度あり，バックホー等の重機で薄く掘削しながら除去し，表土除去後，人力で山グワ，ジョレン，移植ごて，ねじり鎌等を用い，調査した。遺構面及び遺物の周囲は移植ごて，竹べら，竹串，手箒等を使い丁寧に検出した。記録保存調査ではないため，遺構を検出後，実測・撮影等を行い，調査後は養生シート（寒冷紗）を覆うことで遺構表面を保護し，調査前の標高まで元の覆土等で埋め戻した。遺構は基本的に検出時と完掘後に写真撮影をし，必要に応じて調査中の状況等を撮影した。撮影にはデジタルカメラ（NIKON D3200, PENTAX K-m, Canon EOS Kiss X7, NIKON D5000）を使用し，35mm フィルムカメラは NIKON FM2，FM3 を使用して白黒フィルム（富士フイルム株式会社 NEOPAN 100 ACROS）とスライド用フィルム（富士フイルム株式会社 PROVIA 100F）を用い，職員が撮影した。また，平成 28，29 年度は御楼門周辺の撮影にブローニー版（４×５フィルム）を用いて撮影した。平成 28 ～ 31 年度は民間業者に空中写真撮影を委託し，上空から遺跡及び周辺地形の状況等を撮影した。

遺構等の測量は平板とトータルステーションを用いて行った。世界測地系の国土座標と周辺の基準点（４級等）や黎明館内の既知の基準杭等を用いてトレンチや遺構の位置等を記録した。遺構の実測や測量は職員が行い，一部は民間業者に委託した。昭和 53 年の調査で設定したグリッドと同じ位置に調査区内を５ｍ間隔で区切り，調査を行った。グリッドは御角櫓南東角を基準として東（国道 10 号）側の石垣に平行にグリッド軸を設定したが平成 11 年度の石垣修復工事の際に積み替えを行っており，厳密に今回の調査で用いるグリッドに合わせることは出来ない。今回調査で用いた代表的な基準杭の国土座標値（世界測地系），標高値と位置を第３表，第６図に示す。また，今回の報告書の対象となる範囲において本丸東側石垣上段の Ⅰ～N-20 区を「１工区」，H ～ J-21 ～ 25 区を「２工区」，H ～ N-25 ～ 28 区を「３工区」，御楼門橋から枡形虎口内を「御楼門部」と呼称し調査区内の説明を行う。１～３工区は標高約 12m，御楼門部の標高は約７ｍで枡形虎口で鍵状に折れ曲がり本丸に通じる。

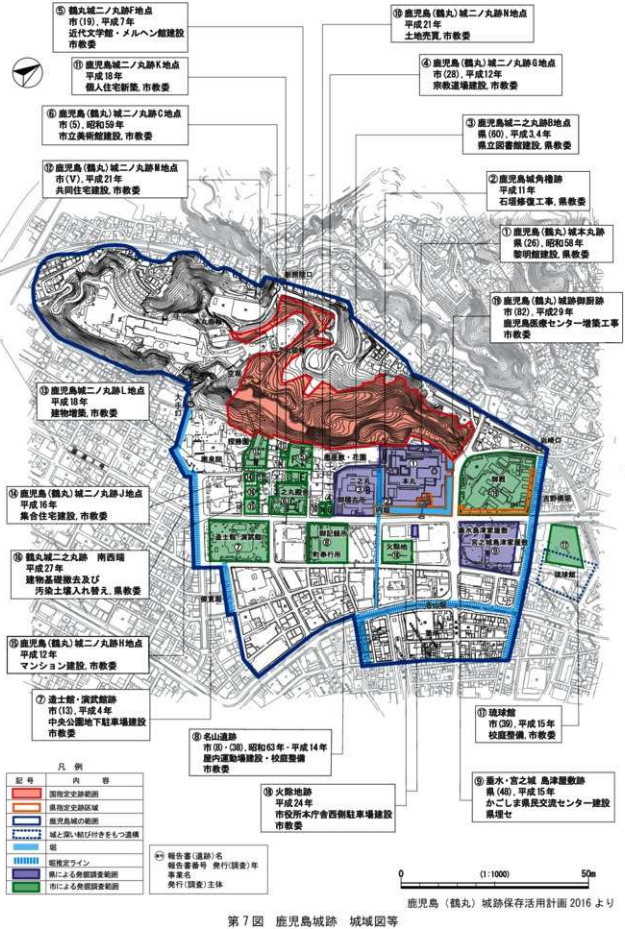
遺物の取り上げの際，一部についてはトータルステーションで位置情報を記録したが，包含層から出土したものは少なく，撹乱層や近現代の造成土から出土したものは層及びグリッド（トレンチ）の範囲で一括して取り上げた。その後，発掘調査事務所のプレハブや埋蔵文化財センターで水洗い，選別作業を行い，大量に出土した瓦は軒の瓦当文様から型式が分かるものと比較的破損の少ないものを取り扱うこととした。

整理作業は平成 27 年度から埋蔵文化財センター及び発掘調査事務所で実施した。出土遺物は水洗い，注記，選別，接合，復元，実測，トレース，レイアウト，写真撮影等を行い，遺構は図面整理，図面の統合，トレース，レイアウト等の一連の報告書作成の流れで行った。陶磁器の遺物実測・トレースと胎土分析等の自然科学分析業務は民間業者に委託した。土層断面図，遺構，遺物のトレースは Adobe 社の「Illustrator CC 2018」，「Photoshop CC 2018」を用い，編集・レイアウトは「InDesign CC 2018」で行った。

第3表　基準杭座標値

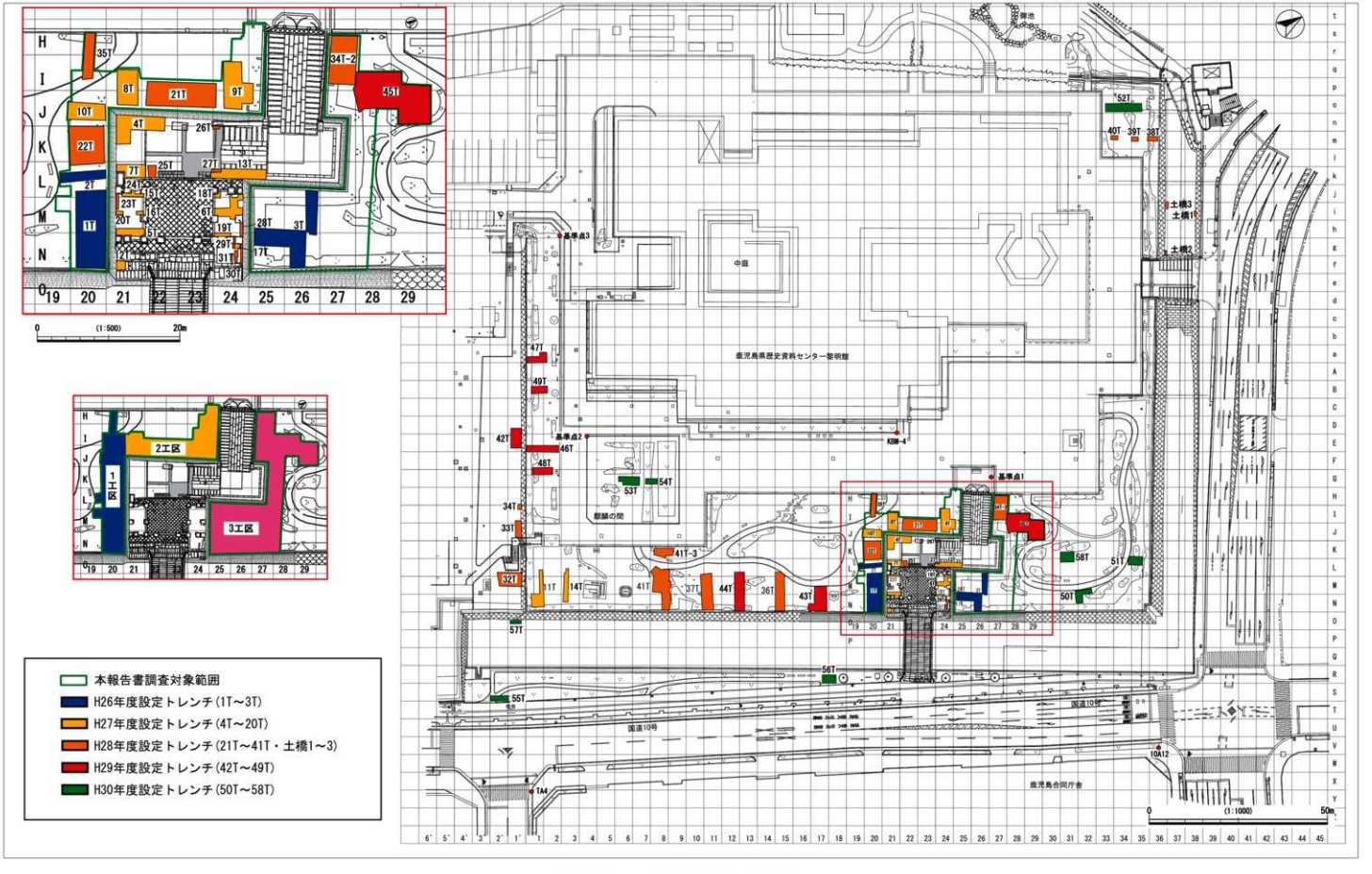
No	点名	X 座標 (m)	Y 座標 (m)	Z 座標 (m)	備考
1	10A12	−155297.705	−42094.160	5.090	既設（国道 10 号東側歩道・公共）
2	TA−2	−155365.873	−42131.123	5.101	既設（国道 10 号東側歩道）
3	TA−4	−155452.923	−42178.131	4.460	既設（国道 10 号東側歩道）
4	KBM−4	−155312.290	−42208.255	11.184	既設（黎明館敷地内）
5	1	−155296.560	−42183.490	10.730	H29 年度新設（黎明館敷地内）
6	2	−155386.253	−42254.085	11.276	H29 年度新設（黎明館敷地内）
7	3	−155362.456	−42305.741	11.881	H29 年度新設（黎明館敷地内）
8	O−1	−155427.282	−42221.824	−	H29 年度新設（N・O−0・1 区）
9	O−35	−155283.818	−42130.421	−	H29 年度新設（N・O−34・35 区）
10	g−1	−155370.951	−42310.234	−	H29 年度新設（g・h−0・1 区）

第６図　測量基準杭位置図



鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画 2016 より

第 7 図　鹿児島城跡　城域図等



第8図　トレンチ配置図（平成26～30年度）

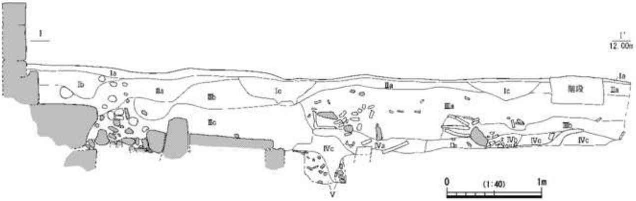
第2節　層序

鹿児島城跡周辺の地質は「第Ⅱ章　第1節　3地質」に記載のとおりで，ここでは各トレンチ壁，遺構断面に見られる局地的な土層（土質）について掲載する。基本土層模式図を第4表に記す。

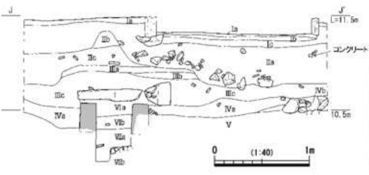
発掘調査で確認した層位の中に噴出源や時期が同定できるテフラはなかったが，局所的に凹み等に溜まった火山灰は認められた。遺構面から想定して，桜島P1（大正3（1914）年）やP2（安永8（1779）年）等の桜島起源の火山灰の可能性もある。Ⅰ層の表土と昭和53年に発掘調査後に埋め戻した埋土との違いも明確ではなく，土層表記も表土以外に「造成土」や「攪乱土（層）」等と表現している。また，調査範囲の一部は昭和53年の発掘調査範囲と重複しており，その際の埋め戻し土が造成土（攪乱土）となっている。

第4表　基本土層

層位	色調	備考	層厚
Ⅰ層	黒色土	表土	10cm
Ⅱ層	黄褐色土	近現代の造成土	20cm
Ⅲ層	黒褐色土	近現代の造成土	40cm
Ⅳ層	暗褐色土	近世の遺構検出面	－

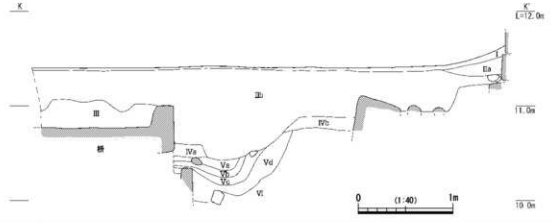


層		色調	特徴
Ⅰa	7.5YR3/1	黒褐色土	灰が溜まった表土～基本土層Ⅰ層と同じ
Ⅰb	7.5YR1/4	褐灰色土	低木（ヒラドツツジ）植樹の際の埋土
Ⅰc	7.5YR2/1	黒色土	炭が混じる。粘性がある
Ⅱa	10YR7/4	にぶい黄橙色土	きめは細かい。黒褐色土（10YR5/6）と黒褐色土（10YR3/1）が混じる。3cm以下のアカホヤパミスを含む。5cm程度の小礫を含む
Ⅱb	10YR7/1	灰白色土	きめの細かい砂質。3cm以下の小礫を含む。S53，54年度の排水溝トレンチの埋土か？
Ⅱc	10YR3/3	暗褐色土	きめは細かく，しまりはない。5cm以下の礫，漆喰片，瓦片を含む。S53・54年度のトレンチの埋土か？
Ⅲa	10YR3/3	暗褐色土	きめは細かい，ややしまりがある。5cm以下の礫，漆喰片，炭化物，瓦片を含む。近代の地面か？
Ⅲb	7.5YR3/1	黒褐色土	きめは細かい，ややしまりがある。5cm以下の小礫，漆喰片を含む。上面の一部にビニール袋が敷かれている
Ⅳa	10YR3/2	黒褐色土	きめは細かい，5cm以下の漆喰片，瓦片，小礫を含む。棟瓦（瓦積塀？）がⅣc層に埋まった際の埋土
Ⅳb	10YR4/2	灰黄褐色土	きめは細かい，Ⅳc層を掘り込む。5cm以下の漆喰片，10cm程度の瓦片が充填される。（遺構？）
Ⅳc	10YR4/3	にぶい黄褐色土	きめは細かい，5cm以下のパミス，礫，炭化物が混じる。近世の地山，基本土層のⅣ層
Ⅴ	10YR5/3	にぶい黄褐色土	きめは細かい，人頭大～拳大の礫を含む。裏込め

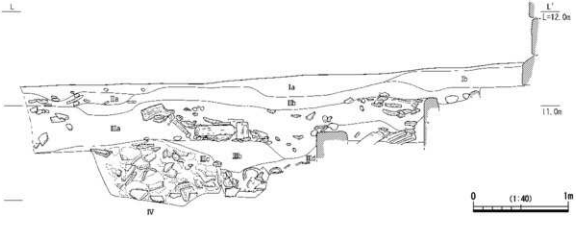


層		色調	特徴
Ⅰa	7.5YR2/1	黒色土	表土～基本土層Ⅰ層と同じ
Ⅰb	7.5YR3/2	黒褐色土	5cm以下の砂利層で園路のために敷かれた砂利
Ⅰc	10YR3/3	暗褐色土	きめが細かい砂利で園路の造成のための盛り土
Ⅱa	10YR4/2	灰黄褐色土	きめの粗い砂質。拳大のアスファルト，礫含む。瓦，ガラス片出土で10TのⅢa層
Ⅱb	10YR4/1	褐灰色土	きめは細かく固くしまった砂質。10cm以下のアスファルト，小礫を含む
Ⅱc	10YR4/4	褐色土	固くしまる。瓦片や5cm以下の漆喰，拳大の礫を若干含む。ガラス片出土
Ⅲa	10YR4/2	灰黄褐色土	瓦層状に堆積し，固くしまりのある土。上面は固められており，近代の基盤層と考えられる→七校か？
Ⅲb	10YR5/3	にぶい黄褐色土	砂利層，5cm以下の円礫混ざる
Ⅲc	10YR3/3	暗褐色土	きめが細かい砂層。10cm以下の礫，瓦片，漆喰を含む。Ⅳ層と排水溝を埋めた土。この上にⅢa層を敷いている
Ⅳa	10YR5/3	にぶい黄褐色土	きめが細かくややしまる。5cm以下の小礫，シラスのブロックを含む。瓦出土→五匹立馬屋の坪地業と考えられる。Ⅳb層と同じレベルになる→近世最後の段階の基盤層
Ⅳb	10YR4/3	にぶい黄褐色土	粘性強い。炭が混じる。拳大の溶結凝灰岩が敷き詰められている。凝灰岩は焼かれたものや，つぶされたものが多い→幕末の五匹立馬屋の坪地業か？
Ⅴ	10YR5/4	にぶい黄褐色土	きめが細かくしまりがある。黄橙色（10YR7/8）5cm以下のパミスと白色の5cm以下の小礫が混ざる。城山層。近世最初の段階の基盤層
Ⅵa	10YR3/3	暗褐色土	Ⅲc層と同じ砂質。後に排水溝へⅢc層が流れ込んだもの
Ⅵb	10YR4/1	褐灰色土	きめの粗い砂利層。瓦小片が混ざる→排水溝が機能していた時期に堆積した層
Ⅶa	10YR6/2	灰黄褐色土	一部粘質土。上面は固くしまっている。きめは細かい。瓦片出土→排水溝の床面と考えられる
Ⅶb	7.5YR5/1	褐灰色土	きめが細かい砂層。上面には10cm以下の礫が敷き詰められている→排水溝床面の下の造成

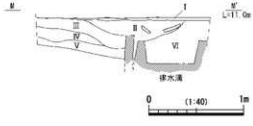
第9図　土層断面図



層	色調	色調	特徴
Ⅰ	7.5YR2/1	黒色土	表土。基本土層Ⅰ層と同じ。
Ⅱa	**10YR5/6**	**黄褐色土**	**キメの細かい砂質土。2cm以下のアカホヤパミスを含む。基本土層Ⅱ層と同じ。**
Ⅱb	10YR3/2	黒褐色土	しまりなくキメの細かい砂質。5cm以下の礫・玉砂利・人頭大の礫。
Ⅲ	**7.5YR4/2**	**灰褐色土**	**固くしまりのある砂質。5cm以下のシラスや3cm以下のアカホヤを含む。瓦・ガラス出土。上面は固くしまっており、どの段階かの地盤（基盤層）であった可能性がある。**
Ⅳa	10YR4/2	灰黄褐色土	キメが細かく、まばらな。5cm以下の礫・玉砂利を若干含むがパミスはふくらい。Ⅳb層を掘り込んである。Ⅳb層の遺構の断面から？（平面では確認できていない）
Ⅳb	**10YR5/6**	**黄褐色土**	**キメが細かくややしまりのない砂質土。1cm以下のシラス・3cm以下のアカホヤを含む。瓦出土。基本土層Ⅳ層。**
Ⅴa～d	10YR5/8	黄褐色土	基本的には北端と同じⅤ層だが水平に整備したものではなく、波状に整備しているようである。その様子が見えたので、a～d層に分類している。
Ⅵ	**10YR4/4**	**褐色土**	**固くほどがりのない砂質土。かなり固くしめられている。拳大の礫から3cm以下の小礫を散在図め、その中と上面に砂が堆積している。土も水が浸透しやすいような粗い砂が埋められている。高込めと考えられる。Ⅳb層下から検出された。Ⅳb層が遺構であるとの可能性のうえに乗せられている。**

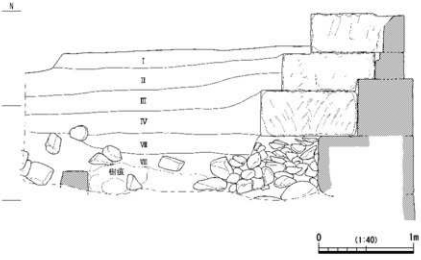


層	色調	色調	特徴
Ⅰa	10YR2/1	黒褐色土	表土。上面には3cm以下の小礫を含む。基本土層Ⅰ層と同じやや粘質。
Ⅰb	**10YR4/4**	**褐色土**	**3cm以下の明褐色土（10YR 5/6）のアカホヤパミスを多量に含む。礫層の際の埋土砂質。**
Ⅱa	10YR4/2	灰黄褐色土	拳大の円礫、5cm以下の角礫。3cm以下の明褐色土（10YR 5/6）アカホヤパミスを含む基本土層Ⅱ層と同じ。瓦片を含む。
Ⅱb	**10YR4/2**	**灰黄褐色土**	**Ⅱa層同じ土色だが少量の瓦片、礫を含むくらいで混入物はあまりない。砂質。**
Ⅲa	7.5YR5/2	灰褐色土	やや粘性の強い多量の瓦片（部分的に集中する。完形のものも含む近世の瓦が中心）。拳大の円礫を多く含土層盲層。中央部は盲心層の瓦を掘りおこして埋めたか？下部では円礫が散かれたように並んでいるところがある。
Ⅲb	**10YR4/3**	**にぶい黄褐色土**	**砂質。キメはやや細かい。5cm以下の礫を若干含むものの、瓦片を含めた遺物等はほとんど含まない。盲心層と盲心層の両方を切って堆積している。**
Ⅲc	10YR3/2	暗褐色土	砂質。キメはやや細かい。反白色（10YR5/1）の遺構片：全体の1/2～1/4といったやや大型の瓦片からなる層。遺構は基標で瓦と瓦を重ぐものであり、稀等が敷薄。それを含めた可能性がある。近世の基盤層（Ⅳ層）を掘りこんでいる。土坑の断面→城が掘けた後に瓦を片付けた痕跡か？
Ⅲd	**7.5YR4/4**	**褐色土**	**砂質。キメは細かい。完形の瓦から小片までの瓦片を大量に含むほぼ瓦の層。部分的に焼土が混じる。明治6年の火災の際に片付けの痕跡か。**
Ⅳ	10YR4/6	褐色土	砂質。やや硬いる3cm以下の小礫5cm以下のアカホヤパミスを含む。基本土層Ⅳ層と同じ近世の基盤層（地盤）

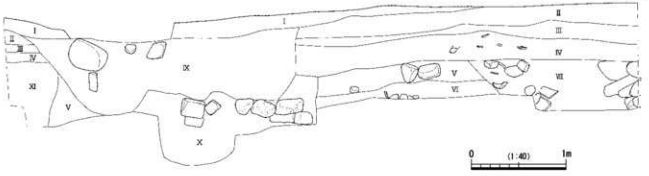


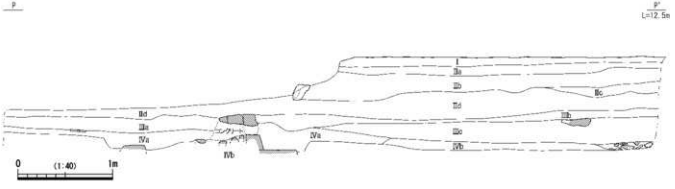
層			特徴
Ⅰ	7.5YR6/3	浅黄橙色土	混噛面（層）、しまり強、粘性少。
Ⅱ	**7.5YR6/3**	**にぶい橙色土**	**しまりあり、粘性少。**
Ⅲ	7.5YR4/4	褐色土	しまりなし、粘性少。
Ⅳ	**7.5YR5/6**	**明褐色土**	**しまりなし、粘性少。**
Ⅴ	7.5YR3/2	黒褐色土	しまりなし、粘性少。
Ⅵ	**7.5YR2/3**	**極暗褐色土**	**しまりなし、粘性少、混噛ブロックを多く含む。**

第10図 土層断面図



層	色調	色調	特徴
I	7.5YR4/2	灰褐色土	表土。
II	7.5YR4/1	褐灰色土	砂質が強く 橙色粒（火山焼石）を含む。
III	10YR4/2	灰黄褐色土	砂質が強く 10cmほどの礫を多く含む。
IV	10YR4/1	褐灰色土	10cm未満の礫や瓦片が多く入る。
V	2.5Y6/4	に ぶい黄色土	褐灰色ブロック・炭化物・須恵器を含みまだらに堆積。
VI	2.5Y5/3	に ぶい赤褐色土	5cm程の礫が多く含まれる。
VII	10YR4/2	灰黄褐色土	砂粒は粗く1～2cmほどの礫が多く入る。
VIII	10YR5/2	灰黄褐色土	20～30cmの礫でためる。 崩壊土状。
IX	7.5YR3/2	黒褐色土	鎮土を多く含む。
X	10YR5/2	灰黄褐色土	礫（コンガ片）を多く含む。 崩壊土状。
XI	7.5YR3/1	黒褐色土	炭・須恵が多く入り土質はあらかい。IV層下より



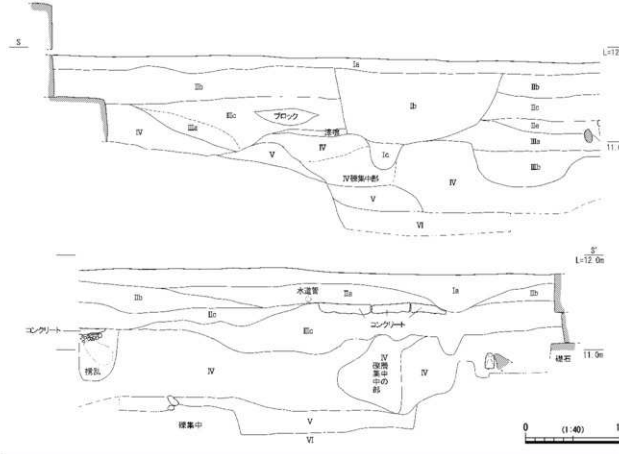


層	色調		特徴
I	10YR1/2	黒褐色土	表土一基本土層Ⅰ層と同じ。
II a	7.5YR4/2	灰褐色土	5cm以下の小礫を含む。キメは細かくやや粘性。
II b	10YR4/3	に ぶい黄褐色土	キメの細かい砂層。瓦片出土。ガラス出土。拳大以下の礫・須恵片を含む。
II c	10YR4/4	褐色土	キメの細かい砂層。拳大以下の礫・縄片・5cm以下のアカホヤ/ハスを含む。炭を含む。II d 層より石英片・アカホヤ/ハスを多く含む。
II d	10YR5/4	に ぶい黄褐色土	ややキメの細かい砂層。瓦片・ガラス片出土。拳大以下の礫・石英片・3cm以下のアカホヤ/ハスを含む。
II e	10YR4/6	褐色土	キメの細かい砂層。やや粘性がある。瓦片・拳大以下の礫・5cm以下の須恵片を含む。七高天文台のコンクリートと同じレベル。七高天文台の内部の土。
III a	10YR1/1	黒褐色土	キメの細かい砂。若干の瓦片・拳大以下の礫が混じる。一七高時代の地表（盛土）。
III b	10YR2/1	黒褐色土	瓦片・ガラス出土。キメの細かい砂。拳大以下の礫・5cm以下の須恵出土。一七高の時の盛成土。
IV a	7.5YR4/1 10R5/8	褐灰色土 赤色土	2つの層からなる黒土層。焼けた瓦や焼けた5cm以下の須恵出土。5cm以下の小礫が混じる。一明治年の火災の痕跡か？
IV b	10YR5/8	黄褐色土	キメの細かい砂層。5cm以下の灰白色のパミスが混じる。（姶山層か？）遺物は含まない。一近世の地面（盛成土）

第 11 図 土層断面図

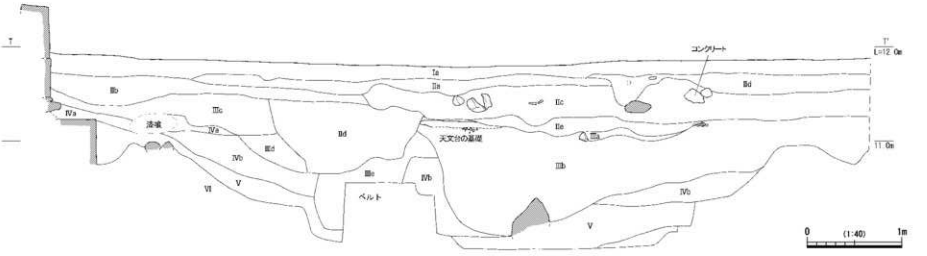
層	色調		特徴
Ⅰ	10YR3/2	黒褐色土	キメの細かい砂層。巻大の礫が混ざる。瓦片・ガラス片が出土。近世の遺成土。
Ⅱa	**10YR3/3 5YR6/8**	**暗褐色土 橙色**	**焼土からなる層。焼けた瓦を含む大量の瓦・須曜片を含む。炭が混ざる。**
Ⅱb	10Y2/1	黒色土	炭層。橙色の焼土の塊や須曜片混ざる。瓦出土。
Ⅱc	**10YR2/1**	**黒色土**	**Ⅱb層と同じだがよりキメの細かい炭層。若干の粘性がある。須曜片が混ざる。**
Ⅲ	10YR4/1	褐灰色土	キメの細かい水成堆積の砂層。3cm以下の小礫を含む。西壁のⅡ層と同じ。

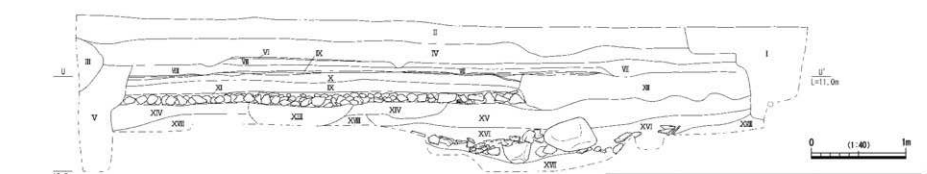
層	色調		特徴
Ⅰa	10YR3/3 5YR6/8	暗褐色土 橙色	焼土からなる層。焼けた瓦を含む大量の瓦片・巻大以上のしっくい片混ざる。炭が混ざる。一南側のⅡa層と同じ。
Ⅰb	**10YR3/3**	**暗褐色土**	**上面に黒色の炭層が広がり、大きな須曜片はほとんど含まれない。**
Ⅰc	10YR3/3	暗褐色土	炭の部分に大量の瓦片が混ざり　その上には瓦片は少なく須曜片は無縁なものになる。
Ⅰd	**10YR3/3**	**暗褐色土**	**5cm程度の須曜が多い。**
Ⅱ	10YR4/1	褐灰色土	キメの細かい水性堆積の砂層。3cm以下の小礫を若干含む。



層	色調		特徴
Ⅰa	10YR2/1	黒色土	粘性やや強い火山灰層。一部撹拌造成の際の植樹の埋土も含む。
Ⅰb	**10YR3/2**	**黒褐色土**	**炭含土　1cm以下のパミス（アカホヤ）を含む。瓦を含む。電線の掘り込み。**
Ⅰc	7.5YR4/2	灰褐色土	粘質土。キメは細かくしまりない。瓦・近代以降の陶磁器出土。電線の埋土。
Ⅱa	**10YR4/6**	**褐色土**	**キメ細かいシラス。黒色や灰白色のブロックの土が混ざる。瓦・インク瓶出土。一撹拌無造成時の地層。**
Ⅱb	10YR4/4	褐色土	ややキメが細かい砂質土。明赤褐色（5YR5/8）の2cm以下のアカホヤが混ざる。一瓦出土。
Ⅱc	**10YR4/1**	**褐灰色土**	**砂質土。コンクリートの破片。人頭大からこぶし大の礫を含む。一七宝・磁大段階の地面。**
Ⅱd	10YR5/4	に近い黄褐色土	砂質土。コンクリートの破片。2cm以下のパミスを含む。固くしめられている。一重機等の叩きしめ？
Ⅲa	**10YR7/1**	**灰白色土**	**炭化層。七高のコンクリート下にある。それ以前の火災に依るものか？**
Ⅲb	10YR4/2	灰黄褐色土	固くしまっている。須曜・三和土・大量の焼けた瓦・人頭大から拳大の礫を含む。一石垣の石や裏込めの石・石造物
Ⅲc	**7.5YR3/2**	**黒褐色土**	**全体にキメの細かい砂質土**
Ⅳ	10YR5/6	黄褐色土	
Ⅴ	**10YR5/8**	**黄褐色土**	
Ⅵ	10YR5/8	黄褐色土	
Ⅶ	**10YR4/4**	**褐色土**	

第 12 図 土層断面図

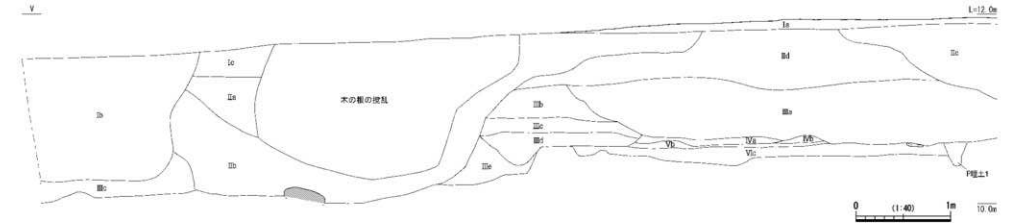


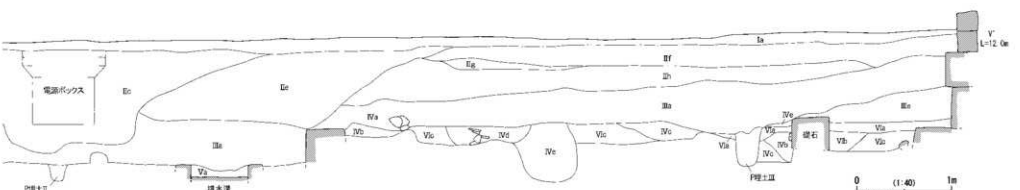


層	色調		特徴
Ⅰa	10YR2/1	黒色土	粘性ややや強い火山灰層。一部黎明縄造成の際の傾斜の埋土も含む。
Ⅱa	**10YR4/6**	**褐色土**	**キメ細かいシラス。黒色や灰白色のブロックの土が混ざる。瓦・インク瓶出土。一部明縄造成時の地層。**
Ⅱb	10YR4/4	褐色土	ややキメが細かい砂質土。明赤褐色（5YR5/8）の2cm以下のアカホヤが混ざる。一瓦出土。
Ⅱb	**7.5YR4/2**	**灰褐色土**	**人頭大の礫・水道管の破片・黒染めの石・瓦出土。七高時代の天文台のコンクリート基礎を壊している。**
Ⅱc	10YR4/1	褐灰色土	砂質土。コンクリートの破片。人頭大からこぶし大の礫を含む。一七高・鹿大用地の地盤。
Ⅱd	**10YR5/4**	**にぶい黄褐色土**	**砂質土。コンクリートの破片。2cm以下のパミスを含む。固くしめられている。一盲腸等の叩きしめ？**
Ⅱe	10YR7/1	灰白色土	炭化層。七高のコンクリート下にある。それ以前の火災に焼きもの？
Ⅲa	**10YR4/2**	**灰黄褐色土**	**固くしまっている。溝状・三和土・大量の焼けた瓦・人頭大から拳大の礫を含む。**
Ⅲb	7.5YR3/2	黒褐色土	全体にキメの細かい砂質土。
Ⅲc	**7.5YR4/4**	**褐色土**	**こぶし大の礫。2cm以下の三和土の小片含む。瓦出土。**
Ⅲd	10YR5/1	灰白色土	こぶし大の三和土を含む。瓦が多く出土。上面に溝幅の落の高さで固くしまる。一IV層の上面と同じ高さ。IV層を補修した部分？
Ⅳa	**10YR6/1**	**灰白色土**	**三和土。1cm以下の小礫を含む。上面は被熱の痕跡あり。かなり固くしまっている。**
Ⅳb	10YR5/6	黄褐色土	
Ⅴ	**10YR5/8**	**黄褐色土**	
Ⅵ	10YR5/8	黄褐色土	
Ⅶ	**10YR4/4**	**褐色土**	

層	色調		特徴
Ⅰ	10YR3/1	黒褐色土	カクラン。
Ⅱ	**10YR2/1**	**黒色土**	**表土。**
Ⅲ	10YR3/1	黒褐色土	カクラン。
Ⅳ			**現代造成土。**
Ⅴ	2.5YR6/6	橙色土	カクラン。
Ⅵ			**桜島火山灰。**
Ⅶ	10YR6/6	明黄褐色砂土	テニスコート造成土。
Ⅷ	**2.5YR6/1**	**赤灰色砂土**	**テニスコート造成土。**
Ⅸ			テニスコート造成土。
Ⅹ	**10YR4/2**	**灰黄褐色土**	**テニスコート造成土。**
Ⅺ			テニスコート造成土。
Ⅻ	**10YR3/1**	**黒褐色土**	**テニスコート造成土。**
XIII	10YR3/1	黒褐色土	近代カクラン。
XIV	**10YR4/1**	**褐灰色土**	**近代カクラン。**
XV	10YR3/1	黒褐色土	近代カクラン。
XVI	**10YR3/1**	**黒褐色土**	**近代カクラン。瓦を多量に含む。**
XVII	10YR4/2	灰黄褐色土	近代カクラン。
XVIII	**10YR3/3**	**暗褐色土**	**5cm以下の礫や瓦を含み土質はしまる。郷石検出層。（近世造成土）**
XIX	2.5YR7/1	明赤灰色砂質土	黄褐色粘土礫？地質ブロック？多く含む。

第 13 図 土層断面図

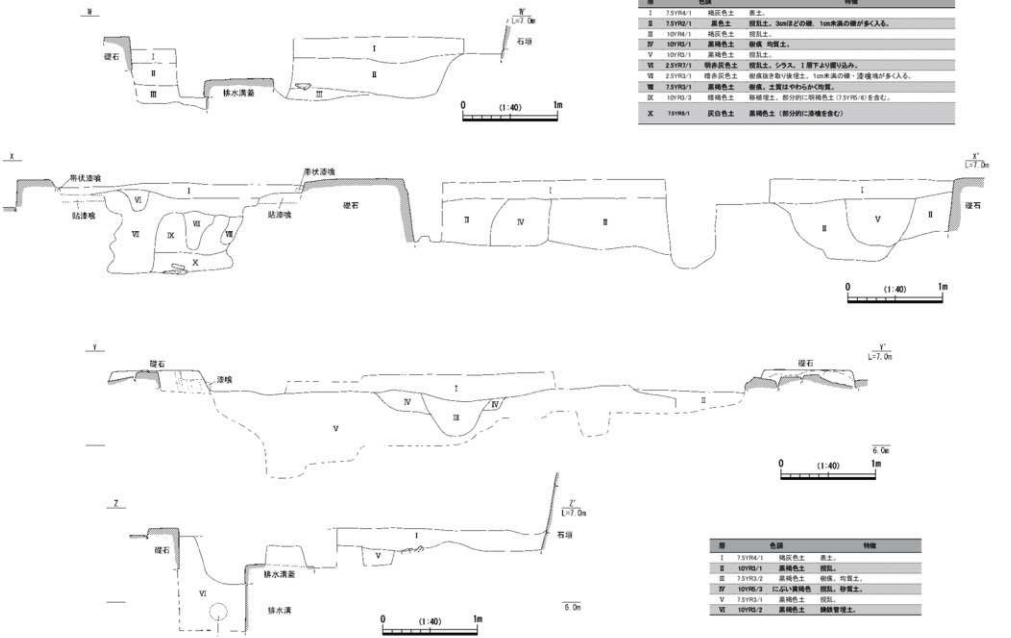




層	色調	特徴
Ⅰa	10YR5/1	暗灰色土	表土。基本土層Ⅰ層。
Ⅰb	**10YR2/1**	**黒色土**	**キメの細かい砂質、瓦片・レンガ片・5mm以下のアカホヤパミスを含む。一現代の攪乱。**
Ⅰc	10YR2/2	黒褐色土	表土。一Ⅰa層と同じ？
Ⅱa	**10YR3/4**	**暗褐色土**	**キメの細かい砂質、5mm以下のアカホヤパミスを大量に含む。一現代の根張のための造成土。**
Ⅱb	10YR4/4	褐色土	キメの細かい砂質、5mm以下のアカホヤパミスを大量に含む。一現代の根張のための造成土。
Ⅱc	**10YR4/3**	**にぶい黄褐色土**	**キメの細かい砂質、瓦片・ガラス片を含む。5mm以下のアカホヤパミスを含む。一現代の電線開閉のコンクリートブロックの造成土。**
Ⅱd	10YR2/3	黒褐色土	キメの細かい砂質、5mm以下のアカホヤパミスを大量に含む。人頭大から拳大の礫を含む。一現代の根張のための造成土。
Ⅱe	**10YR3/3**	**暗褐色土**	**キメの細かい砂質、5mm以下のアカホヤパミスを含む。拳大の礫・瓦片を含む。一現代の根張のための造成土。**
Ⅱf	10YR3/2	黒褐色土	やや粘性が強い。キメが細かい。5mm以下の礫を含む。一Ⅱa層と同じ。一現代の根張のための造成土。
Ⅱg	**10YR4/6**	**暗色土**	**キメの細かい砂質、5mm以下のアカホヤパミスを多く含む。一現代の根張のための造成土。**
Ⅱh	10YR3/4	暗褐色土	キメの細かい砂質、Ⅱe層とほぼ同じだが、アカホヤパミスを含む。一Ⅱe層と同じ。一現代の根張のための造成土。
Ⅲa	**10YR3/3**	**暗褐色土**	**キメの細かい砂質、人頭大から拳大の礫・コンクリ片・瓦・ガラス片を含む。一近世の墓壁際、Ⅵc層を切っており、七高山噴火か。**
Ⅲb	10YR2/3	黒褐色土	キメの細かい砂質、瓦片を含む。
Ⅲc	**10YR4/6**	**暗色土**	**キメの細かい砂質、粒子の瓦片を含む。**
Ⅲd	10YR4/3	にぶい黄褐色土	キメの細かい砂質、瓦片を含む。
Ⅲe	**10YR4/4**	**暗色土**	**キメの細かい砂質、人頭大から拳大の礫が混ざる。瓦片を含む。**

層	色調	特徴
Ⅳa	10YR4/3	にぶい黄褐色土	キメの細かい砂質。5mm以下の礫・瓦片を含む。一Ⅳ層と同じ。
Ⅳb	**10YR4/2**	**灰黄褐色土**	**キメの細かい砂質、瓦片を含む。**
Ⅳc	10YR3/2	黒褐色土	キメの細かい砂質、拳大の礫・落葉片・3cm以下の炭が混ざる。一Ⅳa層所の礫石があった場所一長鼻所礫石の抜きとり痕？
Ⅳd	**10YR3/2**	**黒褐色土**	**1mm以下の礫が入り炭化物を含む。Ⅳc層と同様長鼻所礫石抜きとり痕。抜き取られた時期は現代と思われる。**
Ⅳe		瓦完場跡（土師はほとんど含まれない）
Ⅴa	**7.5YR4/1**	**暗灰色土**	**砂粒は若干粗(均質)。長鼻所面りの排水溝埋土。**
Ⅴb	7.5YR4/1	暗灰色土	砂粒は若干粗(均質)。Ⅴa層中硬化面表層の粒と類似する。礫化進と根張も同レベル？
Ⅴc	**7.5YR4/3**	**褐色土**	**灰色土混じりでまだら状となる。また土質は固くしまる。礫石設置後の埋土（整地）。**
Ⅵb	7.5YR7/2	明褐灰色土	5mmから1cmの礫含む。礫石を据える際の地業にともなう盛り込み。
Ⅵc	**10YR4/2**	**灰黄褐色土**	**黒褐色土を含み、炭やcm以上の礫が若干入る。長鼻所造成土。**
P埋土Ⅰ	10YR3/1	黒褐色土	砂粒は細かいがと炭はまばらかし、まりがない。焼土・炭は含まれない。
P埋土Ⅱ	**10YR3/1**	**黒褐色土**	**砂粒は細かいがと炭はまばらかし、まりがない。焼土・炭は含まれない。**
P埋土Ⅲ	7.5YR4/2	灰褐色土	瓦・礫を多く含む。焼土等などは含まれない。

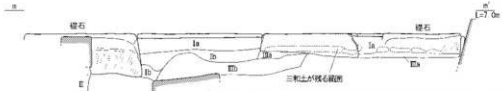
第 14 図 土層断面図



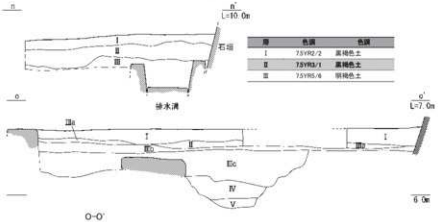
層	色調		特徴
Ⅰ	7.5YR4/1	暗灰色土	表土。
Ⅱ	7.5YR2/1	黒色土	撹乱土。3cmほどの礫、1cm未満の礫が多く入る。
Ⅲ	10YR4/1	暗灰色土	撹乱土。
Ⅳ	10YR3/1	黒褐色土	粘質、均質土。
Ⅴ	10YR3/1	黒褐色土	撹乱土。
Ⅵ	2.5YR7/1	明赤灰色土	撹乱土。シラス、Ⅰ層下より盛り込み。
Ⅶ	2.5YR3/1	暗赤灰色土	粘質土。1cm未満の礫・凍塊塊が多く入る。
Ⅷ	7.5YR3/1	黒褐色土	粘質、土質はやわらかく均質。
Ⅸ	10YR3/3	暗褐色土	移植埋土。部分的に粘褐色土（7.5YR5/6）を含む。
Ⅹ	7.5YR6/1	灰白色土	黒褐色土（部分的に凍塊を含む）

層	色調		特徴
Ⅰ	7.5YR4/1	暗灰色土	表土。
Ⅱ	10YR3/1	黒褐色土	撹乱。
Ⅲ	7.5YR3/2	黒褐色土	粘質、均質土。
Ⅳ	10YR5/3	にぶい黄褐色	撹乱。砂質土。
Ⅴ	7.5YR3/1	黒褐色土	撹乱。
Ⅵ	10YR3/2	黒褐色土	鋼鉄管埋土。

第 15 図 土層断面図



層	色調	色調	特徴
I a	10YR2/1	黒色土	やや粘性あり、しまりはなし。表土。T7 I 層と同じ。
I b	10YR2/2	黒褐色土	炭化物・粒＊＊層の褐色土を含む。切石や瓦を含む。II 層を切っており鉄筋管埋設時よりも後の堆積。
II	10YR3/2	黒褐色土	しまりのない土。IIa 層（炭化物・漆喰・IIc ＊層）が若干混ざる。一鉄筋管を埋めた層。
IIa ＊	10YR7/1	灰白色土	しまりはなし。黒色の炭化物と褐色土（IIc ＊層）とSm以下のしっくい（IIb 層？）が混ざる。
IIb ＊	10YR5/6	黄褐色土	混入物を含まない粘質土で全体的にややしまる。IIa 層上に漆喰（IIb ＊層）を貼る。IIa ＊層は御殿門建築の際の造成土。
IV	7.5YR4/1	褐灰色土	キメは細かい、かなり固くしまった層。凝灰岩をすりつぶして固めた層（地業）。一御殿門石畳直接基礎の基礎。



層	色調	色調	
I	7.5YR2/2	黒褐色土	
II	7.5YR3/1	黒褐色土	
III	7.5YR5/6	明褐色土	

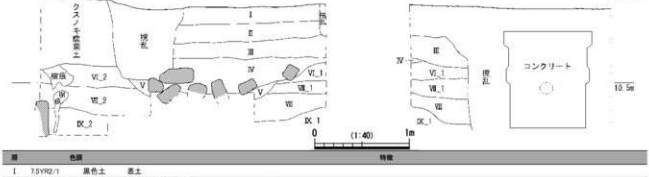
O-O'

層	色調	色調	特徴
I	10YR2/1	黒色土	西側部I層。
II	10YR4/1	褐灰色土	2cm以下のパミス・漆喰・小礫を含む。瓦出土。
II ＊	10YR3/1	黒褐色土	
IIb	10YR6/8	濃黄褐色土	
IIc	10YR5/3	にぶい黄褐色土	5cm以下の漆喰・アカホヤパミス・炭化物・がれきを含む。キメは粗く土塁はしまっている。
IV	10YR4/1	褐灰色土	
V	10YR4/2	灰黄褐色土	やや粘性あり、しまりあり。キメは粗い、砂質土。2cm以下のアカホヤパミスを含む、一地業の下に造成した層。

0 (1:40) 1m

P-P'

層	色調	色調	特徴
I	10YR2/1	黒色土	やや粘性あり、しまりはなし。表土。T7 I 層と同じ。
II	10YR3/2	暗褐色土	しまりはなし。IIa ＊層・炭化物・漆喰・IIc ＊層・石やコンクリートが混ざる。一鉄筋管を埋めた層。
IIa ＊	10YR3/1	黒褐色土	しまりはなし。炭化物、褐色土（IIc ＊層）、5cm以下の漆喰（IIb 層？）、瓦が混ざる。一或も層の上面が火災により被熱を受けたか。
IIb	10YR4/6	褐色土	キメの細かい造構の層。上面から熱を受けており、炭化物が混ざった部分がある。部分的に灰白色土（10YR8/1）があり、被熱がなければ上面はこの色だった可能性がある。
IV	7.5YR4/1	褐灰色土	キメは細かい、かなり固くしまった層。凝灰岩をすりつぶして固めた層（地業）。一御殿門石畳直接基礎の基礎。



層	色調		特徴
I	7.5YR2/1	黒色土	表土
II	7.5YR4/1	褐灰色土	七高か盛大の造成土か
III	2.5YR2/1	赤黒色土	七高か盛大の造成土か
IV	10YR2/2	黒褐色土	瓦が多く入る。基礎石か
V	10YR4/4	褐色土	VI間盛土。瓦の間に土
VI -1	10YR4/4	褐色土	1～2cmほどの瓦と黒色土ブロックが多く含まれる。近世造成土。
VI -2	10YR4/3	にぶい黄褐色土	VI -1・VII -1 と土質、含有物同じだが、土色が暗い。
VII -1	10YR4/3	にぶい黄褐色土	砂質が強く、均質。瓦片が多く含まれる。近世造成土。
VII -2	10YR5/2	灰黄褐色土	VI -1・VII -1 と土質、含有物同じだが、土色が暗い。
VIII	10YR5/4	にぶい黄褐色土	淺黄橙（5/3）、黄橙（7/8）粘質の小ブロックとが多く含まれる。近世造成土。
IX -1	10YR6/3	にぶい黄褐色土	粘質あり。黄～灰白色土、淺黄橙～黄橙のブロックとにぶい黄褐色（10YR5/4）砂質が混在する。近世造成土。
IX -2	10YR5/2	灰黄褐色土	VI -1・VII -1 と土質、含有物同じだが、土色が暗い。

第 16 図 土層断面図

第３節　発掘調査の成果

１　遺構

(1)　近世

①　排水溝

今回の調査対象範囲において，最も広い範囲で検出された遺構が石製の排水溝である。初期に形成された段階から開渠と暗渠のものがあったと考えられ，本丸における排水溝は開渠から暗渠として利用され，蓋が残存した状態で検出された。御楼門を通り堀へ注ぐ排水溝は暗渠排水溝である。石材は溶結凝灰岩で，底石，側石，（蓋）で構成される。縦 51～132cm，横 41～49cm，厚さ 12～36cm の直方体の板石を組み合わせて作られ，各石の繋ぎ目には白又は黒色の漆喰が塗られている。開渠の内面は丁寧な加工・調整を施しているが暗渠の内面は比較的粗く加工されている。

排水溝は本丸内では石垣に沿うように配置されており，石垣面（裏込め石）に極力排水が流れ込まないような（石垣が孕みださないような）配置となっている。本丸で集められた排水は石垣に数か所作られた排水口等から御楼門の枡形虎口内に集められ，堀へと注がれる。

１工区，２工区の石垣に沿う排水溝１は検出時に蓋が多く残っていた。昭和 53, 54 年の発掘調査時も検出されている。２工区に比べ，１工区の排水溝の側石の方が高く作られており，水量の多さを考慮していた可能性がある。排水溝の埋土からは多くの瓦を中心とした遺物が出土した。J-20 区では南側（本丸中心部）からの排水溝とＴ字状に合流し，石垣背面から御楼門枡形虎口内へ排水口を通して注がれる構造となっている。２工区 I-22 区でも西側からの排水溝２がＴ字状に合流し，本丸中心部からの排水が集まる仕組みとなっている。合流点のすぐ南側には堰状の石製構造物が置かれている。用途は不明であるが，排水の方向や水量を調整していた可能性がある。

H-24 区では北西－南東方向に延びる２列の排水溝が 50cm 程度離れて平行に検出された（第 25 図）。南側の排水溝３は底石，側石の一部のみが残存しており，北側のものよりも標高が 20cm 程度低く作られている。検出状況から南側の排水溝の方が古いと考えられる。

３工区 I-27 区でも石垣に平行に排水溝４が検出された。その東側のクスノキ近くでは排水溝の一部だけが残存していたが，K・L-27・28 区では検出されなかった。K-27 区の石垣には排水口があるため，ここに排水溝が伸びていたと思われる。排水口には近現代の土管が置かれていたため，第七高等学校等の文教施設があった時代にも排水口として使われていたことが分かる。

３工区東側の御兵具所建物跡周辺にも開渠の排水溝５が検出された。側石は 12cm 程度と浅く，建物の基礎（基壇）を巡るように配置されており，雨落とし溝としての機能が想定される。

②　石塁

１，２工区の石垣背面には検出面において幅 0.5～２m の範囲に裏込め石が検出され，排水溝との境界に切石が並んで検出された。この切石は御楼門正面にあたる石垣背面に作られており，御楼門正面の防御機能として石塁が形成されたと考えられる。

③　御楼門礎石

御楼門の礎石の法量等を第５表に示す。平面形状は概ね長方形のもと正方形のものが存在する。平面形の大きさの最大クラスは礎石４と５で，最小クラスは礎石１と礎石 18 である。断面形状と厚さについては全てを調査していないが，「裾広がりのもの」「オーバーハングするもの」「中心部が最も厚くなるもの」等が見られ，厚さが判明しているものでは最大 72cm，最小 43cm である。

「角突出部」とは，礎石の一角が外側に突出するものであり，表では「角突出部」として取り扱った。第１列では見られず，第２列では半分，第３列では全ての礎石で見られた。

礎石の表面加工としては，周囲を面取りしたと考えられる痕跡が多く見られる。面取り加工は石垣や縁石と接する部分には見られない。礎石４，６，14，16 には線状の剥離痕が見られ，礎石７，礎石９は一角が大きく剥離している。

表面に認められる痕跡としては，金属の付着，銃弾痕の痕跡，三和土の痕跡がある。金属の痕跡として，礎石

第 17 図 挿図位置図

1～6には鉄錆が線状に残り，鉄分が部分的に付着している礎石もある。礎石7と礎石14は緑青が線状に残り，礎石3と礎石11には径5mmの緑青点が見られる。礎石10，礎石12，礎石15，礎石16には銃弾痕と考えられる凹みが残る。西南戦争か太平洋戦争時のものと考えられるが，どちらかは明確ではない。礎石の側面には表面下10～12cm程度のところに三和土（タタキ）と考えられる硬化土（淡黄褐色土）が見られる礎石が多い。特に礎石7と礎石8の間は良好に残存している。石垣との境界（接点）には幅5cm，長さ10cm程度の加工礫が間詰めを行っている（礎石1，8，9，12，13，18）。

礎石の下には長さ10cm程度の割栗石を用いた地業と考えられる基礎工事の痕跡が見られるものがある（礎石3，6，10～12，17）。近代以降の鋳鉄管敷設により，礎石下がほぼ半分撹乱されたものがある（礎石3，10，15）。

御楼門部における石畳は一辺が57cmの正方形のものと一辺が62cmの正方形の大小2種類があり，いずれも溶結凝灰岩である。御楼門部と橋の間には大小数種類の長方形の石畳が組み合わされている。また，石畳の表面には鉄分または燃焼等により生じた赤色化現象が認められる。

堀に近い石垣沿いの石畳3枚（厚さ約10cm）を除去したところ，漆喰混じりの焼土面を確認した。なお，石材1枚は被熱等による劣化のためか大きく二つに割れた。

縁石は礎石同士を結ぶように置かれ，石畳の区画を縁取る役目を果たしている。縁石と接する礎石にはほぞ穴的な細工を施した部分が見られる。ただし，細工部分のサイズと縁石が合致しない例も見られる。

三和土（タタキ）は淡黄褐色を呈し，カルシウムやケイ素，鉄分を含む土のことで，内部には植物繊維も見られる。漆喰土は白色を呈し，カルシウム分の極めて高い土である。

礎石や石畳，縁石以外は，三和土や漆喰混じりの土によって表面を硬化する作業を行うことを基本としたと考えられる。番所跡の床面部分は特に丁寧である。
礎石と床面の接点は三和土を塗り固めることにより，隙間の補強を行っている。

御楼門部の両サイドには長さ約14m，幅約0.7mの暗渠排水溝が敷設されている。暗渠排水溝は溶結凝灰岩製で，排水溝敷設後，御楼門床面部は三和土等で整地を行っている。両排水溝共に敷設当時の形状を維持しているものと考えられる。ただし，南西側の排水溝は内部に土砂等が堆積している状況が見られた。

御楼門部南西側の礎石間に，径18cm程度の鋳鉄管が検出されて。鋳鉄管は礎石と暗渠排水溝の間約40cmを掘り下げ，地表下約1mの位置に敷設したもので，礎石3，10，15の下に潜らせたような状態で検出された。管の接合部に「N　水　丸久,E」という文字が認められ，形状の規格化から明治後半から昭和初期の製造と考えられる。これらの特徴からこの鋳鉄管は城内から堀に水を供給するための管の可能性が考えられる。

御楼門部南西側の調査で，表土直下からコンクリートの砕石で構成された集石が6か所検出された。看板等の柱の基礎等が想定される。

礎石間には樹木植栽の痕跡と考えられる攪乱部分が数か所見られた。第七高等学校造士館時代の絵葉書写真から植栽の様子を知ることができる。攪乱部分はすり鉢状を呈するものが多く，瓦礫を投げ入れたような部分もある。下部に地業が残っているものもある。

④　石垣積石層観察

御楼門部の枡形虎口は，第18図のように御楼門を通り，北と東に折れ唐御門（城内側）へ向かう鍵型構造である。その両壁は石垣となる。鹿児島城跡の石垣面の略名称は確定されていないことから，今回，枡形内石垣を便宜上Ⅰ～Ⅷ面石垣とし報告する（第40～44図）。

平成28年に刊行された鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画では，鹿児島城本丸石垣石材の加工度や積み方により分類を実施している。枡形内石垣の分類をみると築石部は，Ⅰ・Ⅲ面とⅡ面天端石を含む上部三石列以下で亀甲崩し積み，Ⅱ面上部三石列とⅣ～Ⅷ面では布積みとなる。亀甲崩し積み，布積みともに石材加工度は高く，合端面は密に接する切石の精加工石材である。ただし，布積みも多角形の石材を使用していることから，亀甲崩し積みと布積みの差が明瞭でない。また，Ⅰ面～Ⅴ面石垣では三角形状の詰石を使用しているのに対して，Ⅵ面～Ⅷ面石垣には詰石を使用しない。この詰石使用の相違が時期差なのか工人の割り当て（工区）の差であるのかは明確ではないが，少なくともⅠ面～Ⅴ面，Ⅵ～Ⅷ面は同質性を感じる。

隅角部は精加工石材の算木積みとなる。Ⅲ面・Ⅶ面共有の角石上部では気負いとなることから積み直しも想定される。

石垣石材については鹿児島市北部で産出される吉野火砕流堆積物である溶結凝灰岩，通称「たんたど石」を築城期普請から修復ともに一貫して使用している。

⑤　石垣に残る火災痕

御楼門は元禄9（1696）年と明治6（1873）年の2度焼失した。元禄9年の火災の後，幕府に対して修復の許可願いを提出した際の絵図では，御楼門部桝形内石垣を含め，本丸石垣のほとんどが破損・崩壊したことが記録されている。現在見られる石垣の火災痕跡は明治6年の痕跡である。

御楼門に接していた左右袖石垣であるⅠ面・Ⅱ面石垣では火災の影響で，石材が赤色化し，部分的に石材表面が熱膨張・収縮による剥離破損している。特に御楼門の礎石付近の剥離が著しい。御楼門の石垣側の柱は寄せ掛け柱構造で石垣面に近接していた為に熱影響が大きかったと考える。

⑥ 石垣に残る意匠としての加工痕

Ⅰ面・Ⅱ面石垣では石垣目地に漆喰を塗り込み，白色のラインが残存している箇所がある。この漆喰が残存している，もしくは，漆喰を充填させるための加工痕跡がある石材の範囲は御楼門の梁間に限る。

漆喰を充填させるための石材加工は，合端面から約3㎝（一寸）を単位とした幅を石材周縁に浅く彫り込む。彫り込んだ部分は平坦面，溝状を呈するが，漆喰を充填させることが目的であるためか一貫性はない。漆喰が剥落している箇所は「金場取り残し」のような石材状況である。

明治6年の火災で生じた被熱剥離とともに，石材加工痕も剥離されていることから，明治6年の火災前には漆喰充填作業は施工されていた。施工実施時期については，元禄9年以降の再建時，もしくは天保15（1844）年に御楼門の解体修理を実施した時期が想定される。

この石垣目地に漆喰を塗り込むという行為は石垣の装飾性を高める意匠として捉えることが出来るが，その範囲は御楼門によって外部から可視出来ない。木造建築物である御楼門を石垣側の湿気から保護するための施工との見方もあるが，目地だけを閉塞して効果があるのか疑問が残る。

明治初期に撮影された江戸城大手門や西の丸書院門の写真では石垣の目地に白いラインが写る。これが漆喰によるものかは不明だが，石垣全体の装飾性を高めるために行った手法の一つで，薩摩藩も採用したのではないかと考えたい。外から可視出来ない石垣に対して装飾性を高める行為については，御楼門内部から可視出来た可能性もあったのではないかと推察する。

⑦ 石垣に残る戦跡痕（砲弾痕）

鹿児島城は3度の戦争で被害を受けている。文久3（1863）年の薩英戦争，明治10（1877）年の西南戦争，昭和20（1945）年の第二次大戦鹿児島空襲である。薩英戦争ではイギリス艦隊の砲撃が御楼門に着弾し，西南戦争では二之丸が炎上するなど，城下を含め一体が戦場となる。鹿児島空襲では第七高等学校の校内にいた生徒も被害を受けた。

御楼門部枡形内石垣には大小含め無数の砲弾痕が残っており，なかには砲弾の信管と思われるものや砲弾片がそのまま残存している砲弾痕もある。石垣に残る砲弾痕は，使用火器類の違いや発射から着弾までの距離，重複着弾箇所，石材の強弱部などの諸要素によって痕跡も一様ではないが，以下のパターンとした。

① 幅20㎝程度，深さ10㎝弱　ボウル形に凹む。
② 幅10～20㎝程度，深さ10㎝弱　着弾面は広く，内部は狭く深い二重凹状となる。
③ 幅10㎝程未満，深さ1～2㎝程度　浅く凹む。
④ 幅5㎝程未満，深さ1㎝程　砲弾片が石材に食い込み圧着する。

これら①～④パターンの痕跡をカウントしてはいないので正確な数字は言えないが，印象として③，④が多い。次に①，②が続くが，着弾が集中している箇所では①，②の区別は難しい。

上述痕跡がどの段階によるものなのか，及び痕跡元の火器について考察する。私学校跡の石塀には西南戦争の銃弾痕が無数に残る。この弾痕は明治10年9月1日～24日，特に9月20日以降の官軍の攻撃によるものと考えられる（鹿児島市史Ⅲ　上村行徴日記）。弾痕は③と同様が多数残る。①は白化した大型の金属片が残存する。先端は石垣に食い込んでいるために全体像については不明確であるが，信管と弾体（弾殻）が分離する四斤砲の信管ではないかと思われる。着弾面の幅，深さから威力のある火器であったことは間違いない。②は着弾面の幅に対して非常に深く，貫通力のある火器であることは間違いない。内部に金属片も一部残る。また，二重凹状は旧日立航空機（株）立川工場変電所の機銃掃射跡に類似する。④は石垣Ⅰ面側のⅢ面寄りに炸裂したような痕跡から曳火式信管による四斤砲の弾体（弾殻）片と考えたい。ただし，砲弾片が圧着していないと③と区別はつかないと思われる。

砲弾痕パターンと対比させると以下のような想定が出来る。

①西南戦争時の四斤砲(榴弾，榴霰弾，霰弾の区別は不明)
②第二次大戦時の機銃掃射痕
③西南戦争時の小銃弾痕（エンフィール・スナイドル等）
④西南戦争時の四斤砲弾体（弾殻）片

ただし，西南戦争時の御楼門部枡形内の戦闘状況の記録を示す史料は無く，また，第二次大戦の機銃掃射がおこなわれた伝聞はあるが記録はない。石垣に残る砲弾痕については，今回の調査目的外であり，悉皆調査等を実施していないことから推測の域であることは了承されたい。

前述したが，今回の調査目的に石垣面の調査は含まれていない。しかし，御楼門建設によって石垣を観察出来る面積が少なくなることや，御楼門建設に先立ち石垣のクリーニング作業によって認知されていなかったおびただしい砲弾痕の状況，また県立埋蔵文化財センターで石垣面についても現地説明会等を実施したことから今回，

考察をおこなった。

⑧ 裏込め（第 19 ～ 31 図）

石垣の背面には拳大から人頭大の円礫が裏込め石として検出された。裏込め石は石垣天端付近において背面から幅 0.5 ～ 2 m程度検出されており，城内の排水の調整及び石垣の孕みだしの防止等としての機能を果たすと考えられる。裏込め石は検出と測量のみ行ったため，深さ等の下部構造については判明していない。

⑨ 建物跡（第 25，29 図，第 6 表）

御楼門周辺におけるその他の建物跡として，H・I-24 区において，礎石の配列が検出された（第 25 図建物跡 1）。排水溝の側石に乗るように置かれた礎石は縦約 32 ～ 55cm，横約 35 ～ 52cm で上面が平らになるように置かれている。礎石の間隔はそれぞれ約 2 m で，成尾常矩絵図によると唐御門の番所跡に近い位置にある。

I・J-28・29 区において，拳～人頭大の円礫が集中し，等間隔で並ぶ遺構が検出された（建物跡 2）。昭和 53，54 年度の調査において周辺から多数の栗石・礎石跡が検出されており，今回の調査で東側に建物が伸びることが判明した。この建物は絵図等から御兵具奉行張番所跡と考えられる。

⑩ 御兵具所跡（第 31 図）

M・N-27・28 区において建物跡と考えられる石列，礎石，排水溝が検出された。石列・排水溝は石垣に直交して北西に延び，M-27 区において 90° 折れ曲がり，石垣に平行して北東に延びる。石列の外側には石製排水溝（雨おとし溝）が伴い，内側に礎石が検出された。この建物は古写真，絵図等から御兵具所跡（多聞櫓跡）と考えられる。

(2) 近現代（第 18，31，38，23 図）

近現代の遺構として，天文観測室跡，鋳鉄管（跡），鋼像関連基礎石がある。天文観測室跡（第 31 図）は鹿児島大学文理学部時代のもので，昭和 24 ～ 30 の施設である。大小 2 つのドーム状を呈し，北東側に円形に巡る布基礎が 1 基検出された。南西側の基礎は大きく攪乱を受けており，検出されなかった。

鋳鉄管は御楼門部南側排水溝近くで 2 本検出された。鋳鉄管 1（M-21 区）は表土下 80 ～ 20cm の深さで検出され，暗渠排水溝に平行して伸びており，断面形は円形，断面直径は約 17cm，黎明館側に近い連結部に「N」の印が認められる。鋳鉄管 1 の管の一端は南側石垣方向に 90 度折れ曲がった後，地表面に立ち上がるように折れ，端は排水溝に隣接する。鋳鉄管 1 の立ち上がり部分には脚（支え）が認められる。鋳鉄管 1 のもう一端は東堀（国道）方向に伸び，堀手前で下方に折れ堀底へ向かう。端は石垣背面，堀底側に伸びており，最終端は確認できていない（第 18 図）。西側に別の鋳鉄管 2（K-21 区）が検出された。鋳鉄管 1 と同様，一端が地表面に立ち上がるように折れている。もう一端は確認できていない。平成 29 年度の調査で継手部分に「N 水 久 E」の文字が認められ，鋳鉄管は堀に水を供給する水道管であった可能性が高いと思われる。日本ダクタイル協会，株式会社クボタによると，「久」は鋳鉄管の製造社名を表し，クボタ製の鋳鉄管であるとの情報をいただいた。国産の鋳鉄管は明治中期以降に製造されるようになる。大正 3 年に鋳鉄管規格が制定され材質・規格等が統一されるようになり，鹿児島城の鋳鉄管は，形状（受口の出っ張り）や文字の特徴等から大正 3 年の規格（大正 3 年制定～昭和 12 年廃止）に準拠したものと考えられる。

鋼像関連の石列 1 は I-23 区において検出された。3 基の礎石には表面が水平に加工された面とその中央に四角いホゾ穴が 1 か所あり，官立第七高等学校時代に建立されていた，初代校長島津珍彦像の周囲に巡らされた柵の基礎石の可能性がある（第 79 図）。

(3) 時期不明

① 瓦溜まり

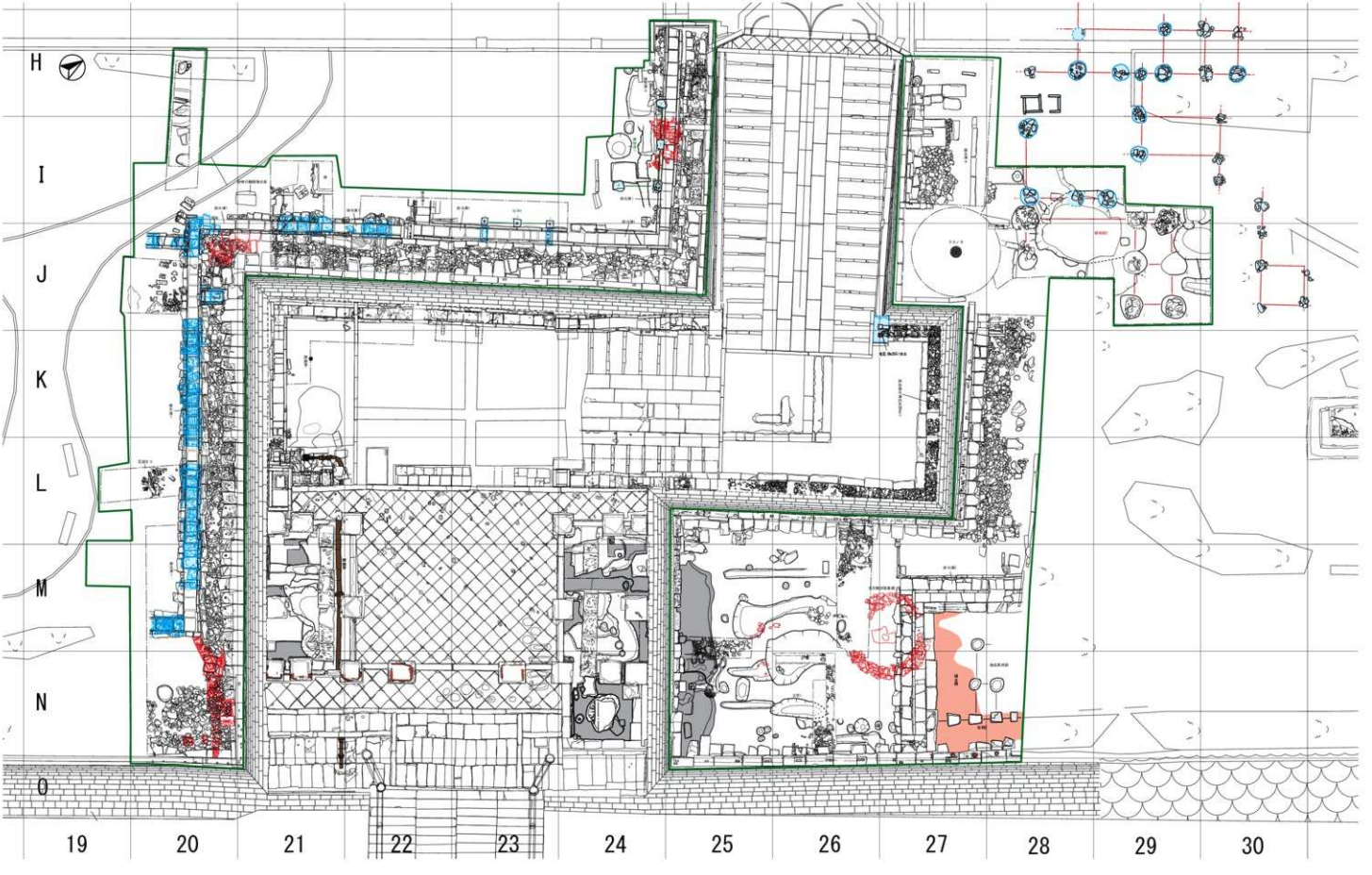
調査区内で数か所の瓦溜まりが検出された。土坑内に溜まったもの，土坑を伴わずに集積したもの，排水構内に溜まったものがあり，時期を特定するのが難しいものが多い。枡形虎口の J ～ L-25 ～ 27 区では石垣据に巡る排水溝内から多量の瓦が出土した。火山灰を含む埋土の下に多量の瓦が出土し，その下には焼土や漆喰が残されており，排水溝底からはエンフィールド銃の銃弾（鉛玉）が数点出土した。排水溝底で出土した銃弾が西南戦争時のものであれば瓦はそれ以降に溜まったものである。

土坑内の瓦溜まりは N-26 区における土坑 1 より検出された。土坑を伴わない瓦の集積は L-20 区や I-25 区で検出された。L-20 区の瓦溜まりは平瓦が数枚重なるように検出され，その間には多量の漆喰を挟んでいた。御楼門周辺の建物又は塀等から大きく崩れず落ち，検出されたと思われる。I-25 区の瓦溜まりは多量の瓦の中に平瓦，棟込瓦が並ぶように出土し，周辺の建物か門等の瓦が大きく崩れずに検出された可能性がある。

② 土坑

御楼門（M-21，M・N-24 区）付近において，土坑が数基検出された。土坑の埋土は漆喰の混ざった近代以降の攪乱土である。この位置に樹木が植えられた近現代の写真があり，樹痕の可能性が高い。

他にも調査区内において土坑，ピット，溝が検出されたが，埋土や遺物等から用途及び時期が特定できず，遺構として評価できなかったものもある。



第 18 図 御楼門周辺遺構配置図

第 19 図 遺構平面図

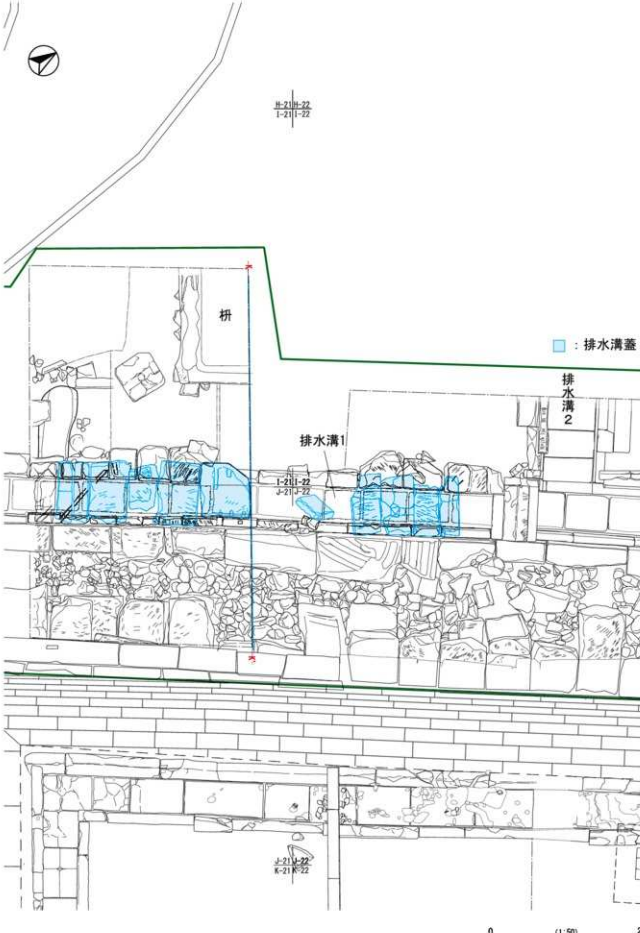
0 (1:50) 2m

J-19 J-20
K-19 K-20
K-19 K-20
L-19 L-20
L-19 L-20
M-19 M-20
J-20 J-21
K-20 K-21
K-20 K-21
L-20 L-21
L-20 L-21
M-20 M-21
排水溝1
排水溝1
瓦溜まり
：排水溝蓋
0
(1:50)
2m

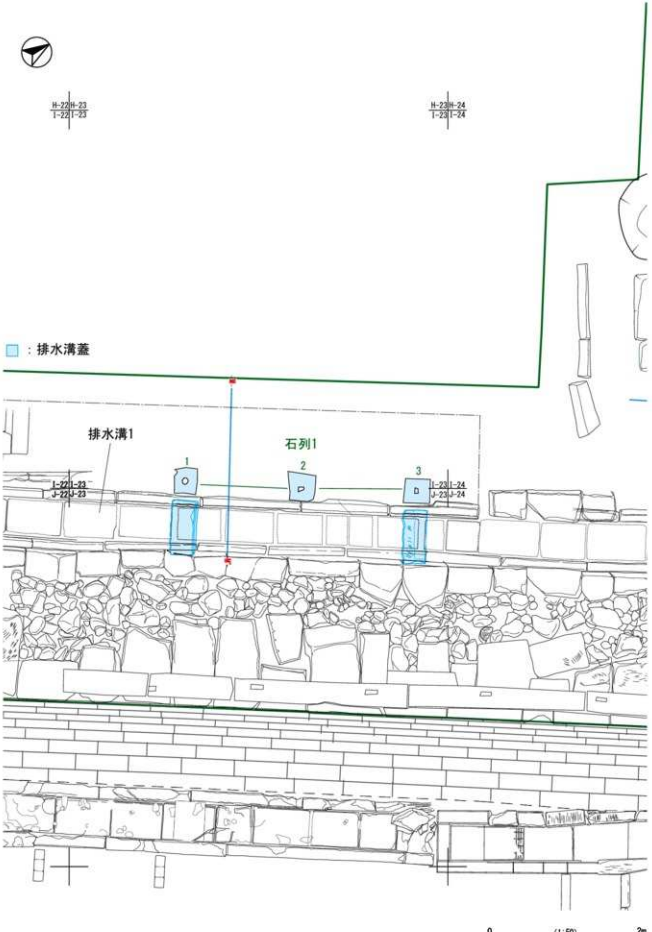
第 20 図 遺構平面図

第 21 図 遺構平面図

0 (1:50) 2m


H-21 H-22
I-21 I-22
枡
：排水溝蓋
排水溝2
排水溝1
I-21 I-22
J-21 J-22
J-21 J-22
K-21 K-22
0
(1:50)
2m

第 22 図 遺構平面図


H-22H-23
I-22I-23
H-23H-24
I-23I-24
：排水溝蓋
排水溝1
石列1
1
2
3
I-22I-23
J-22J-23
I-23I-24
J-23J-24
0
(1:50)
2m

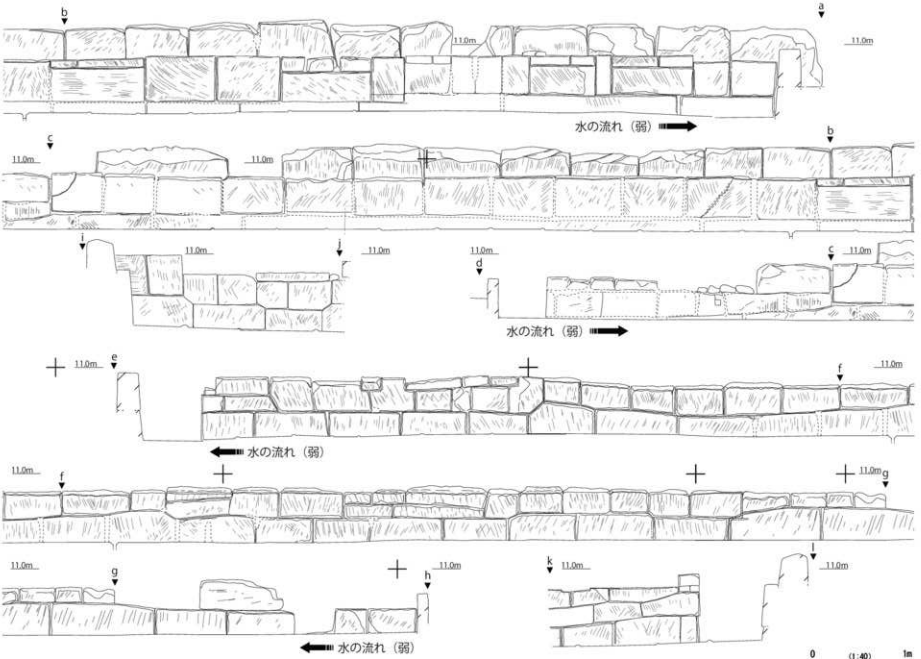
第 23 図 遺構平面図

第 24 図 遺構平面図

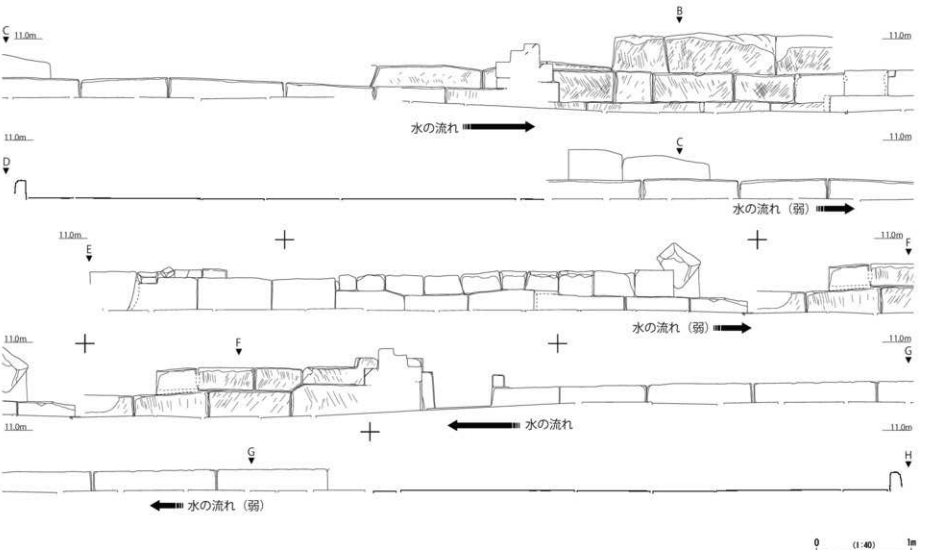
0 (1:50) 2m

G-24G-25
H-24H-25
排水溝3
1
H-24H-25
I-24I-25
建物跡1
2
3
4
排水溝1
L
L'
□：排水溝上位の瓦溜まり
0
(1:50)
2m

第 25 図 遺構平面図

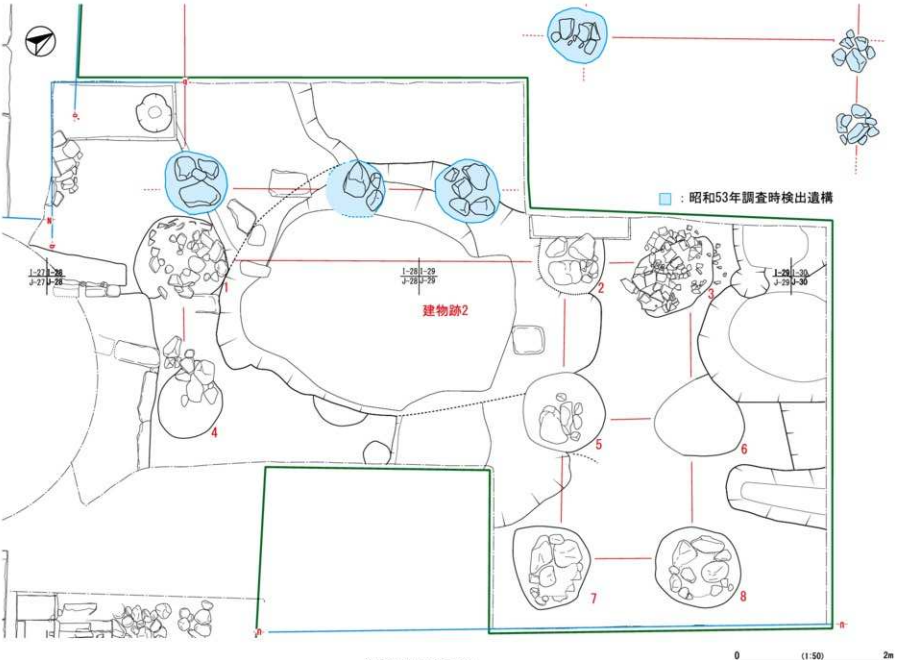

b
a
11.0m
11.0m
水の流れ（弱）
c
b
11.0m
11.0m
i
j
11.0m
11.0m
d
c
11.0m
11.0m
水の流れ（弱）
e
f
11.0m
11.0m
水の流れ（弱）
f
g
11.0m
11.0m
g
h
11.0m
11.0m
k
l
11.0m
11.0m
水の流れ（弱）
0
(1:40)
1m

第 26 図 遺構立面図


C
11.0m
B
11.0m
水の流れ
11.0m
C
11.0m
D
水の流れ（弱）
11.0m
E
11.0m
F
水の流れ（弱）
11.0m
F
11.0m
G
水の流れ
11.0m
11.0m
G
H
水の流れ（弱）
0
(1:40)
1m

第 27 図 遺構立面図

第 28 図 遺構平面図


：昭和53年調査時検出遺構
I-27J-28
J-27J-28
I-28J-29
J-28J-29
建物跡2
I-29J-30
J-29J-30
1
2
3
4
5
6
7
8
0
(1:50)
2m

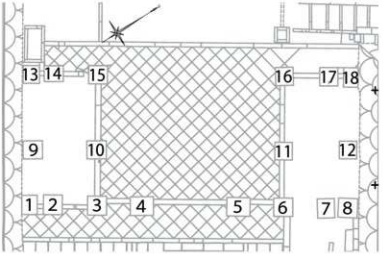
第29図 遺構平面図

J-26K-27
K-26K-27
J-27L-28
K-27K-28
L-27L-28
鬼瓦(No.255)出土
枡形排水溝内瓦溜まり
K-26K-27
L-26L-27
：排水溝蓋
L-26L-27
M-26M-27
L-27L-28
M-27M-28
0
(1:50)
2m

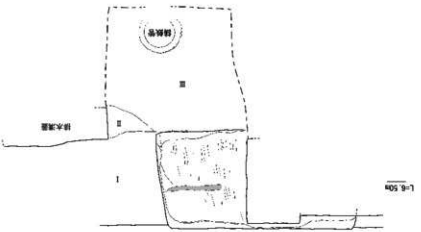
第 30 図 遺構平面図

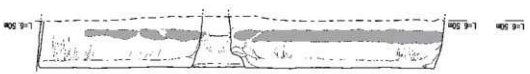
L-25/L-26
M-25/M-26
L-26/L-27
M-26/M-27
L-27/L-28
M-27/M-28
排水溝5
天文観測室基礎
N-25/N-26
N-25/N-26
M-26/M-27
N-26/N-27
M-27/M-28
N-27/N-28
御兵具所跡
焼土跡
土坑1
石列2
0
(1:50)
2m

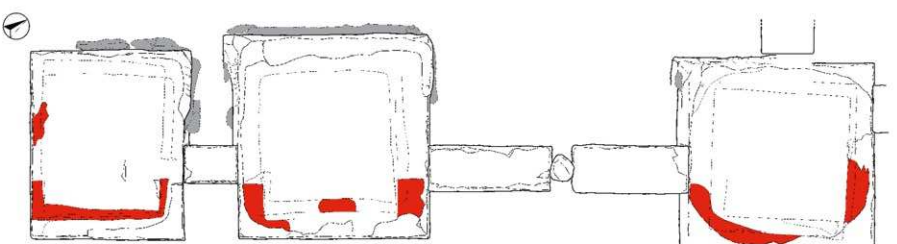
第 31 図 遺構平面図



層	色調		特徴
I	10YR2/1	黒色土	やや粘性あり
II	10YR2/2	黒褐色土	
III	10YR2/2	黒褐色土	しまりなし。礫層を含むため、

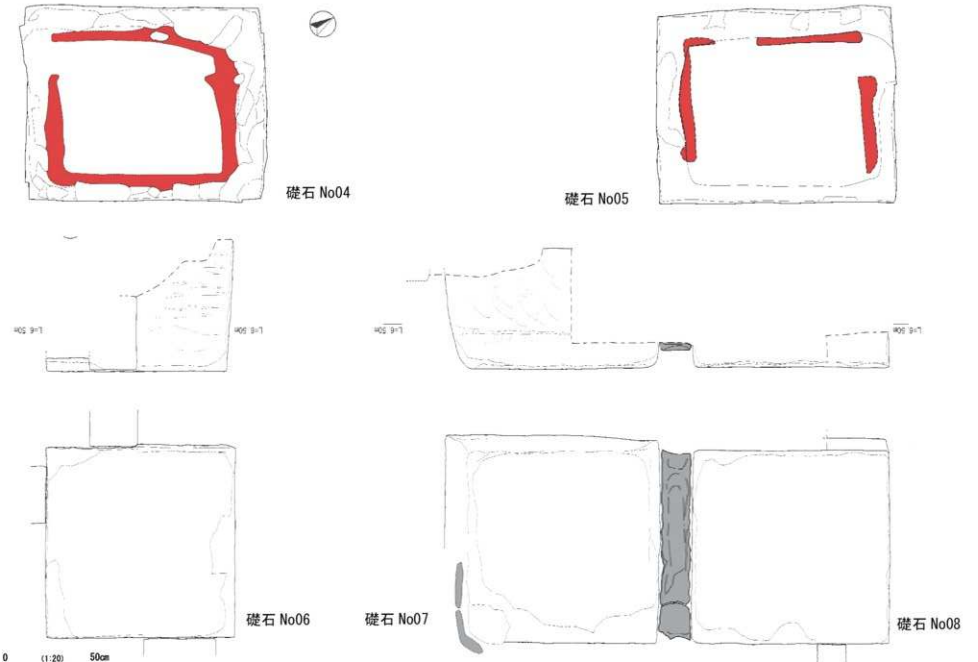






礎石 No01　礎石 No02　礎石 No03

第 32 図 遺構平・立面図

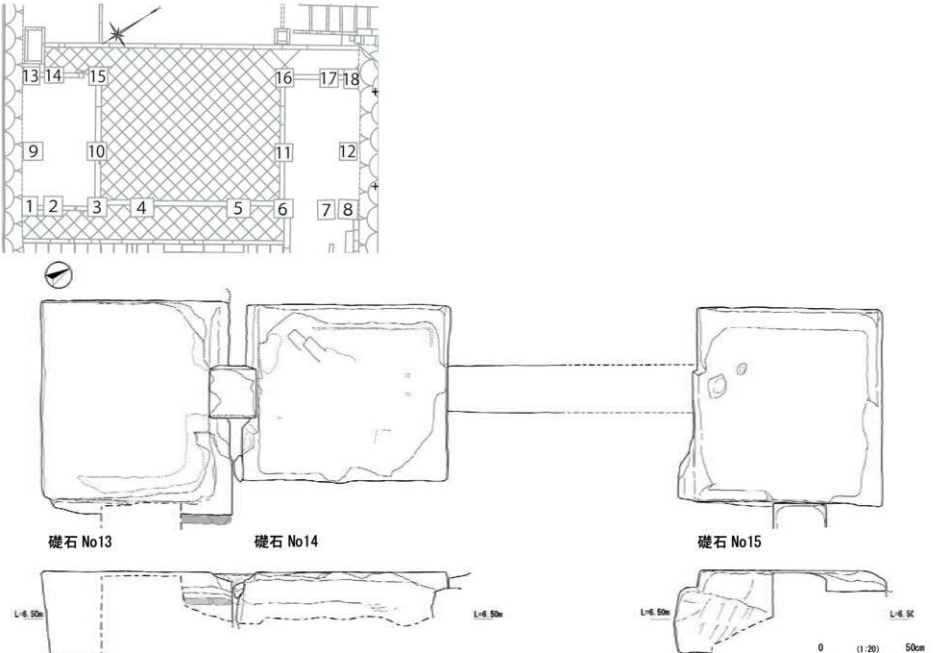


第 33 図 遺構平・立面図

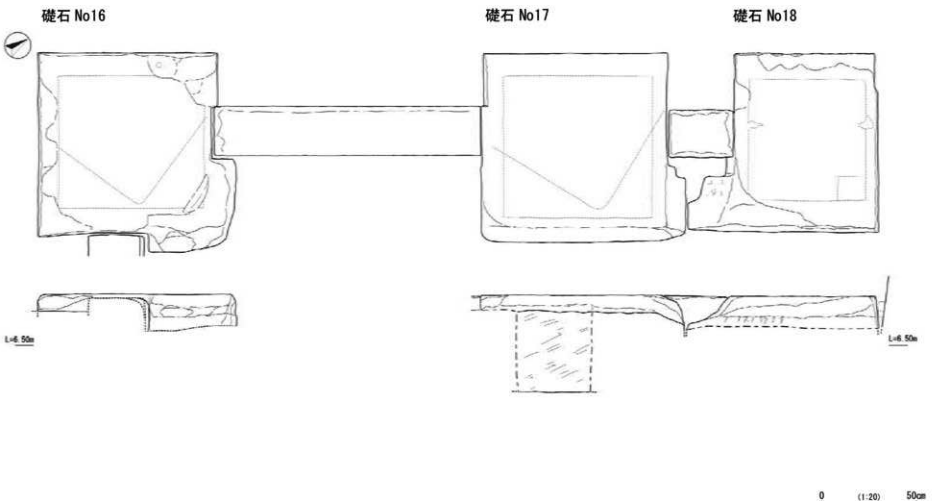
層
色調
特徴
I
10YR2/1
黒色土
ややねばりがある
II
10YR2/2
暗褐色土
しまりがない
III
10YR2/1
黒褐色土
しまりがない。全体的に黒っぽい
IV
7.5YR4/1
褐灰色土
キメが細かくしまる。褐灰色まぜまぜうすいつぶし工程のだろう。「土」(粘土質か?)
L=50m
L=50m
礎石
礎石No09
礎石No10
0
(1:20)
50cm
第34図 遺構平・立面図

層	色調	特徴
I	10YR2/1	黒色土
II	10YR2/3	黒褐色土
III	10YR2/3	にぶい黄褐色土　瓦礫片、炭化物を含む。
IV	10YR4/1	褐灰色土

第35図 遺構平・立面図


13
14
15
16
17
18
9
10
11
12
1
2
3
4
5
6
7
8
礎石 No13
礎石 No14
礎石 No15
L=6.50m
L=6.50m
L=6.50m
L=6.50
0
(1:20)
50cm

第 36 図 遺構平・立面図



第 37 図 遺構平・立面図

第５表　礎石観察表

配列	礎石 No	径長 (cm) A	径長 (cm) B	径長 (cm) C	径長 (cm) D	厚さ (cm)	角突出部 北	角突出部 東	角突出部 南	角突出部 西	面取り加工 A	面取り加工 B	面取り加工 C	面取り加工 D	表面観察 剥離痕	表面観察 金属痕	表面観察 煤痕	表面観察 その他特徴	側面観察 A	側面観察 B	側面観察 C	側面観察 D	側面観察 深さ (cm)	礎石下観察 その他特徴	礎石下観察 地盤	礎石下観察 根枕	礎石下観察 その他特徴
							×	×	×	×	A	B	C	D					A	B	C	D	深さ (cm)				
1列	1	82	101	81	100	25+ α	×	×	×	×	△	△	△	×	×	鉄鎖線	×		○	○	石置	石垣	15	石垣間に詰石	－	×	25cm 下凍堪面
	2	100	104	98	103	25+ α	×	×	×	×	○	△	○	△	×	鉄鎖線	×		○	○	石置	○	13		－	×	25cm 下凍堪面
	3	100	99	99	100	45 ～ 50	×	×	×	×	△	△	○	△	×	鉄鎖線	×	縦青点有	×	石置	石置	×	(12)	西角に少々ウキ痕	○	鎖鉄管	南西半分撹乱
	4	122	100	122	100	8+ α	×	×	×	×	○	○	○	△	△	鉄鎖線	×	北、南付近に縦状刺離	石置	石置	石置	石置	4 面石置				
	5	123	100	122	99	5+ α	×	×	×	×	○	△	○	○	×	鉄鎖線	×		石置	石置	石置	石置	4 面石置				
	6	100	98	100	98	72	×	×	×	×	△	△	△	△	△	鉄鎖線	×	SLD 面に縦状刺離	×	○	石置	石置	15		○		
	7	98	100	99	98	67+ α	×	×	×	×	△	△	○	○	南角有	縦青線	×	鉄分付	×	○	－	○	10		－	－	
	8	102	101	102	102	15+ α	×	×	×	×	△	×	△	○	×	鉄分付	×		－	石垣	○	○	10				
2列	9	102	103	100	102	23+ α	×	×	×	×	△	○	△	×	北角有	鉄分付	×	南角付近に縦状刺離	○	－	－	石垣	17	7cm 下に凍堪痕	－	－	
	10	104	98	102	103	72	×	×	×	○	△	○	△	○	×	×	△		×	石置	石置	×			○	鎖鉄管	南西半分撹乱
	11	95	104	94	95	43	○	×	×	×	△	○	△	○	×	△	×	縦青点有	○	○	－	石置	18 ～ 25		○	×	
	12	101	109	103	110	62	×	×	×	×	△	×	△	△	×	鉄分付	○		○	石垣	－	撹乱	30	石垣間に詰石	○	×	
3列	13	89	96	101	95	27+ α	×	○	×	×	△	△	△	×	×	×	×		詰石	石置	○	石垣	14		－	－	
	14	95	88	103	86	27+ α	×	△	○	×	○	○	△	△	△	縦青線	×	西角付近に縦状刺離	石置	石置	○	石置	22		－	－	
	15	96	94	99	96	40+ α	×	×	○	×	○	○	△	△	×	×	△		石置	石置	△	×	25		－	鎖鉄管	南西半分撹乱
	16	95	94	102	97	30+ α	×	○	×	×	○	△	△	○	○	×	○	東南角に面縦状刺離	石置	○	○	石置	16		－	×	
	17	95	101	102	100	53+ α	×	○	×	×	○	△	○	△	×	鉄分付	×		石置	詰石	撹乱	石置			○	×	
	18	76	99	76	101	20+ α	×	×	○	×	○	×	△	△	×	鉄分付	×		石置	石垣	○	詰石	15	石垣間に詰石	－	×	20cm 下凍堪面

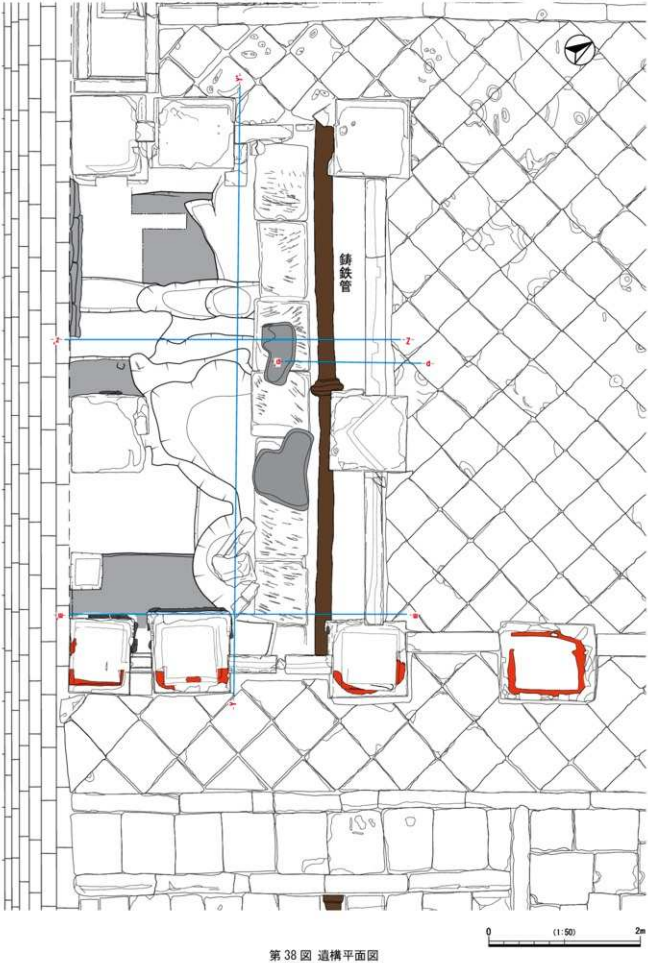
第６表　石列，建物跡観察表

石列１ 大きさ・距離 (cm)	礎石１ 縦×横	1-2 間 芯々距離	礎石２ 縦×横	2-3 間 芯々距離	礎石３ 縦×横	備考
	35 × 30	154	35 × 35	157	32 × 34	いずれも中心にホゾ穴有 鳥津珍彦御陰湯り の礎の基礎か

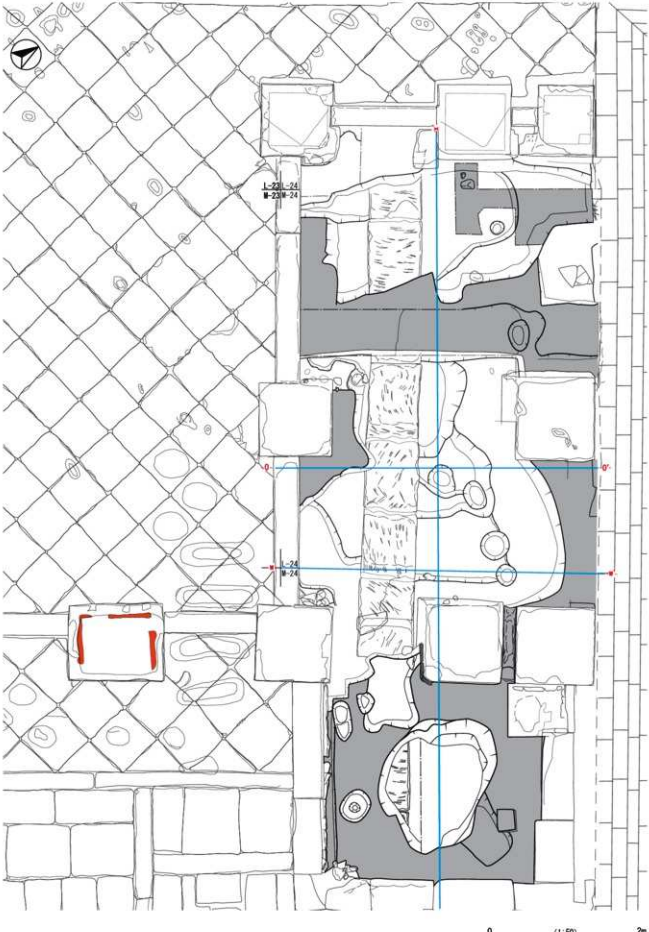
建物跡１ 大きさ・距離 (cm)	礎石１ 縦×横	芯々距離	礎石２ 縦×横	芯々距離	礎石３ 縦×横	備考
	48 × 35	200	32 × 46	198	35 × 44	成尾常知絵図の中では唐御門番所近くに位置する。周囲から多量の瓦が出土しており，特に礎石１から２にかけて平瓦，棟込瓦が並ぶように出土した。屋根から大きく焼れずに検出された可能性がある。
					196	
					礎石４ 縦×横	
					55 × 52	

建物跡２ 大きさ・距離 (cm)	根石１ 縦×横	芯々距離	根石２ 縦×横	芯々距離	根石３ 縦×横	備考
	120 × 125	515	(75) × 90	140	95 × 105	成尾常知絵図における御具具番行張番所に近い場所にある。昭和 53 年時の発掘調査において建物跡２東側に続く根石跡が検出されており，この建物跡は御具具番行張番所跡と報告されている。根石跡１と４の間は大きく撹乱を受けており，この撹乱の埋土の状況から現代の撹乱跡と考えられる。
	芯々距離 195		芯々距離 205		芯々距離 195	
	根石４ 縦×横	芯々距離 496	根石５ 縦×横	芯々距離 185	根石６ 縦×横	
	90 × 85		105 × 110		105 × 120	
			芯々距離 200		芯々距離 200	
			根石７ 縦×横	芯々距離 190	根石８ 縦×横	
			108 × 100		105 × 110	

石列２ 大きさ・距離 (cm)	礎石１ 縦×横	芯々距離	礎石２ 縦×横	芯々距離	礎石３ 縦×横	芯々距離	礎石４ 縦×横	備考
	60 × 60	102	45 × 60	100	47 × 55	90	44 × (31)	御具具所内の礎石である。

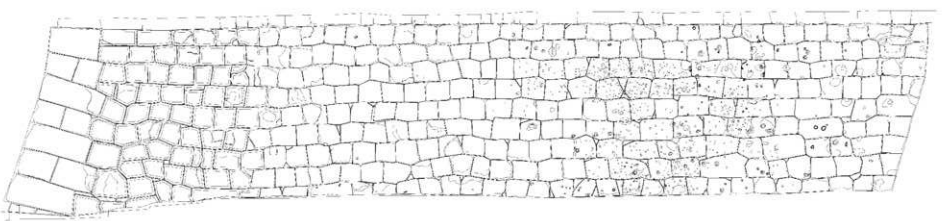


第 38 図 遺構平面図



第 39 図 遺構平面図

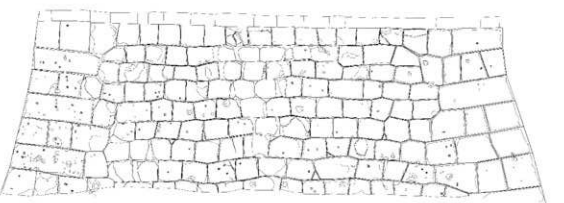
I 面

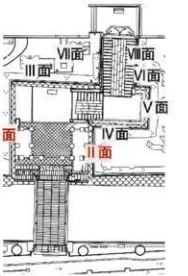


0 (1:100) 5m

第 40 図 石垣立面図

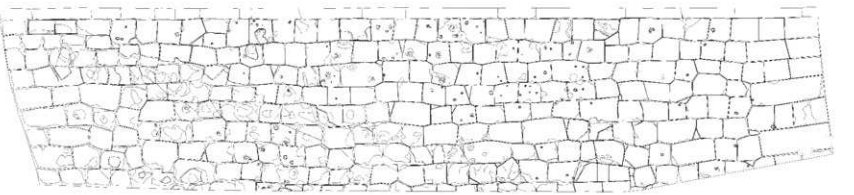
II面





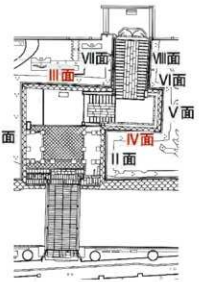
第41図 石垣立面図

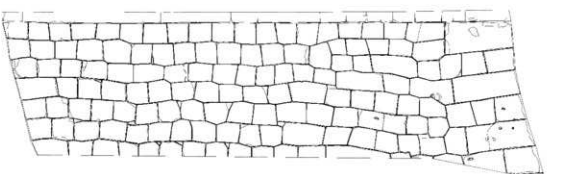
Ⅲ面

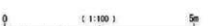


第 42 図 石垣立面図

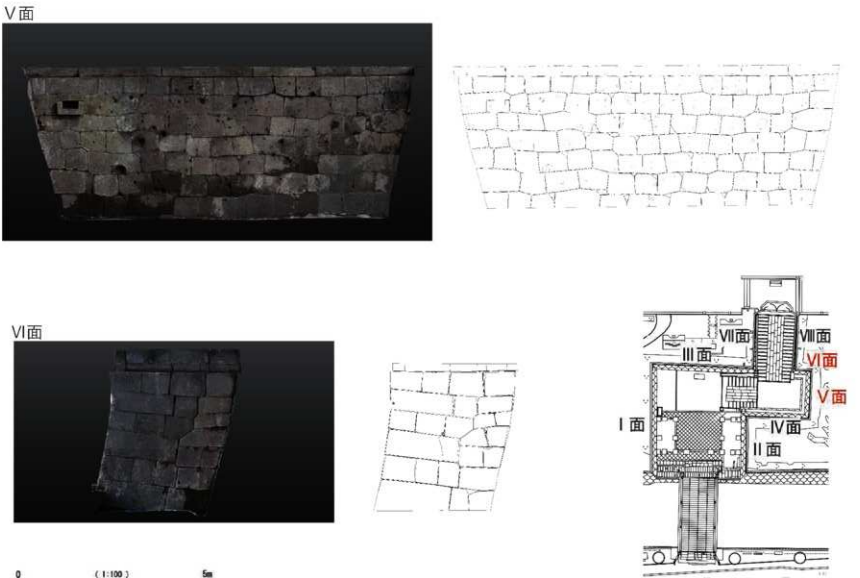
IV面







第 43 図 石垣立面図



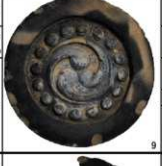
第 44 図 石垣立面図

2　遺物

(1)　瓦

御楼門周辺部において最も多く出土した遺物は瓦で，軒丸瓦（NM）・軒平瓦（NH）・丸瓦・平瓦・棟込瓦・軒桟瓦・桟瓦・海鼠瓦・輪違い・雁振瓦・袖瓦・塀瓦と多岐にわたる。型式分類には金子智氏にご教示いただき，分類表作成及び玉稿をたまわった。例言・凡例に分類の概要を示し，分類表を第７～21表に示す。

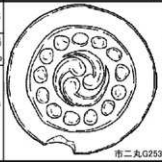
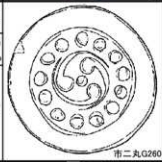
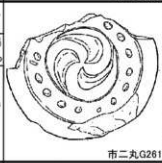
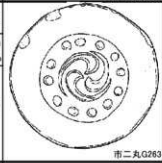
第７表　軒丸瓦型式分類・観察表

分類	図版	特徴等	分類	図版	特徴等
A-001 挿No 45 掲No 1 2 3	 3	区 1: J-K-24 2: H-I-24 3: J-K-24 層 1:造成土 2: － 3:造成土 瓦径× 1: 162×114×72 文様× 2: 160×114×72 内径mm 3: 166×118×73 文様 右巻15珠 掲載 本丸952 製印 玉水堂，中 推定年代 18-19C 珠文やや大。巴太身で長い。右上，珠文-周縁間2ヶ所に悪傷。文様区面取。	A-002 挿No 45 掲No 4	 4	区 H-24 H-I-24 層 造成土 瓦径× 176×130×81 文様× 左巻9珠 掲載 製印 推定年代 18C 周縁狭い。珠文小さく散漫。巴間隙広い。
A-003 挿No 45 掲No 5	 5	区 L-27 層 埋土 瓦径× 155×100×68 文様× 内径mm 文様 右巻15珠 掲載 市二丸G158-157? 製印 古 推定年代 18-19C 周縁広い。巴頭部丸く，長い。体部ラケキ状。上-左下，巴-珠文間に悪傷。全長441，体長414，径152，穴径17(×2)。	A-004 挿No 45 掲No 6	 6	区 L-26 層 埋土 瓦径× 148×101×55 文様× 左巻12珠 掲載 製印 推定年代 17-18C 周縁広。珠文やや大。巴頭部丸く，胴部細い。巴間隙広く散漫。
A-005 挿No 45 掲No 7 8	 7	区 7: K-27 8: L-27 層 7: － 8: 埋土 瓦径× 7: 156×104×65 文様× 8: 154×105×65 内径mm 文様 右巻14珠 掲載 本丸955 製印 平 推定年代 18-19C 珠文大。巴太身で長い。右上-中央-左下5か所に悪傷。穴2ヶ所（径26）。	A-006 挿No 46 掲No 9	 9	区 H-24 層 造成土 瓦径× 162×110×72 文様× 内径mm 文様 右巻16珠 掲載 本丸953 製印 蓁 推定年代 18-19C 珠文やや大。巴頭部丸くやや長い。体部ラケキ台立つ。下方巴尾-胴部間に悪傷。巴集凝竹晶は上部珠文-周縁間にも悪傷。
A-007 挿No 46 掲No 10	 10	区 M-28 層 焼土 瓦径× 159×115×65 文様× 内径mm 文様 右巻16珠 掲載 製印 推定年代 18-19C 周縁広い。珠文やや大。巴頭部丸くやや長い。下方巴-巴尾間に悪傷。	A-008 挿No 46 掲No 11	 11	区 K-27 層 埋土 瓦径× 149×102×62 文様× 内径mm 文様 右巻(15)珠 掲載 製印 推定年代 18-19C 中型。文様中心に小点。巴頭部丸くやや細長で，やや間隙広い。上部周縁-珠文間に悪傷。
A-009 挿No 46 掲No 12	 12	区 H-24 層 造成土 瓦径× 150×95×58 文様× 内径mm 文様 右巻15珠 掲載 本丸954 製印 推定年代 18-19C 周縁きわめて広。巴頭部丸く尾は細め。文様区内にチデレ目立つ。全長445，体長413，鼻状間あり。	A-010 挿No 46 47 掲No 13 14	 13	区 13N-26·27 14J-21 層 13瓦溜１層下 14 － 瓦径× 13:177×127×64 文様× 14:180×131×65 内径mm 文様 右巻12珠 掲載 製印 太宗 推定年代 19C 珠文巨大（径23）。巴はやや小さい。軒平瓦A-001類とセット。

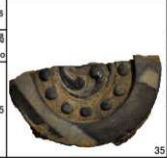
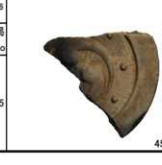
第 8 表　軒丸瓦型式分類・観察表

分類	図版	特徴等	分類	図版	特徴等
A-011 挿No 46 掲No 15	 15	区 M-20 排水溝内　層 － 瓦径×文径×内径mm 157×111×57 文様 右巻13珠　掲載 刻印　推定年代 18-19C 周縁やや広い。珠文大。巴頭部丸く長め。	A-012 挿No 46 掲No 16	 16	区 I-20 瓦溜まり　層 造成土 瓦径×文径×内径mm 146×112×78 文様 左巻(9)珠　掲載 刻印　推定年代 18C 中型。周縁やや狭い。珠文小。巴やや短い。
A-013 挿No 46 掲No 17	 17	区 I-23 排水溝内　層 － 瓦径×文径×内径mm 150×100×55 文様 左巻12珠　掲載 刻印　推定年代 17-18C 周縁広い。巴頭部丸く，尾が後巴に接する。	A-014 挿No 46 掲No 18	 18	区 N-25・26　層 Ⅲ 瓦径×文径×内径mm 169×134×80 文様 右巻9珠　掲載 刻印　推定年代 18C 文様全体に散漫。A-002類に似るが，巴やや小。
A-015 挿No 47 掲No 19	 19	区 M-25　層 造成土 瓦径×文径×内径mm 180×131×80 文様 左巻12珠　掲載 刻印　推定年代 17-18C 大型。珠文やや小で散漫。巴大きくやや細身で間隔広い。出土多い。胎土白雲母・白色粒目立つ。	A-016 挿No 47 掲No 20	 20	区 I-24 排水溝内ベルト　層 － 瓦径×文径×内径mm 166×128×78 文様 右巻12珠　掲載 本丸956 刻印 休　推定年代 17-18C 珠文やや小さく散漫。台形状のものが多い。珠文周縁に粘土押込痕ともの多い。巴大きくやや細身で間隔広い。
A-017 挿No 47 掲No 21	 21	区 M-27　層 造成土 瓦径×文径×内径mm (172)×124×83 文様 左巻(12)珠　掲載 刻印　推定年代 17-18C 珠文小さく高い。巴大きく頭部丸い。胎土に灰・白色粒(0.5~3)3%。	A-018 挿No 47 掲No 22	 22	区 I-27　層 造成土 瓦径×文径×内径mm (160)×(110)×(~) 文様 右巻(14)珠　掲載 刻印　推定年代 17C 珠文小さく散漫。軒平瓦D-012類とセットの可能性大。
A-019 挿No 47 掲No 23	 23	区 H・I-24　層 造成土 瓦径×文径×内径mm 174×129×92 文様 右巻8珠　掲載 三A442-443, 第二A1092 刻印　推定年代 17-18C 珠文小さく散漫。巴大きく，中央間隙狭い。巴-周縁間に薄い処傷。	A-020 挿No 47 掲No 24	 24	区 I-24　層 造成土 瓦径×文径×内径mm 171×121×85 文様 右巻16珠　掲載 刻印　推定年代 18-19C 珠文やや大。巴長い。
A-021 挿No 47 掲No 25	 25	区 I-1　層 表土 瓦径×文径×内径mm 139×83×58 文様 左巻12珠　掲載 刻印　推定年代 17C 周縁広い。巴先端尖り，尾は次の巴に接する。胎土砂質。古様。	A-022 挿No 47 掲No 26	 26	区 H, I-24の間のベルト, ST　層 造成土 瓦径×文径×内径mm 164×108×61 文様 右巻15珠　掲載 刻印　推定年代 18-19C 文様高い。巴やや小。

第 9 表　軒丸瓦型式分類・観察表

分類	図版	特徴等					分類	図版	特徴等				
A-023	27	区	H・I-24	層	–		A-024	28	区	J・K-24	層	撹乱3	
掲No 48	掲No 27	瓦径×文径×内径mm	170×133×79				掲No 48	掲No 28	瓦径×文径×内径mm	174×141×85			
		文様	左巻(9)珠	掲載					文様	左巻9珠	掲載	市二丸G158・159	
		刻印		推定年代	18C				刻印		推定年代	18C	
		周縁狭い。珠文小さく散漫。巴頭部大きい。							周縁狭い。珠文小さく散漫。A-23類より巴太身。巴胴部に窃傷。				
A-025	 市二丸G253	区	(A-2)	層	(Ⅰ)		A-026	 市二丸G260	区	(C-1)	層	(黒褐砂質)	
掲No 市二丸G 第32図 253	掲No	瓦径×文径×内径mm	127×89×50				掲No 市二丸G 第32図 260	掲No	瓦径×文径×内径mm	128×93×51			
		文様	右巻13珠	掲載	市二丸G253				文様	左巻13珠	掲載	市二丸G260	
		刻印		推定年代	18-19C				刻印		推定年代	18-19C	
		珠文。巴ともに太い。							巴中心に点珠。				
A-027	 市二丸G261	区	(A-1)	層	(整面下黒砂)		A-028	 市二丸G263	区	(B-3)	層	(黒土、瓦集中)	
掲No 市二丸G 第32図 261	掲No	瓦径×文径×内径mm	123×88×54				掲No 市二丸G 第32図 263	掲No	瓦径×文径×内径mm	143×85×50			
		文様	右巻(16)珠	掲載	市二丸G261				文様	右巻12珠	掲載	市二丸G263	
		刻印		推定年代	17C				刻印		推定年代	17C	
		珠文小。巴先端尖る。尾部は圏線と接する。							周縁広。巴先端尖る。				
A-029	本丸1010	区	–	層	–		A-030	29	区	N-25・26	層	–	
掲No 本丸 第116図 1010	掲No	瓦径×文径×内径mm	復元径:(-)×(-)×(-)				掲No 48	掲No 29	瓦径×文径×内径mm	179×123×81			
		文様	右巻(8)珠	掲載	本丸1010				文様	左巻12珠	掲載		
		刻印		推定年代	17-18C				刻印		推定年代	17-18C	
		陶器瓦。小型。周縁極めて広。珠文小。巴細い。堂平窯。							A-015類に似るが、巴やや外開。文様中心に小点。				
A-031	30	区	–	層	–		A-032	31	区	N-25	層	造成土	
掲No 48	掲No 30	瓦径×文径×内径mm	167×111×79				掲No 48	掲No 31	瓦径×文径×内径mm	185×133×82			
		文様	右巻9珠	掲載					文様	右巻12珠	掲載		
		刻印		推定年代	17-18C				刻印		推定年代	17-18C	
		巴先端尖る。珠文小。							大型。珠文周囲に粘土押込痕残るもの多い。A-16類に似るが、中央間隙広い。角状開あり。				
A-033	32	区	I-23 排水溝内	層	–		A-034	33	区	I・J-23・24	層	造成土	
掲No 48	掲No 32	瓦径×文径×内径mm	158×103×67				掲No 48	掲No 33	瓦径×文径×内径mm	157×119×65			
		文様	右巻15珠	掲載					文様	左巻(13)珠	掲載	本丸957	
		刻印		推定年代	18-19C				刻印		推定年代	17-18C	
		周縁広。巴頭大。巴珠線明瞭。							珠文小。巴小。				

第 10 表 軒丸瓦型式分類・観察表

分類	図版	特徴等
A-035 挿No 48 掲No 34	 34	区 H-24 層 造成土IV層上以下 瓦径×文径×内径mm (162)×116×71 文様 右巻15珠 掲載 刻印 大 推定年代 18-19C 瓦当厚い。珠文大。上部巴異形。瓦当面雲母目立つ。
A-036 挿No 48 掲No 35	 35	区 M~O-19-20 層 造成土 瓦径×文径×内径mm (150)×97×56 文様 左巻(12)珠 掲載 刻印 推定年代 18C 小型。珠文小。巴やや小。
A-037 挿No 48 掲No 36	 36	区 I-25 層 造成土 瓦径×文径×内径mm (172)×110×74 文様 左巻(8)珠 掲載 刻印 推定年代 17-18C 尖る。珠文小。
A-038 挿No 48 掲No 37	 37	区 H-25 層 造成土 瓦径×文径×内径mm 137×94.5×55 文様 右巻13珠 掲載 刻印 推定年代 18-19C 小型。瓦当面に雲母目立つ。左方周縁-珠文間3ヶ所、巴-珠文間1ヶ所に笵傷。
A-039 挿No 48 掲No 38	 38	区 - 層 - 瓦径×文径×内径mm (182)×(138)×(78) 文様 右巻(12)珠 掲載 刻印 推定年代 17-18C A-016・A-032類に似るが、巴の配置異。巴大。中央間隙広。
A-040 挿No 49 掲No 39	 39	区 J-25 石垣内 層 - 瓦径×文径×内径mm 147×110×65 文様 左巻8珠 掲載 刻印 推定年代 17-18C 中型。珠文やや大。
A-041 挿No 49 掲No 40	 40	区 J・K-24 瓦集中部 層 造成土 瓦径×文径×内径mm 158×114×65 文様 右巻12珠 掲載 刻印 推定年代 18-19C 珠文大。
A-042 挿No 49 掲No 41	 41	区 J・K-24 瓦集中部 層 造成土 瓦径×文径×内径mm 152×108×66 文様 右巻15珠 掲載 刻印 休 推定年代 18-19C A-003類に似るもやや大。笵傷なし。全長457、体長432、笵180、穴径17(×2)。
A-043 挿No 49 掲No 42	 42	区 I-12 層 - 瓦径×文径×内径mm (-)×(-)×(-) 文様 右巻 - 掲載 刻印 推定年代 17C 黒色胎土。古様。
A-044 挿No 49 掲No 43	 43	区 3T 層 V 瓦径×文径×内径mm 179×128×82 文様 左巻(12)珠 掲載 刻印 推定年代 18-19C 大型。
A-045 挿No 49 掲No 44	 44	区 J・K-24 瓦集中部 層 造成土 瓦径×文径×内径mm 145×99×54 文様 左巻15珠 掲載 刻印 推定年代 17-18C 中型。珠文丸い。珠文周囲に粘土押込痕残るもの多い。
A-046 挿No 49 掲No 45	 45	区 M-26 層 造成土 瓦径×文径×内径mm (176)×(130)×(66) 文様 左巻(9)珠 掲載 刻印 推定年代 18C 珠文小。A-012類に似るが珠文帯幅広い。

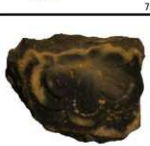
第 11 表 軒丸瓦型式分類・観察表

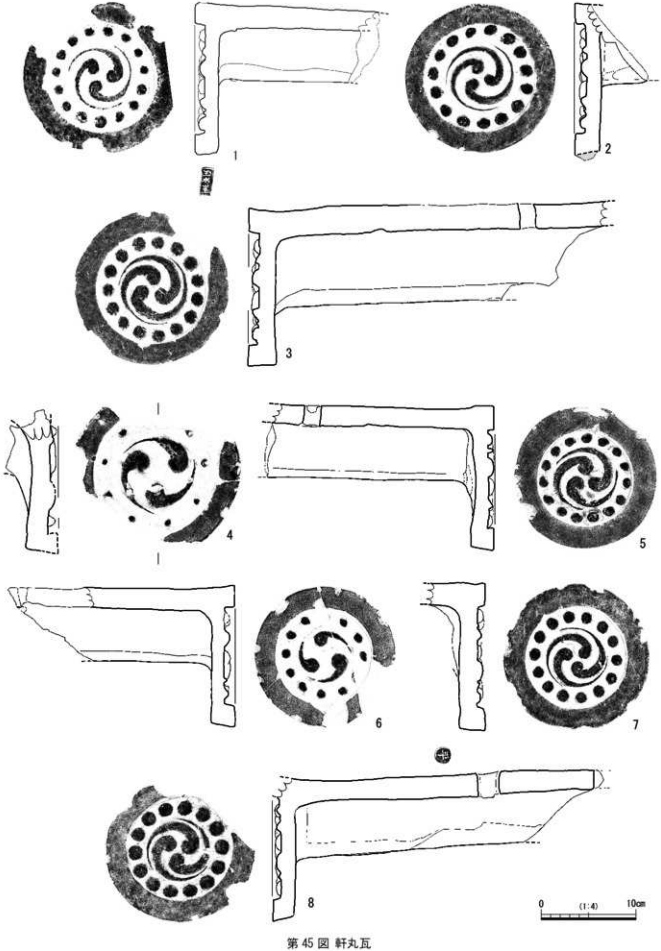
分類	図版	特徴等
A-047 挿No 49 掲No 46	 46	区 ナンキンハゼ 39号周辺 層 － 瓦径×文径×内径mm (－)×(－)×(－) 文様 右巻(16)珠 掲載 鋲印 推定年代 17C 圏線あり。中型。古様。
A-048 挿No 49 掲No 47	 47	区 K-22 層 表土 瓦径×文径×内径mm 130×93×54 文様 右巻16珠 掲載 鋲印 推定年代 17-18C 小型。巴小さく外に広がる。
A-049 挿No 49 掲No 48	 48	区 J-28 層 カクラン 瓦径×文径×内径mm (－)×(－)×(－) 文様 左巻 － 掲載 鋲印 推定年代 17C 珠文小で少ない。周縁ごく広。中型。古様。
A-050 挿No 本丸第108図958 掲No	 本丸958	区 － 層 － 瓦径×文径×内径mm 125×82×43 文様 右巻12珠 掲載 本丸958 鋲印 推定年代 小型。
A-051 挿No 本丸第116図1005 掲No	 本丸1005	区 － 層 － 瓦径×文径×内径mm 長軸:(116)×70×43 短軸:108×70×43 文様 右巻16珠 掲載 本丸1005 鋲印 推定年代 資料は隅軒丸瓦。文様区画取。巴やや小。
A-052 挿No 本丸第116図1006 掲No	 本丸1006	区 － 層 － 瓦径×文径×内径mm 長軸:(－)×79×50 短軸:(110)×75×50 文様 右巻15珠 掲載 本丸1006 鋲印 推定年代 資料は隅軒丸瓦。珠文やや大。巴太身。
A-053 挿No 本丸第116図1007 掲No	 本丸1007	区 － 層 － 瓦径×文径×内径mm 長軸:127×72×39 短軸:(105)×72×39 文様 右巻12珠 掲載 本丸1007 鋲印 推定年代 資料は隅軒丸瓦。珠文大。巴やや小。体部伏間状。
B-001 挿No 49 掲No 49 50	 49	区 49:I-24 50:N-26 層 造成土 瓦径×文径×内径mm 49:162×118×96 50:158×115×98 文様 牡丹紋 掲載 鋲印 推定年代 18-19C 花弁やや尖り、膨凸線で表現。花芯右下がり。隅軒丸あり。
B-002 挿No 50 掲No 51	 51	区 H-24 層 造成土 瓦径×文径×内径mm 191×140×128 文様 牡丹紋 掲載 二丸435か 鋲印 瓦 推定年代 18-19C 大型。花弁襞隆起。B-006類に似る。
B-003 挿No 50 掲No 52	 52	区 H-25 層 － 瓦径×文径× 166×126×116 文様 牡丹紋 掲載 二丸436か 鋲印 推定年代 18-19C 花弁襞隆起。花芯に丸み。文様中央上部左右非対称。文様区画取り。隅鋭い。隅軒丸あり。
B-004 挿No 50 掲No 53 54	 54	区 53:I-23 54:一括 層 53: － 54:一括 瓦径×文径×内径mm 53:(156)×(124)×(112) 54:(－)×(－)×(121) 文様 牡丹紋 掲載 本丸965 鋲印 推定年代 18-19C 花弁襞凸線で表現。B-001類に似るも。花弁に丸み。
B-005 挿No 50 掲No 55 56	 55	区 55:C-36 56:N-15, 36T 層 55:上層 56:造成土 瓦径×文径×内径mm 55:170×115×107 56:(－)×(－)×(－) 文様 牡丹紋 掲載 鋲印 推定年代 18-19C 花弁襞不明瞭。花芯上部凹む。

第 12 表 軒丸瓦型式分類・観察表

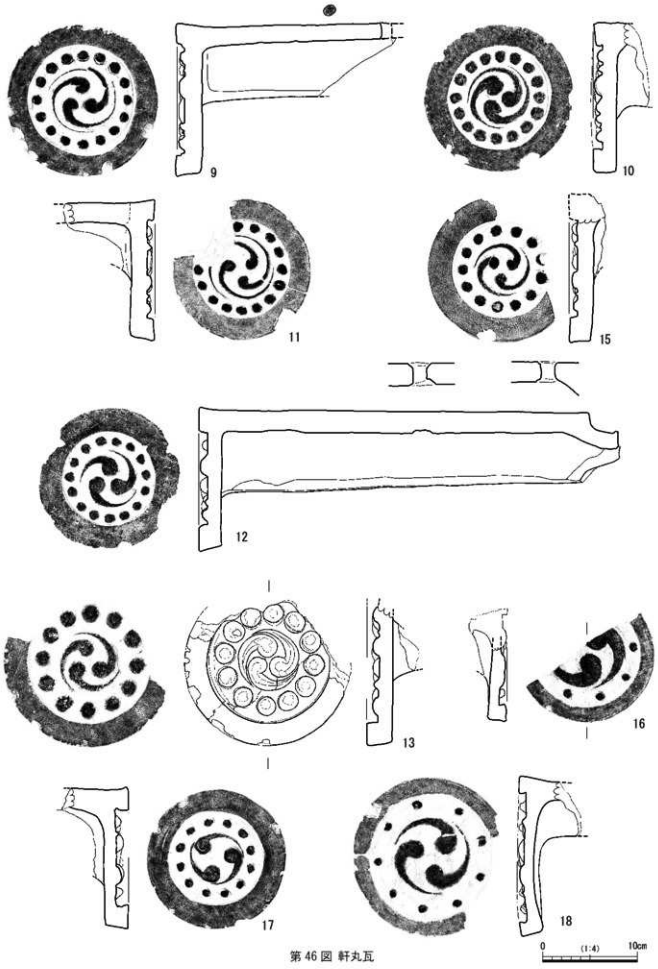
分類	図版	特徴等	分類	図版	特徴等
B-006 挿No 掲No 50 57	 57	区 御角地固辺(H11年度調査)　層 － 瓦径×文径×内径mm 168×129×110 文様 牡丹紋　掲載 － 刻印　推定年代 18~19C 花弁襞隆起。花芯平坦で上部凹む。B-002類に似る。	B-007 挿No 掲No 50 58	 58	区 M-1 排水溝遺口付近　層 － 瓦径×文径×内径mm 184×134×123 文様 牡丹紋　掲載 二丸439か 刻印　推定年代 18~19C 花弁襞葉脈状。
B-008 挿No 掲No 50 59	 59	区 L-1　層 撹乱②一括 瓦径×文径×内径mm (200)×(146)×(134) 文様 牡丹紋　掲載 － 刻印　推定年代 18~19C 大型。花弁襞を太線で表現。葉脈状。	B-009 挿No 掲No 50 60	 60	区 中十-29区境 瓦集中部①とその他　層 造成土 瓦径×文径×内径mm 162×109×101 文様 牡丹紋　掲載 － 刻印　推定年代 18~19C B-001類・004類に似る。花弁やや丸く、襞凸線で表現。
B-010 挿No 掲No 50 61	 61	区 N-25　層 造成土 瓦径×文径×内径mm 180×147×125 文様 牡丹紋　掲載 二丸437 刻印　推定年代 18~19C 中心二つに割れる。周囲花弁出入り少ない。	B-011 挿No 掲No 51 62	 62	区 御角地固辺(H11年度調査)　層 － 瓦径×文径×内径mm (－)×122×108 文様 牡丹紋　掲載 二丸438 刻印　推定年代 18~19C 花弁襞隆起。
B-012 挿No 掲No 51 63	 63	区 御角地固辺(H11年度調査)　層 － 瓦径×文径×内径mm (－)×(－)×(－) 文様 牡丹紋　掲載 二丸440 刻印　推定年代 18~19C B-008類に似る。花弁襞葉脈状。	B-013 挿No 掲No 51 64	 64	区 I-24　層 造成土 瓦径×文径×内径mm (190)×(126)×(96) 文様 牡丹紋　掲載 － 刻印　推定年代 18~19C 花弁襞隆起。
B-014 挿No 掲No 51 65	 65	区 H-24　層 Ⅳ層下 瓦径×文径×内径mm (150)×95×79 文様 牡丹紋　掲載 － 刻印　推定年代 18~19C 小型。花弁襞葉脈状。	B-015 挿No 掲No 51 66	 66	区 J-K-24 瓦集中部　層 造成土 瓦径×文径×内径mm 176×121×110 文様 牡丹紋　掲載 － 刻印　推定年代 18~19C 花弁襞隆起。弩V字大。
C-001 挿No 掲No 51 67	 67	区 K-28　層 造成土 瓦径×文径×内径mm (150)×(104)×(90) 文様 四七桐紋　掲載 － 刻印　推定年代 17C 葉は異形か。きわめて古様。コビキん。	C-002 挿No 掲No 51 68	 68	区 J-29　層 撹乱 瓦径×文径×内径mm (126)×(90)×(80) 文様 均整唐草三巴文　掲載 － 刻印　推定年代 17~18C 三巴の周囲を唐草が巡る。焼成悪く、胎土黒色。堂平窯。

第 13 表 軒丸瓦型式分類・観察表

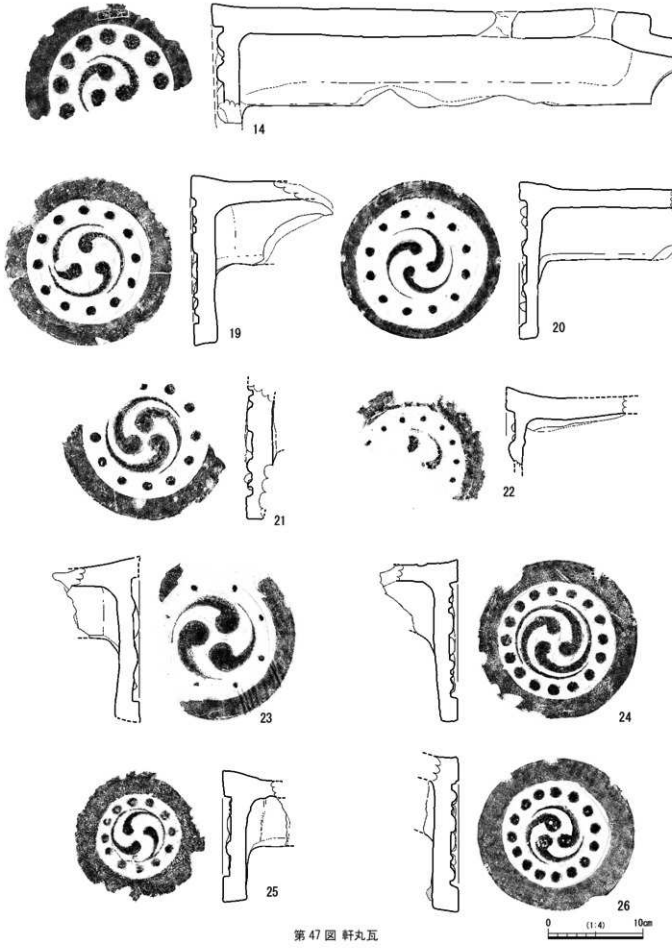
分類	図版	特徴等
C-003 挿No 51 掲No 69	 69	区 M-20　層 造成土 瓦径×文径×内径mm (130)×(100)×(84) 文様 蝶紋か　掲載 鋲印　推定年代 17C 異風な文様。表面褐色で、胎土・焼成も異質。朝鮮系か。
C-004 挿No 51 掲No 70	 70	区 K-21　層 上面Ⅱ 瓦径×文径×内径mm (-)×(-)×(-) 文様 三巴文　掲載 鋲印　推定年代 18-19C 珠文なし。
C-005 挿No 51 掲No 71	 71	区 -　層 - 瓦径×文径×内径mm (130)×(-)×(-) 文様 桐紋　掲載 本丸-964 鋲印　推定年代 18C きわめて大型。
C-006 挿No 51 掲No 72	 72	区 H-27　層 造成土 瓦径×文径×内径mm (142)×(90)×(80) 文様 均整唐草三巴文　掲載 鋲印　推定年代 17-18C 陶器瓦。中型。瓦当面に灰色釉。外区に珠文で区画した均整唐草文1対を配する。三巴中央に珠文。巴は頭部を欠失し、尾は次の巴に接する。胎土は赤褐色。焼成良。登窯。
C-007 挿No 51 掲No 73	 73	区 J-1・2 瓦溜り1　層 シラス混じり 瓦径×文径×内径mm 135×89×83 文様 均整唐草三巴文　掲載 鋲印　推定年代 17-18C 陶器瓦。小型。瓦当面に灰色釉。外区に珠文で区画した均整唐草文1対を配する。三巴中央に珠文。太い頭部あり。胎土は赤褐色。釉の大入り。焼成良。登窯。中心部に穿孔。登平窯。
C-008 挿No 51 掲No 74	 74	L-28　層 造成土 瓦径×文径×内径mm (-)×(-)×(-) 文様 雷文　掲載 鋲印　推定年代 古代か 強い高縁内に圏線、雷文を配する。雷文は中央中線部で、外角度が小さいものが上下左右に配置する。小さ目とされる。瓦手法は高縁を作りて、丸部表面に縦ケラキ、縦式的には古代系法部の工に近る。朝鮮か。
C-009 挿No 51 掲No 75	 75	区 K-7・8　層 拡張 瓦径×文径×内径mm (150)×94×88 文様 連珠花十字文　掲載 本二A108/206/305/301 鋲印　推定年代 17C 小型の連珠帯内に花十字文を配する。
C-010 挿No 51 掲No 76	 76	区 J-29　層 攪乱 瓦径×文径×内径mm 146×(-)×(-) 文様 無文　掲載 鋲印　推定年代 19C 無文。
C-011 挿No 51 掲No 77	 77	区 I-27　層 造成土 瓦径×文径×内径mm (-)×(-)×(-) 文様 不明　掲載 鋲印　推定年代 17C 不明文。古い。朝鮮系か。
C-012 挿No 51 掲No 78	 78	区 I-28　層 攪乱 瓦径×文径×内径mm 146×89×83 文様 均整唐草三巴文　掲載 鋲印　推定年代 17-18C 陶器瓦。外区に唐草の巻き込み強い均整唐草文一対。珠点で区画。巴に圏線あり。尾に連続。焼成良。中央に珠点。登窯産。登窯中心部りに入れ。登平窯。
C-013 挿No 掲No 本丸 第116図 1009	 本丸1009	区 -　層 - 瓦径×文径×内径mm (-)×(-)×(-) 文様 均整唐草三巴文　掲載 本丸1009 鋲印　推定年代 17-18C 陶器瓦。外区にやや太い均整唐草文一対。珠点で区画。巴に圏線あり。尾に連続。登平窯。



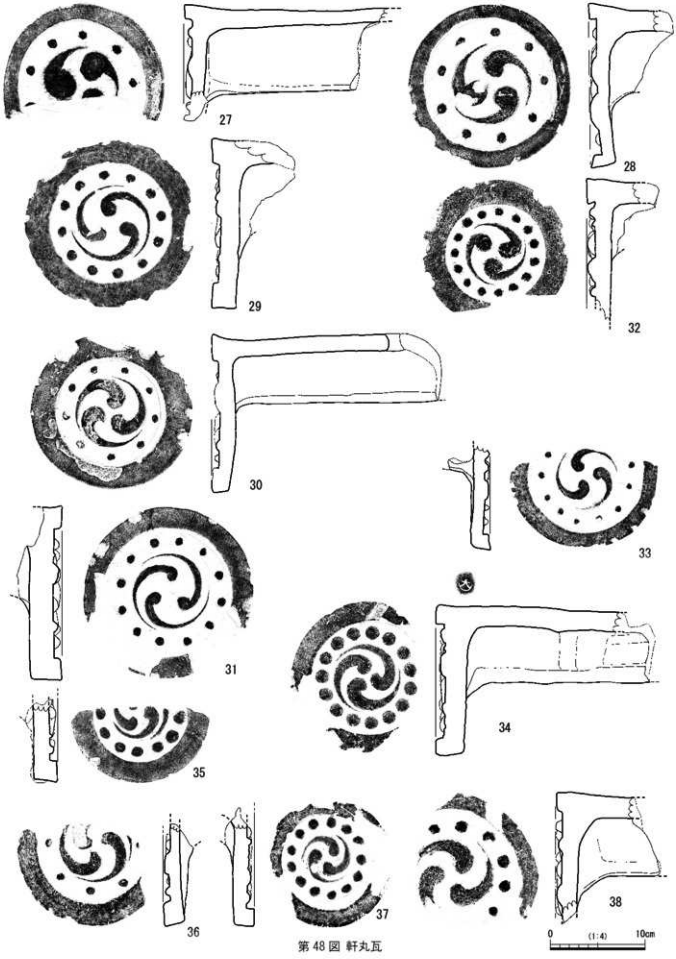
第 45 図 軒丸瓦



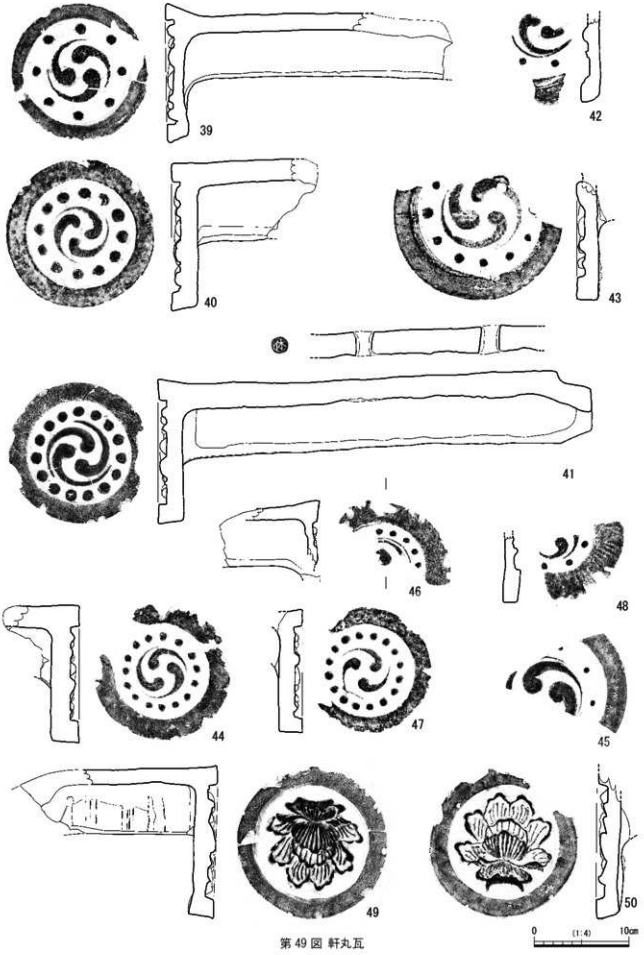
第46図 軒丸瓦



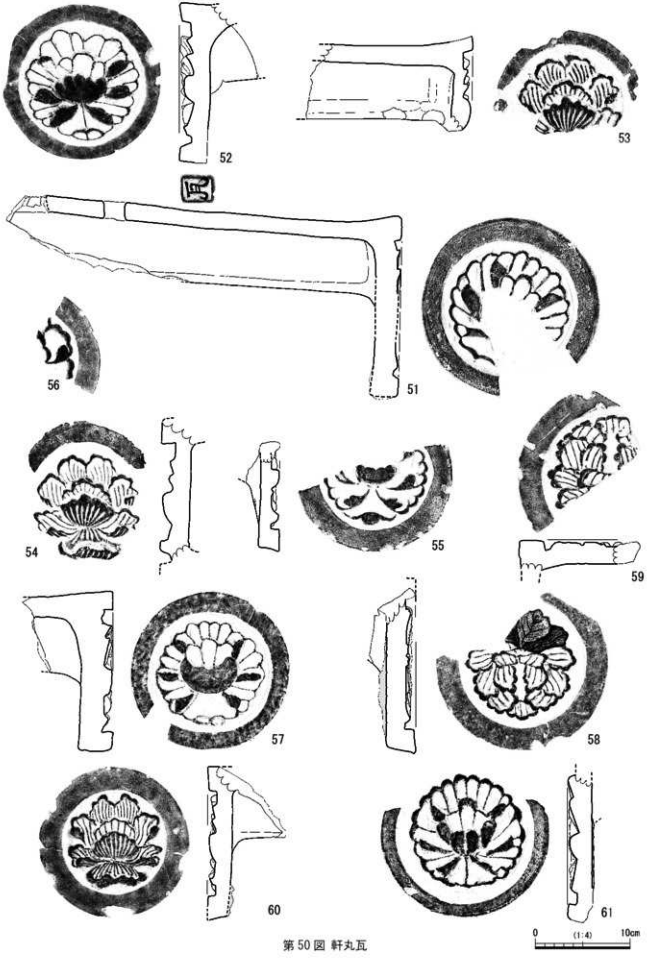
第 47 図 軒丸瓦



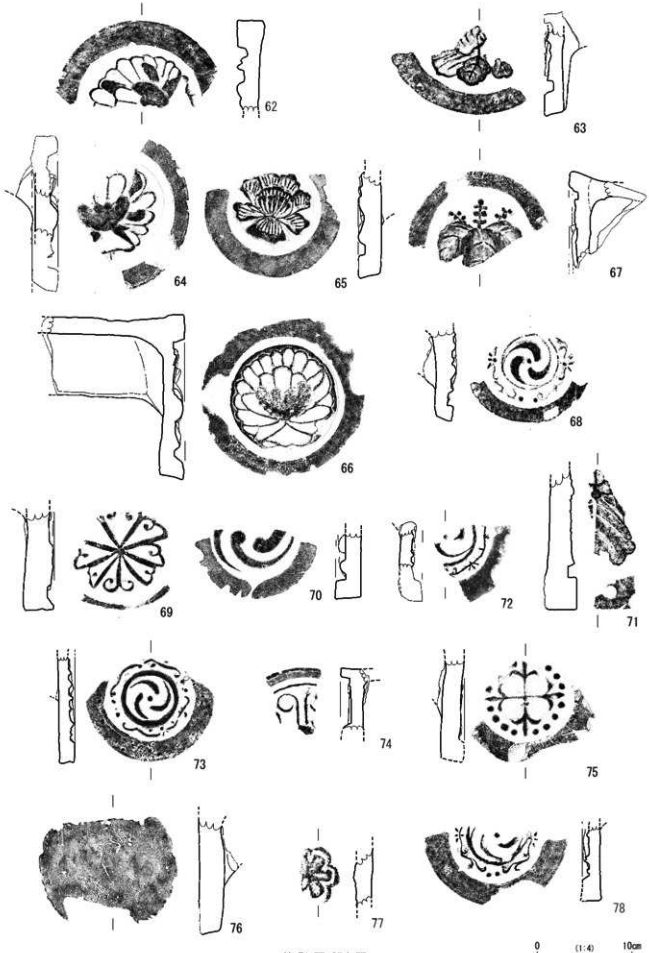
第 48 図 軒丸瓦



第 49 図 軒丸瓦



第 50 図 軒丸瓦



第 51 図 軒丸瓦

第 14 表 軒平・軒桟瓦型式分類・観察表

分類	棟No	掲No	区／層	瓦当幅	文様区幅	瓦当高	文様区高	平／桟	瓦当貼	文様	掲載	刻印	年代	特徴(体長・後端幅・体厚・釘穴数径)／連構	図版
A-001		79	I-23 21T	313	193	70	40	平	×	大板式		「延宝に「大次」」「延宝に「大草」」(左/右掲載)	19C	全体に大型の文様。中心飾り中央がさまざまで肥大。中心飾り筋および子葉は V字をなし、切れ込み深い。	80
		80	I-23	315	194	66	40								
A-002		81	M-2 排水溝内③ 造成土	(241)	172	55	33	平		大板式			17 ～ 18C	中心飾り中央が三角を呈し尖る。	81
A-003		82	I-20 コーナー 瓦溜まり 造成土	255	165	54	35	平	○	大板式			17 ～ 18C	中心飾り中央が鳥形を呈し、珠文大きい。中心飾り筋・脇下は中央と離れる。唐草先端尖る。子葉やや外開き。文様硬直化。	82
A-004	52	83	L-26	295	164	50	28	平	×	大板式			19C	中心飾り中央肥大。唐草・子葉長く伸び、基部は中心飾りに連する。子葉は若葉状に開く。	83
A-005		84	H-25 造成土	(290)	154	50	27	平	×	大板式			19C	大型だが瓦当板い。中心飾り中央肥大。子葉基部は唐草に接し、大きい。左右周縁広い。	84
		85	I-25 造成土	—	—	45	25								
A-006		86	K-27 舗装排水溝 エリア⑤	—	—	52	34		○	大板式		後時系陶器瓦。中心飾り中央上部W形に切れ込む。中心飾り筋・脇下は短かで中央と離れる。子葉は二つに分離する。	17 ～ 18C		86
		87	K-27 舗装排水溝 エリア⑤	—	—	50	33								
A-007		88	K-27 舗装排水溝 エリア⑤	(192)	(114)	(50)	28	平	×	大板式		丸に「大」(左掲載)	19C	中心飾り中央肥大。珠文は基状に変化。脇下小さい。唐草・子葉長く伸び、基部は中心飾りに連する。子葉外開き。	88
A-008	53	89	I-21 8T 撹乱 瓦集中部	(240)	(181)	64	(41)	平	○	大板式			17 ～ 18C	中心飾りや中央が十字形を呈し、珠文大きい。中心飾り脇下V字状に開く。子葉やや外開き。体部裏面 × 字状糸線(2単位)。	89
A-009	52	90	—	(210)	(88)	—	24	桟		連珠三巴 右11珠+大板式	本丸 969		18 ～ 19C	軒丸部あり。子葉に沈線。	90
A-010		91	L-28 造成土	—	—	40	21			大板式			19C	中心飾り中央肥大し、珠文は基状となる。子葉基部は唐草に接する。	91
A-011		92	I-24 瓦集中部①	304	150	(45)	27	平	○	大板式	二丸-472か		17 ～ 18C	後成硬い。中心飾り中央が十字形を呈し、珠文大きい。中心飾り脇下丸のみったり唐草状を呈する。子葉横向きで異形。	92
		93	L-27 造成土	(180)	(143)	57	41								
A-012		94	34T	(205)	132	40	23	桟	×	舞+大板式		隅丸方形に「高天」(左掲載)	19C	雄軒桟瓦。瓦当は桟部側高い。中心飾り筋切込深い。脇下下方二段に分かれる。子葉は大きく、切れ込み深い。	94
		95	I-27 造成土	(210)	130	40	23								
A-013		96	雑木根回し	(132)	(79)	—	22		×	大板式		丸に「大」(右掲載)	19C	中心飾りや中央やや大きい。唐草長い。子葉大きく切込深い。	96
		97	K-28 瓦集中部②	—	(106)	39	22								
A-014		98	34T裏側 雑木根回し I ～V	162	(194)	47.5	26	平	×	大板式		小判に「(不明重要)」(左掲載)丸に「金」(左掲載)	19C	中心飾りや中央やや大きい。唐草小さい。周縁広い。	99
		99	I-25 造成土	—	132	43	25								
A-015		100	N-25 造成土	(146)	(90)	—	28	平	×	大板式		「石？」(第X左掲載)丸に「休」(右掲載)	19C	中心飾りや中央やや大きく、宝珠形。唐草小さい。子葉やや大きく、基部唐草に連する。周縁広い。左右文様区周側に縦方向筋傷(深抜あり)。体長328。釘穴1(径8~10)。	100

第 15 表 軒平・軒桟瓦型式分類・観察表

分類	掃No	掲No	区／層	瓦当幅	文様区幅	瓦当高	文様区高	平／桟	瓦当貼	文様	掲載	刻印	年代	特徴(体長・後端幅・体厚・釘穴数径)／連構	図版
A-016		101	H-I-27	—	—	53	32		×	大坂式			17～18C	中心飾り中央小さく、脇Y字にならず凹みとなる。やや古様。	101
A-017	53	102	—	(175)	118	41	22.5	桟		大坂式			19C	軒桟瓦。中心飾り下重長。脇上小。	102
A-018		103	天文観測室中央基礎	—	(82)	42	22		×	大坂式			18～19C	唐草先端大。	103
A-019		104	H-25 ST 造成土	—	—	55	32	平	×	大坂式変		山に「西」(左周縁)	18～19C	大坂式に近いが唐草がY字を呈し、中心飾り-唐草間に小子葉。	104
		105	J-K-24 瓦集中部	(152)	(68)	—	30								
A-020		106	J-23 II	—	—	50	36	平	○	大坂式			17～18C	A-003類に似るが、唐草巻込弱い。唐草先端尖る。	107
		107	L-27 堆土	(260)	160	52	36.5								
A-021		108	J-22 造成土	(135)	(78)	41	20	平	×	大坂式			18～19C	文様小。中心飾り中央やや大きく、並郭あり。子葉基部唐草に接する。周縁広い。	108
A-022	54	109	I-24 造成土	(130)	(66)	35	22.5		×	大坂式		丸に「石」(右周縁)	18～19C	中心飾り脇、唐草小さい。脇下下方二枝に分かれる。体部薄手。	109
A-023		110	I-27 造成土	(125)	(67)	38	23	桟	×	大坂式			19C	雛型軒桟瓦。中心飾り中央逆瓢箪形。中心飾り脇と子葉は切込深い。中心飾り脇下は線状となる。	110
A-024		111	I-27 造成土	(187)	(133)	57	38		△	大坂式			17～18C	中心飾り鳥状でやや幅広。A-008類に似るが唐草長い。	111
A-025		112	I-21 瓦集中部撹乱	(147)	(70)	(45)	25	平	×	大坂式		四角に「吉」(左周縁)	18～19C	中心飾り中央上尖る。唐草・子葉やや小さい。体長30↑。	112
A-026	—	—	—	(188)	(93)	43	25	桟		大坂式	二丸-488 (4841・4857)		18～19C	連珠三巴文12珠右巻。巴は角ばる。唐草・子葉長く伸び、先端小。	二丸488
A-027	—	—	—	(211)	(95)	21	43	桟		大坂式	二丸-492		18～19C	連珠三巴文12珠左巻。中心飾り中央大きい。唐草小さく、子葉長く伸びる。	二丸492
A-028	—	—	—	(122)	(42)	(34)	20	桟		大坂式	二丸-495		18～19C	軒丸部小さい。連珠三巴文12珠右巻。唐草長く伸び直線的。	二丸495
A-029		113	L-27 撹乱	—	(77)	45	27	桟	×	大坂式		四角に「中」(左周縁)	19C	雛軒桟瓦。中心飾り中央だるま形。中心飾り脇と子葉は切込深い。子葉大。中心飾り脇下は線状となる。	113
A-030	54	114	L-28 瓦集中部②)	—	(93)	43	24	桟	×	大坂式		四角に「前」(左周縁)	19C	雛軒桟瓦。中心飾り中央下珠文大。子葉は大きく、切込深い。中心飾り脇下は線状となる。	114
A-031		115	N-26-27 造成土	—	(113)	38	23	桟	×	大坂式			19C	雛軒桟瓦。中心飾り中央一珠間広。中心飾り脇と子葉は切込深い。子葉大。中心飾り脇下は線状となる。	115

第 16 表 軒平・軒桟瓦型式分類・観察表

分類	棟No	掲No	区／層	瓦当幅	文様区幅	瓦当高	文様区高	平／桟	瓦当貼	文様	掲載	刻印	年代	特徴(体長・後端幅・体厚・釘穴数径)／遺構	図版
A-032	54	116	M-25 遺成土	—	(132)	43	26	桟	×	大張式			19C	雄軒桟瓦。中心飾り中央雲だるま除。中心飾り脇と子葉は切込浅い。子葉大。中心飾り脇下は緩状となる。	116
A-033		117	I-J-23-24 遺成土	—	—	42	26	桟	×	大張式			19C	雄軒桟瓦。中心飾り中央瓢箪形。中心飾り脇は分離気味。子葉は切込深い。子葉大。中心飾り脇下は緩状となり長い。	117
		118	調査区2 遺成土	—	(117)	—	27								
A-034		119	I-25 9T 遺成土	—	(130)	40	27	桟	×	大張式	本丸 1016	丸に「渡」(右掲線)	18 ～ 19C	A-013類に似る。中心飾り中央大きい。中心飾り脇。子葉は切込深い。	119
		120	J-21 遺成土 撹乱	—	—	—	26								
A-035		121	J-29 テニスコート	—	—	—	26			大張式			18 ～ 19C	中心飾り下著長。	121
A-036		122	H-25 遺成土	—	—	53	35		○	大張式			17 ～ 18C	A-006同文。中心飾り脇上二重。子葉二枝	122
A-037		123	L-27	300	177	52	34	平	○	大張式			17 ～ 18C	破損。A-008・A-036同文。子葉二枝	123
A-038	55	124	J-K-21 遺成土	—	—	55	35		○	大張式			17 ～ 18C	A-024同文。	124
		125	N-27 排水溝内	—	—	57	37								
A-039		126	J-22・23 表土	(200)	(144)	50	29	平	×	大張式			17 ～ 18C	大張式の古手。	126
A-040		127	J-K-26・27 遺成土	(180)	(173)	45	30		○	大張式			17 ～ 18C	A-002類に似る。	127
A-041		128		275	170	47	33		○	大張式			17 ～ 18C	A-003類、A-020類に似る。唐草小さく、子葉下に伸びがち。	128
B-001		129	M-27 排水溝内	293	209	59	38	平	○	鹿児島式			17 ～ 18C	大張式系統だが、子葉の下方に一平状の子葉あり。中心飾り中央キノコ状。中心飾り脇下Y字状に大き く開き、左端丸み を帯びる。唐草巻き込み浅い。	129
B-002		130	J-K-24 瓦集中部 遺成土 643	(283)	220	64	44	平	○か	鹿児島式			17 ～ 18C	大張式系統だが、子葉の下方に一平状の子葉あり。中心飾り中央縦状。中心飾り脇下Y字状に開く。唐草巻き込み浅い。体長30。体厚唐草に×平状条線(4本×3条)。	130
B-003		131	M-27 盛土	(244)	(193)	(65)	45		○	鹿児島式	本丸 975		17 ～ 18C	大張式系統だが、子葉の下方に一平状の子葉あり。中心飾り中央縦状。中心飾り脇下Y字状に開く。唐草巻き込み浅い。体厚唐草に×平状条線。	131
		132	L-24 桝修理土 エリア②	—	—	(61.5)	45								
B-004		133	J-22・23 21T 遺成土	—	(76)	(41)	21	桟	×	鹿児島式			19C	雄軒桟瓦。大張式系統だが、子葉の下方に唐草あり。中心飾り中央肥大。子葉基部唐草に接し一体化する。	133
B-005		134	K-28 遺成土	—	141	43	24	桟	×	鹿児島式		四角に「玉木堂」(右掲線)	19C	軒桟瓦(軒丸部不明)。大張式系統だが、子葉の下方に唐草あり。中心飾り下長時右に寄る。唐草と子葉は一体化し、太めの形となる。	134

第 17 表 軒平・軒桟瓦型式分類・観察表

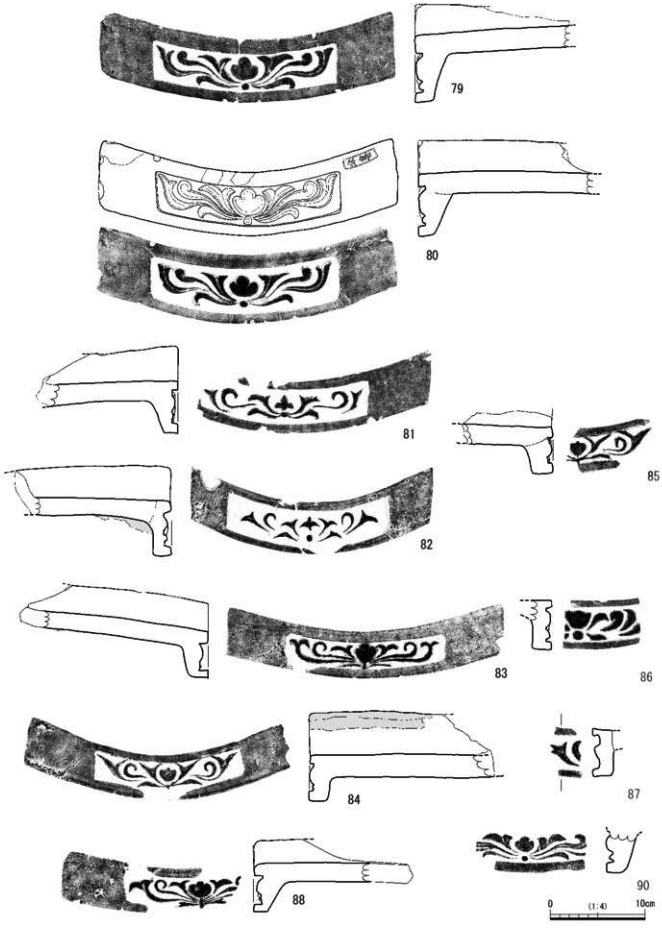
分類	掃No	掲No	区／層	瓦当幅	文様区幅	瓦当高	文様区高	平／桟	瓦当貼	文様	掲載	刻印	年代	特徴(体長・後端幅・体厚・釘穴数径)／遺構	図版
B-006	55	135	L-28 遺成土	—	(154)	55	29	桟か	×	鹿児島式	二丸-477 か	丸に「休」 (左周線)	19C	逆軒桟瓦か。大坂式系統だが、子葉の下方に唐草あり。中心飾り筋大きい。唐草と子葉は一体化し、丈の中央に沈線のある形となる。	135
B-007	—	—	—	292	136	44	25	桟		鹿児島式	二丸-483	あり(右周線)	18 ～ 19C	連珠三巴文右巻12珠。唐草と子葉は一体化し、丈の中央に沈線のある形となる。子葉下方に唐草。	二丸483
B-008	—	—	—	(188)	(59)	—	25	桟		鹿児島式	二丸-486		18 ～ 19C	連珠三巴文右巻14珠。唐草と子葉は一体化する。子葉下方に唐草。	二丸486
B-009	—	—	—	(189)	—	—	—	桟		鹿児島式	二丸-489		18 ～ 19C	連珠三巴文右巻12珠。唐草と子葉は一体化し、丈の中央に沈線のある形となる。子葉下方に唐草。	二丸489
B-010	—	—	—	(183)	(73)	—	25	桟		鹿児島式	二丸-490		18 ～ 19C	連珠三巴文右巻12珠。唐草と子葉は一体化し、丈の中央に沈線のある形となる。子葉下方に唐草長く伸びる。	二丸490
B-011	—	—	—	290	137	36	20	桟		鹿児島式	二丸-502	「石」(逆) 左周線	18 ～ 19C	逆軒桟瓦。唐草と子葉は一体化して長く伸びる。子葉下方に唐草長く伸びる。	二丸502
B-012	—	—	—	(180)	(115)	(45)	28	桟		鹿児島式	本丸966		19C	逆軒桟瓦。唐草と子葉は一体化する。子葉下方にややボ下がりに唐草。	本丸966
B-013	55	136	M-27 遺成土	—	—	(35)	(16)		×	鹿児島式		短冊に 「太喜」 (右周線)	19C	小型。	137
		137	K-28 遺成土	—	—	(36)	(17)								
B-014	—	—	—	(174)	(75)	39	21	桟		連三巴右12珠+鹿児島式	本丸970		19C	軒丸部あり。唐草と子葉は一体化する。子葉下唐草やや上がり。	本丸970
B-015	—	—	—	(167)	—	—	24			鹿児島式	本丸1017	丸に「休」 (右周線)	19C	唐草と子葉は一体化する。子葉長い。	本丸1017
C-001	55	138	K-27 軒瓦内エリア⑤	(267)	196	74	50	平	○	大坂亜式			17 ～ 18C	大坂式から派生か。 中心張り筋十字型。体部裏面に×字状条線(本幅×2条)。体長348。	138
		139		295	192	72	50								
C-002	56	140	M-1 遺成土	290	201	67	43	平	○	大坂亜式	本丸976、 二丸-473 か		17 ～ 18C	大坂式から派生か。中心張り筋十字型。C-001型に似るが、右端子葉の位置が高い。	140
C-003		141	I-24 97 遺成土	(290)	(156)	73	48	平	○	大坂亜式			17 ～ 19C	大坂式から派生か。文様各単位が小さく敬遠。左周縁狭い。	141
C-004	—	—	—	—	—	—	48	平		大坂亜式	二丸- 474/475		17 ～ 18C	C-003に似るが構成異なる。左周縁狭い。	二丸475
		—	—	(186)	(130)	—	48								
C-005	56	142	J-25-26 SD 02	—	—	49	30	平		大坂亜式	本丸977、 市二丸- 165		17 ～ 19C	大坂式から派生か。他のC種より小型。中心飾り筋下肥大。	143
		143	K-23 ボーリング No.3	(183)	(157)	42	29								

第 18 表 軒平・軒桟瓦型式分類・観察表

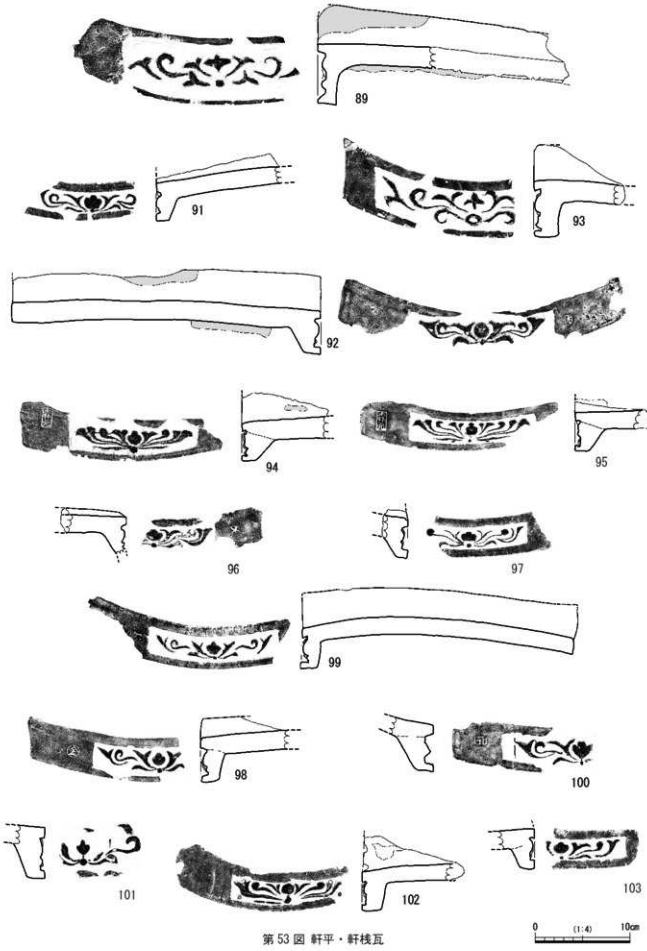
分類	棟No	掲No	区／層	瓦当幅	文様区幅	瓦当高	文様区高	平／桟	瓦当貼	文様	掲載	刻印	年代	特徴(体長・後端幅・体厚・釘穴数径)／遺構	図版
C-006	56	144	M-27 焼土	—	(189)	60	44			大阪重式	二丸-476か		17～18C	大阪式から派生か。中心飾りくびれ深い。C-003類に似るが唐草脇下の形状が異なる。	144
		145	I-23 21T 瓦溜中部	(190)	(130)	—	—								
D-001		146	N-20 1T 遺成土	235	133	33	19	平	○	異形唐草文			17～18C	陶器瓦。褐色の釉薬が全面に厚く掛かる。小型で瓦当は細い。鬼骨様の唐草文。中心飾り葉状非対称。左右周縁広い。堂平2-282か。	146
D-002		147	L-26 修掃内 エリア⑦	(325)	208	71	47	平	×	下向三葉＋上下	本丸-973/974	角に「木(筆)」(右周縁)	18C	中心に中央の凹む三葉を配し、脇に内向する子葉、鮎弁の唐草2対を配する。中心飾り上部に九脚。唐草は先端が丸い。体部釘穴あり。	147
D-003		148	L-27 修掃内 エリア⑨	269	159	49	33	平		上向三葉＋下上			17～18C	文様は細い線描。中心に上向き三葉を配し、鮎弁の唐草2対を配する。第2唐草は太く、中心飾り下に連する。焼成良好。	148
D-004		149	L-26 修掃内 エリア⑦ L-27 修掃内 エリア⑨	(265)	(202)	72	44	平	×	下向三葉＋上下			18C	D-002類・D-007同文。中心に中央の凹む三葉を配し、脇に内向する子葉、鮎弁の唐草2対を配する。中心飾り上部は特大となる。唐草は先端が尖る。体長298、釘穴1。	149
D-005		150	K-27 修掃内 エリア⑬	271	159	43	25	平	×	上向三葉＋下上			17～18C	文様はやや太い線描。中心飾りは中央に葉脈を有する三葉で、各葉の下に珠文を配する。唐草は巻き込み強く、第一唐草の背に第二唐草の基部が接する。体長293。	150
D-006		151	L-27 修掃内 エリア⑬	(172)	(92)	45	28	平	×	牡丹+連続唐草		あり	18～19C	中心飾りは五弁牡丹状。唐草は連続するが、中心飾り脇で中断。なるなど大坂式の影響がうかがわれる。	151
		152	J-K-24 9T	—	—	—	—								
D-007		153	I-25 9T 遺成土	323	203	63	45	平	×	下向三葉＋上下		角方所飾に「太左筆門」(陽)(体部直線中央)	18C	D-001・D-004類同文。中心に中央の凹む三葉を配し、脇に内向する子葉、鮎弁の内外脇に唐草2対を配する。中心飾り上部は凹んだ珠文となる。中心飾りや角度が乱にて代。各葉は下方が中ぶくら。唐草脇は内側が丸みを帯び(3個)、第2唐草は先端が尖る(3個)。	153
		154	N-23-24 石垣間側溝	—	(147)	58	40								
D-008		155	K-26 遺成土	—	—	33	19	平	×	上向三葉＋唐草下上	南二G-289		17～18C	中心飾りと向三葉。細く長い唐草を配する。左周縁広い。古種。	155
D-009		156	H-25 遺成土	—	—	47	25	平	×	牡丹+連続唐草			18～19C	中心飾りは三弁牡丹状。唐草は連続し、枝端は尖るが、末端はスルメを帯びる。瓦当面に面取目立つ。	156
		157	I-24 9T 瓦溜中部①	—	153	48	25								
D-010		158	I-27 34T-2 遺成土	260	183	50	24	平	×	上向三葉＋下上			17C	古種。左右周縁やや狭い。上部面取りた。	158
D-011		159	J-20・21 遺成土	—	—	34	18	(平)	○	異形唐草文			17～18C	陶器瓦。D-001類同文。褐色の釉薬が全面に厚く掛かる。瓦当面は釉がやや白濁する。小型で瓦当は細い。鬼骨様の唐草文。中心飾り葉状非対称。堂平2-273/274か。	159
D-012		160	I-27 遺成土	—	—	38	22.5	(平)	×	中心+下+?			17C	古種。中心飾り脇は二重線となる。唐草は細く巻き込み強い。軒丸A-018類とセットの可能性高い。	160
D-013		161	—	—	—	—	—	平		(不明)			17C	長様。極薄状文様と待ち針様の文様が外に展開。脇は三重色。左周縁きわめて狭い。瓦当面面に布目。朝鮮系か。	161
D-014	—	—	—	(188)	(109)	44	26	桟		牡丹+唐草上上(連続)下	本丸-967/968		18～19C	雄軒桟瓦。中心飾りは牡丹状。唐草は上方に上向きかつ連続。下方に下向。文様区左上斜め カット。	本丸968
		—	—	(231)	(122)	—	26								

第 19 表 軒平・軒桟瓦型式分類・観察表

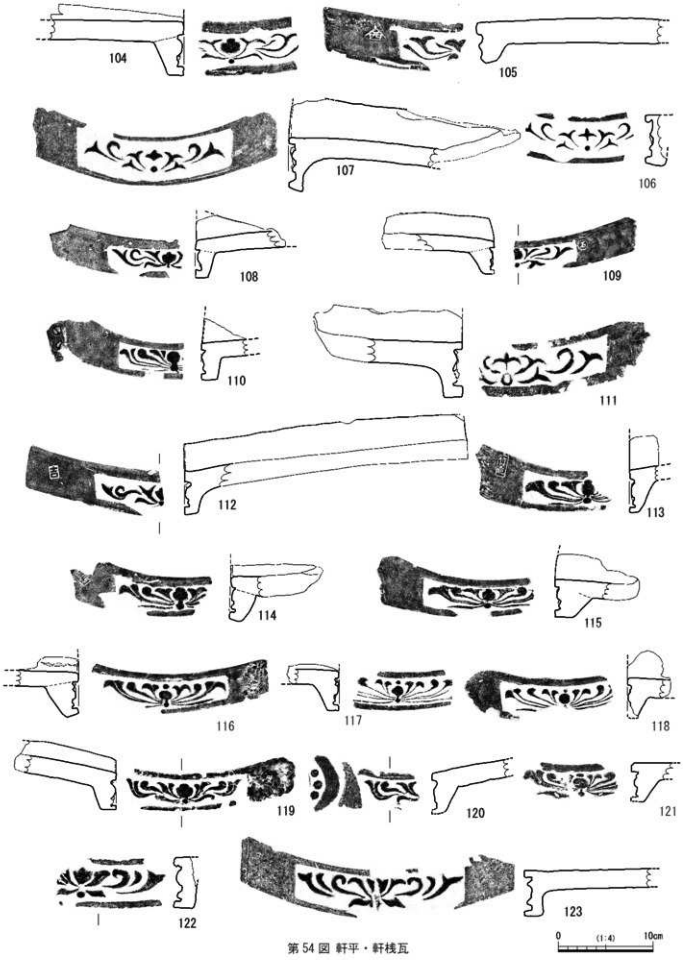
分類	掃No	掲No	区／層	瓦当幅	文様区幅	瓦当高	文様区高	平／桟	瓦当貼	文様	掲載	刻印	年代	特徴(休長・後端幅・休厚・釘穴数径)／遺構	図版
D-015	57	162	I-24 9T	(272)	195	40	25	平	○	中心+散			17 – 18C	瓶草胎の中心飾りに細葉状唐草2対が広がる。瓦当貼り付けだが、大型でない。休長30以。休部釘穴なし。	162
D-016	–	–	3 3黒梅	(125)	(93)	43	23	平		上向三葉+唐草下上	市二G-291		17C	古様。唐草細く長く伸びる。	市二G291
D-017		163	K-1 排水溝⑦ 埋土	(131)	(100)	39	23		×	上向三葉+唐草下上	市二G-292		17C	古様。中心飾りやや小さい。唐草細い。	163
D-018		164	調査区2 3T 遺成土	–	–	57	39	平	×	下向三葉+上下			18C	D-002類同文。脇に内湾する子葉。組身の唐草2対を配する。D-007に近いが、唐草・上部周縁舎白抉い。中心飾りは不明。右端唐草は先端が尖る(D形)。	164
D-019		165	K-28 3 2T 遺成土	–	–	40	19		×	下向三葉+唐草下上連続			17C	古様。唐草細く連続する。	165
D-020		166	L-2 撹乱	(170)	(117)	35	19	平	×	上向三葉+唐草下上			17C	古様。中心飾り二重線。左周縁広い。唐草細い。表面黒色。胎土黒褐灰。	166
D-021	57	167	L-28 遺成土	–	–	40	25	平					17 – 18C	異形唐草。朝鮮系か。	167
D-022		168	K-29 遺成土	–	–	(38)	20	平	×	三葉+波状唐草下上			17C	古様。	168
D-023		169	K-28 遺成土	(130)	(80)	38	20	平	×				17C	古様。	169
D-024		170	I-20 遺成土	–	–	–	22	桟	×				18 – 19C	D-006類同文。中心飾り下小。	170
D-025		171	N-8 41T	(220)	–	43	–	桟		無文		箱角に「日産工 産業組合」	19 – 20C	軒丸部・軒平部平坦。軒丸部径88mm。日産瓦。	171
D-026	58	172	M-24 撹乱	(80)	–	–	–	桟		無文		角に「日」	19 – 20C	軒丸部・軒平部平坦。軒丸部径80mm。日産瓦。	173
	57	173	E-1' 42T	(148)	–	43	–					丸に「日」(軒丸部中央)			
D-027		174	J-29 45T テニスコート下	–	(87)	37	21		×	下向三葉+唐草上下上連続			17C	古様。反りやや大。	174
D-028		175	J-28 45T 撹乱	–	–	39	22	平	×	上向三葉+下上			17C	古様。中心飾り上三葉に中心線。焼成甘い。	175
D-029	58	176	J-28,45T 遺成土	(159)	(115)	35	20	平	○	異形唐草文			17 – 18C	金平寺製。陶器瓦。D-011類同文。	176
		177	J-29,45T 遺成土	–	–	32	19								
D-030		178	M-27 遺成土	–	–	39	19			不明+唐草			17C	胎土黒色。右周縁抉。朝鮮系か。	178
D-031	–	–	–	–	–	36	15	平	○	異形唐草文	本丸1011		17-18C	金平寺製。陶器瓦。D-011類同文。	本丸1011



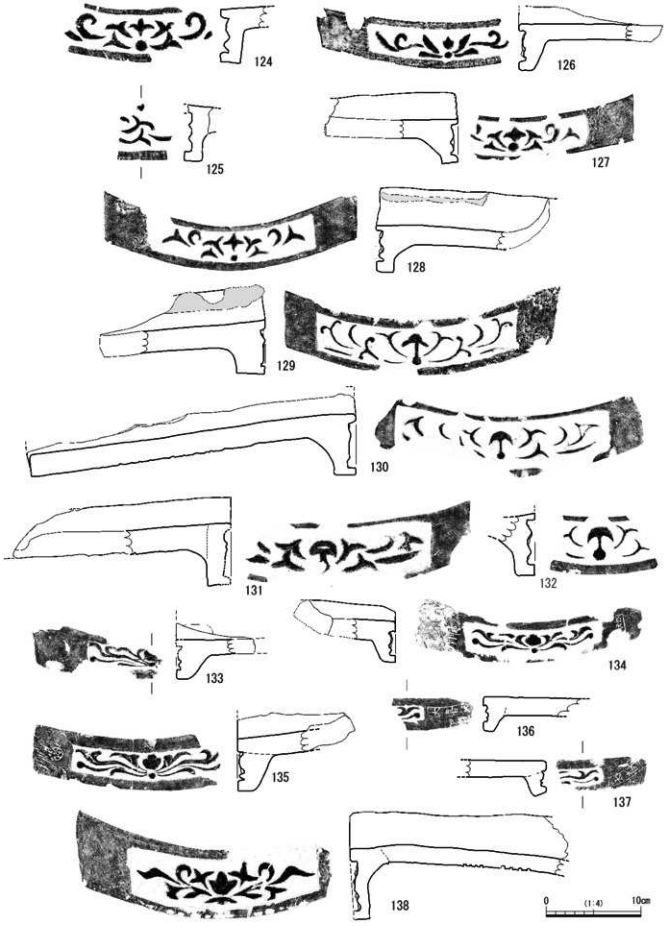
第52図 軒平・軒桟瓦



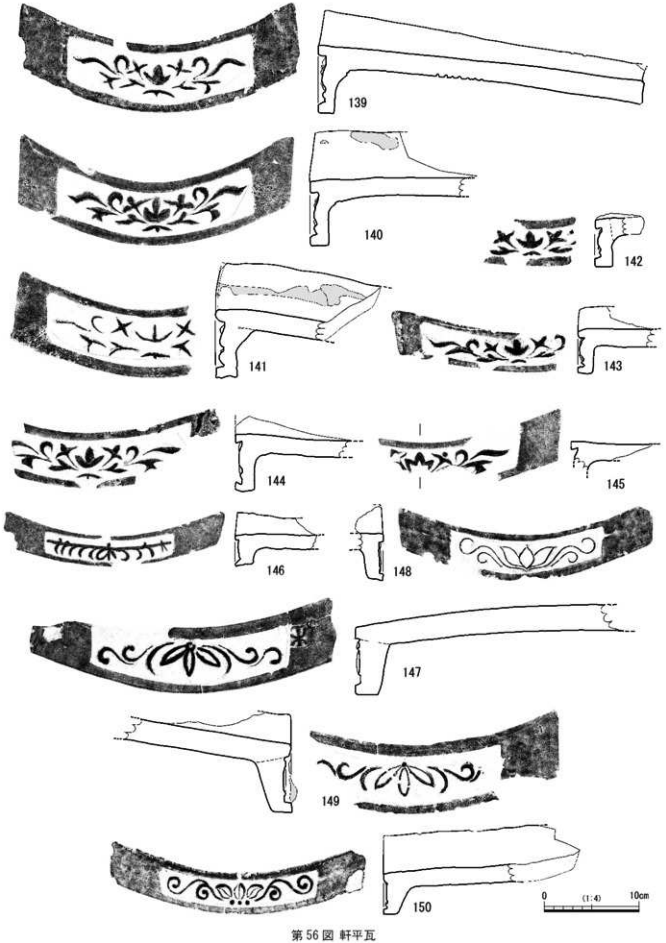
第 53 図 軒平・軒桟瓦


104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
0
(1:4)
10cm

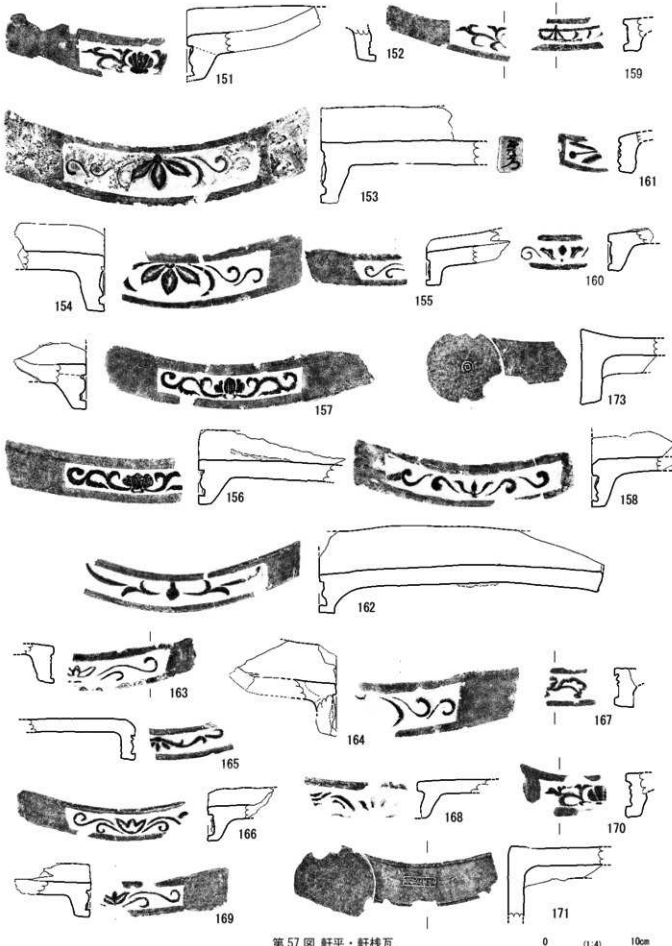
第 54 図 軒平・軒桟瓦


124
126
125
127
128
129
130
131
132
133
134
136
135
137
138
0
(1:4)
10cm

第 55 図 軒平・軒桟瓦



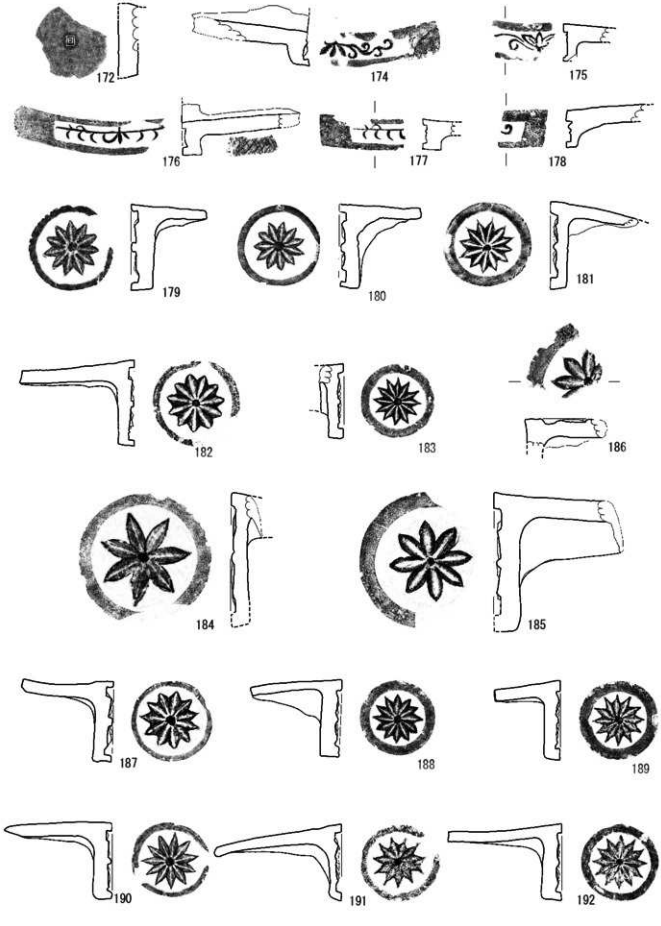
第56図 軒平瓦


151
152
159
153
161
154
155
160
157
173
156
158
162
163
164
167
165
166
168
170
169
171
0
(1:4)
10cm

第 57 図 軒平・軒桟瓦

第 20 表 小菊瓦型式分類・観察表

分類	図版・法量(mm)・特徴	分類	図版・法量(mm)・特徴	分類	図版・法量(mm)・特徴
1	区 L-24 層 埋土 瓦種 90 文様 75 内径 58 芯径 10 瓦厚 24 体幅 90 奥行 80 年代 18-19C 179 文様 11弁菊花 掲載 [illegible] 弁端尖る。花弁低い。瓦厚薄い。体部先端は平。	2	区 L-28 層 埋土 瓦種 87 文様 72 内径 54 芯径 10 瓦厚 21 体幅 86 奥行 86 年代 18-19C 180 文様 11弁菊花 掲載 [illegible] 弁端尖る。弁に沿ってのたがあり、側面はそるためか、花弁間がひらいている。中央太め切り込み。裏は平坦さが、体部先端はかき寄せる。	3	区 L-27.3(⑤) 層 埋土 瓦種 83 文様 67 内径 57 芯径 9 瓦厚 18 体幅 81 奥行 (93) 年代 18-19C 181 文様 12弁菊花 掲載 [illegible] 弁端尖る。右上(が主)弁内部に傷。体端尖るもの多い。丸(三角)の刻印(市二ヵ)176。
4	区 I-25.9T 層 造成土 瓦種 92 文様 76 内径 60 芯径 8 瓦厚 20 体幅 87 奥行 122 年代 18-19C 182 文様 11弁菊花 掲載 [illegible] 弁端尖る。右上(が主)弁内部に傷。体部先端尖るもの多い。	5	区 L-28 層 造成土 瓦種 79 文様 57 内径 50 芯径 7 瓦厚 17 体幅 – 奥行 (26) 年代 18-19C 183 文様 12弁菊花 掲載 [illegible] 小型。弁端尖る。周縁内左上に傷。花芯細に小傷。体部整形(本丸959)。	6	区 K-20 層 造成土 瓦種 144 文様 115 内径 97 芯径 13 瓦厚 18 体幅 132 奥行 (34) 年代 18-19C 184 文様 7弁菊花 掲載 弁端尖る。
7	区 J-K-24 層 造成土 瓦種 (147) 文様 (111) 内径 84 芯径 11 瓦厚 26 体幅 147 奥行 (137) 年代 18-19C 185 文様 8弁菊花(隠) 掲載 [illegible] 弁端尖る。弁にあみ。先回裏分は体部丸瓦形(先端は不明)／軒丸であれば軒平D-002類等とセット。	8	区 L-26 層 埋土 瓦種 146 文様 109 内径 90 芯径 12 瓦厚 24 体幅 135 奥行 年代 18-19C 本959 文様 8弁菊花(隠) 掲載 本丸-959/960 弁端尖る。弁にあみ。／軒丸であれば軒平D-002類等とセット。	9	区 K-29 層 造成土 瓦種 (70) 文様 (54) 内径 (39) 芯径 (8) 瓦厚 – 体幅 – 奥行 (30) 年代 18-19C 186 8弁菊花(隠) 掲載 本丸-962/963 7類に似るが、やや小さい。／軒丸であれば軒平D-002類等とセット。
10	区 I-25.9T 層 造成土 瓦種 85 文様 72 内径 61 芯径 10 瓦厚 19 体幅 70 奥行 98 年代 18-19C 187 文様 11弁菊花(隠) 掲載 弁端尖る。花弁のへこみが先端に達する。花弁高い。	11	区 層 瓦種 70 文様 54 内径 6 芯径 9.9 瓦厚 13 体幅 – 奥行 99 年代 18-19C 市二176 文様 10弁菊花(隠) 掲載 市二丸-176 弁端尖る。花弁のへこみが先端に達する。1類より花弁切り込み浅い。	12	区 I-25.9T 層 造成土 瓦種 82 文様 58 内径 51 芯径 12 瓦厚 20 体幅 77 奥行 98 年代 18-19C 188 文様 12弁菊花(隠) 掲載 弁端尖る。花弁へこみ斜めに入る。弁間3ヶ所に筋傷。
12a	区 MN-26.27 層 – 瓦種 84 文様 59 内径 55 芯径 10 瓦厚 17 体幅 60 奥行 70 年代 18-19C 189 文様 12弁菊花(隠) 掲載 12の文様上部花弁-周縁間に筋傷。製作にばらつき。	13	区 J-25 層 造成土 瓦種 80 文様 66 内径 61 芯径 8 瓦厚 21 体幅 70 奥行 (114) 年代 18-19C 190 文様 11弁菊花(隠) 掲載 弁端尖る。3類に似るも、花弁数異なる。体部先端尖る。	14	区 H-25.9T 層 造成土 瓦種 82 文様 64 内径 51 芯径 (8) 瓦厚 14 体幅 76 奥行 134 年代 18-19C 191 文様 12弁菊花(隠) 掲載 2類に似るが、文様細小。体部先端尖る。
15	区 I-25 層 造成土 瓦種 82 文様 63 内径 55 芯径 10 瓦厚 22 体幅 73 奥行 122 年代 18-19C 192 文様 12弁菊花(隠) 掲載 弁端尖る。12類に似るが、花芯小さい。	16	区 – 層 – 瓦種 90 文様 65 内径 – 芯径 – 瓦厚 22 体幅 80 奥行 54 年代 18-19C 本1000 文様 三角格状 掲載 本丸-1000 裏面中央より突起。		



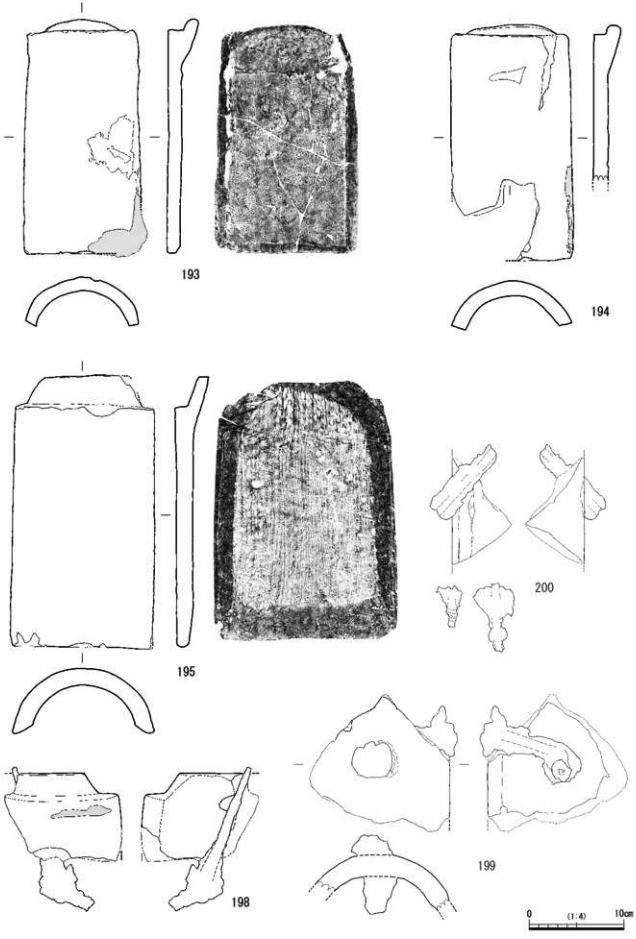
第 58 図 軒平・軒桟瓦，小菊瓦

第 21 表 その他瓦型式分類・観察表

検出 No	遺構 No	分類	グリッド	トレンチ	層位	幅 (mm)	高 (mm)	厚さ (mm)	文字内容	備考
59	193	丸瓦	J-22-23	21T	遺成土	248	120	14		
	194	丸瓦	J-22-23	22T	遺成土	250	127	16		
	195	丸瓦	L-27. 柵棟内側	-	-	291	152	18		
	196	丸瓦	L-26. 柵棟内側	-	-	(93)	(124)	18		銘付者
	199	丸瓦	L-26. 柵棟内側	-	-	(145)	(148)	(24)		銘付者
	200	丸瓦	L-27. 柵棟内側	-	-	(114)	(62)	(18)		銘付者
60	196	丸瓦	J・K-24	-	瓦集中部遺成土	300	161	18		
	197	丸瓦	N-25	-	遺成土	250	190	26		
74	176	丸瓦	-	-	-	(166)	(100)	24	九十五	刻書、朝九か?カードなし
	279	丸瓦	I-20	-	コーナー瓦張り	(82)	(83)	21		刻印瓦
	280	丸瓦	K-28	-	遺成土	(87)	(77)	17		刻印瓦
	281	丸瓦	(-27	-	遺成土	(167)	(101)	20		刻印瓦
	282	丸瓦	N-26	3T 北	七高遺成土	(137)	(90)	26		刻印瓦
図版 16	382	丸瓦	I-24-25	9T	拡張部西側ベルト	363	193	25		
61	201	平瓦	-	-	-	293	258	20		カードなし
	202	平瓦	-	-	-	294	261	19		カードなし
	203	平瓦	K-27. 柵棟内側	-	-	296	275	18		
	204	平瓦	I-25	-	遺成土	297	260	20		
62	205	平瓦	柵棟内側	-	埋土	345	(315)	30	太郎衛門?	M40-07 とセット平瓦
	206	平瓦	I-25	-	遺成土	338	315	21	五衛門	
	207	平瓦	I-24	9T	瓦集中部下. 72	335	328	25		
	208	平瓦	I-24	-	瓦集中部下	361	338	25	?	
	209	平瓦	(-21	-	瓦集中部掘底	348	(201)	26	太郎	
63	210	平瓦	I-24	9T	瓦集中部下. 83	365	339	25		
	211	平瓦	N・11	37T	黒色土層	335	306	22	道?	
	212	平瓦	(-24	-	瓦集中部下. 85	355	311	27	五衛門	
73	270	平瓦	I-22	2T	遺成土	(112)	(141)	23		面書?刻書?
	271	平瓦	調査区 1	-	遺成土	(97)	(80)	20		刻書?
	272	平瓦	J・K-21	-	遺成土	(216)	(189)	20		刻書?
	273	平瓦	(-21	-	遺成土	(102)	(190)	25		刻書?
	274	平瓦	調査区 2	3T	遺成土	(162)	(162)	23		刻書?
	275	平瓦	N-28	-	遺成土	(156)	(89)	20		刻書?朝九
74	277	平瓦	(-28	4ST	掘乱	(263)	(127)	21		刻印瓦
	278	平瓦	L-28	-	瓦集中部北	(104)	(87)	20		刻印瓦
図版 16	381	平瓦	L-27. 柵棟内側	-	-	297	270	16		
64	213	桟瓦	H・I-25	-	瓦集中部下	280	279	20		
65	220	軒瓦	L・M-20	-	遺成土	148	136	20		
	221	軒瓦	J-20	10T	遺成土	179	147	20		
66	222	軒瓦	K-20	22T	遺成土	172	138	17		
図版 17	387	軒瓦	(-3	-	-	170	140	20		御角種
71	257	海鼠 1 類	M-29	1T	排水溝内一括	(190)	368	29		
図版 18	389	海鼠 1 類	J・K-21	8T	瓦溜まり. 30	(260)	(242)	26		
71	258	海鼠 2 類	L-27	-	遺成土	206	(206)	30		
	259	海鼠 2 類	N-26	3T	掘乱 1 の下	416	(296)	33		
	260	海鼠 3 類	M-26・27	-	遺成土	(237)	(126)	(40)		M44-10 とセット (根熟)
図版 18	388	海鼠 3 類	J・K-1	-	基礎施設掘乱	(783)	(266)	42		
71	261	海鼠 4 類	-	3T	掘乱	(148)	(224)	41		
	262	海鼠 5 類	I-21	8T	瓦集中部	211)	(165)	30	太郎	
72	263	海鼠 5 類	J-22	21T	遺成土	(248)	(165)	30	太郎	
	264	海鼠 6 類	J・K-24	9T	遺成土	(193)	(158)	22		
67	235	鯱瓦	J-29	40T	掘乱	(106)	(67)	21		
	236	鯱瓦	H-24	9T	遺成土	(73)	(118)	25		170 初　晨
	237	鯱瓦	(-27	-	遺成土	(112)	(149)	28		170 (顔)
	238	鯱瓦	N-28	1T	表採	(74)	(112)	22		
	239	鯱瓦	M-25	24T	遺成土 414	(155)	(113)	(67)		19C 2 建合
図版 21	392	鯱瓦	調査区 2	3T	遺成土	(110)	(101)	24		前頭期 (翼ビレ)
	393	鯱瓦	J-1・2	-	瓦集中部?	(184)	(167)	(26)		

検出 No	遺構 No	分類	グリッド	トレンチ	層位	瓦当直径 (mm)	瓦当直径 (mm)	顔幅幅 (mm)	文様図直径	備考
67	230	鳥伏間瓦	M-27	-	遺成土	巴左巻き 15 連	長 180 短 150	-	94	
	231	鳥伏間瓦	N-25	-	遺成土	牡丹		(18)		
	232	鳥伏間瓦	M・N-27	-	天文台石根下	巴右巻き 7 ?連	(184)	幅 (25)	130	
	233	鳥伏間瓦	-	-	-	巴左巻き 4 ?連	-	長 (32)	-	
	234	鳥伏間瓦	J・K-24	-	瓦集中部遺成土	牡丹	長 181 短 168	長 23 短 16	131	

検出 No	遺構 No	分類	グリッド	トレンチ	層位	幅 (mm)	高 (mm)	厚さ (mm)	文字内容	備考
72	265	隼瓦 1 類	J・K-21	8T	掘乱 1 層	(247)	290	31		
	266	隼瓦 1 類	I・J-21	8T 他	掘乱	511	(347)	29		M-00/10 と接合
73	266	隼瓦 1 類	I-20	-	-	(302)	(196)	25		
72	267	隼瓦 2 類	M-25	-	穴	(214)	310	22		
64	214	熨斗瓦	H-24	9T 下部	遺成土	142	292	17		
	215	熨斗瓦	K・L-20	-	農込石上	(105)	211	13	○五○九○○	小
	216	熨斗瓦	I-24	-	遺成土	(146)	306	20		中
	217	熨斗瓦	K・L-20	-	農込石上	176	212	14		小
	218	熨斗瓦	J・K-24	10T	遺成土	(169)	322	21		大
65	219	熨斗瓦	N-25	-	遺成土	322	347	23		特大
図版 17	383	熨斗瓦	I-24・25	9T 拡張部		(146)	343	24		
	384	熨斗瓦	I-21	8T	瓦集中部掘底	(169)	342	25		
	385	熨斗瓦	I-25	9T	遺成土	293	318	18		
	386	熨斗瓦	J・K-24	瓦集中部	排水溝内	288	323	18		
68	240	鬼瓦	I-20	-	遺成土	(355)	(245)	126		鬼　面
	241	鬼瓦	M-27	-	遺成土. 430	(235)	(311)	103		鬼　面
	242	鬼瓦	I-23	9・21T	排水溝内	(262)	(229)	26		複数接合
69	243	鬼瓦	N-26 他	-	掘乱	(206)	(201)	約 50		6 点接合
	244	鬼瓦	I・J-23・24	-	遺成土	(265)	(194)	約 52		4 点接合
	245	鬼瓦	J-28. I・J	排水溝内	掘乱	(213)	(201)	約 45		2 点接合
	246	鬼瓦	J・K-24		石畳内	282	(224)	-		2 点接合
	247	鬼瓦	J-20	-	426 埋土	(122)	40	32		鬼　角
	248	鬼瓦	L-27	-	426 埋土	(128)	46	38		鬼　角
	249	鬼瓦	L-27	-	埋土	(106)	40	36		鬼　角
	250	鬼瓦	L-27	26T	遺成土	(92)	38	35		鬼　角
	251	鬼瓦	L-27	-	442 埋土	(78)	40	30		鬼　角
	252	鬼瓦	M-27	-	遺成土	(60)	32	29		鬼　角
	253	鬼瓦	J-23	21T	遺成土	(40)	(46)	(22)		鬼　角
	254	鬼瓦	N-25	22T	遺成土	-	(38)	-		鬼　面
70	255	鬼瓦	K-27. 柵棟内側	-	-	333	434	約 46		鬼瓦 1 号
	256	鬼瓦	K-24	-	瓦集中部	303	345	約 39		鬼瓦 2 号
図版 19, 20	390	鬼瓦	M・L・I・J	-	砂利	285	357	(91)		鬼瓦 3 号
図版 21	391	鬼瓦	J・K-21	8T	石畳内	611	(881)	35		鬼　角
66	223	伏間瓦 1 類	-	-	-	(166)	309	20		カードなし
	224	伏間瓦 2 類	M-28	-	遺成土	(104)	(69)	18		正河野
	225	伏間瓦 4 類	I-27	-	遺成土	(106)	(102)	20		穂　○○西
73	269	埴瓦	J-20	10T	瓦集中部掘底	(72)	(127)	36		
66	226	軒瓦	調査区 2	3T	遺成土	(201)	(100)	19		
	227	軒瓦	N-26・27	-	遺成土	(206)	(70)	18		
	228	軒瓦	M-26	-	掘乱の下	(192)	(175)	21		
	229	軒瓦	K・J9	-	瓦集中部北	(199)	(98)	18		



第59図 丸瓦